

第7回
教育改善活動フォーラム
記 録

2013年7月20日(土)開催

主 催

教育開発支援機構



目 次

第7回 教育改善活動フォーラムについて	……	1
オープニングセッション		
趣旨説明	教育開発支援機構副機構長	黒瀬 秀 樹 …… 2
開会挨拶	学長	衛 藤 卓 也 …… 3
講 演		…… 4
演 題	： 「学士課程教育において育成すべき主体性とは」	
講演者	： 佐々木 毅 東京大学名誉教授	
ポスターセッション		
平成24年度「福岡大学 魅力ある学士課程教育支援」に採択された 17件の取り組み		……16
クロージングセッション リフレクション		
まとめ、閉会挨拶	教学担当副学長	今 泉 博 国 ……69
参加者数およびアンケート結果		……71

第7回 教育改善活動フォーラムについて

平成25年7月20日(土)に17号館1711教室および1階ロビーにおいて、第7回「教育改善活動フォーラム」を開催した。

フォーラムには163名(教育職員95名、事務職員46名、他大学教職員15名、本学学生7名)の参加があった。

今回のフォーラムでは、平成24年8月28日の中央教育審議会答申「新たなる未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」にもみられるように、学生の「主体性」の育成が近年の高等教育改革の重要なテーマであることをふまえ、「学士課程教育において育成すべき主体性とは」と題して東京大学名誉教授の佐々木毅氏に講演を行っていただいた。

また、続いて行われたポスターセッションでは、平成24年度「福岡大学魅力ある学士課程教育支援」に採択された取り組み(P.16参照)について、ポスターおよび質疑応答による成果報告が行われた。各取り組みについて参加者から質問が相次ぎ、活発な意見交換が行われた。

クロージングセッションでは、取り組み担当者がそれらの質疑応答および意見交換によって得られた知見を生かし、今後の教育改善につなげるためのリフレクションシートを作成する時間が設けられた。

各取り組みの概要、ポスターおよびリフレクションシートについてはP.17～P.68に掲載しているので、取り組み内容や課題の共有を通じて教育改善に役立てていただければ幸いである。

本フォーラムには、学内外から多くの教職員に参加していただき、教育改善に関するさまざまな情報を共有することができ、大変有意義な機会となった。

*この記録には、講演およびポスターセッション、リフレクションの概要、当日回収したアンケートの結果等を掲載した。教育改善のための一助となれば幸いである。

*なお、本記録中の役職名は、平成25年7月20日当時のものである。

オープニングセッション

<趣旨説明>

教育開発支援機構副機構長

黒瀬 秀樹

みなさま、こんにちは。本日前半の進行をさせていただき、教育開発支援機構副機構長の黒瀬です。よろしくお願いします。

さて、当フォーラムは、本学における組織的かつ継続的な教育内容、教育方法等の改善を図る教育FDの一環として各組織の取り組みや成果を全学的に共有することにより、さらなる教育改善に活かすことを目的として開催してきました。

今回のフォーラムでは、本学の学士課程教育の質的向上および教育力の向上を目的に実施しております「福岡大学魅力ある学士課程教育支援」で平成24年度に採択された取り組みに関して、その成果をポスターセッションにより報告していただきます。

近年の高等教育改革において、平成24年8月28日の中央教育審議会の答申「新たなる未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」、いわゆる「質的転換答申」と言われるものですが、こういう答申にも見られますように、学生の主体性の育成が重要なテーマになってきております。今回はそのことをふまえ、「学ぶとはどういうことか」という本を執筆されました東京大学名誉教授佐々木毅先生にご講演をいただくことになっております。

それではさっそく第7回教育改善活動フォーラムを開催いたします。

はじめに衛藤学長より開会のご挨拶をいただきたいと思います。

<開会挨拶>

学長 衛藤卓也

みなさま、こんにちは。暑いなか教育改善活動フォーラムにお集まりいただき、ありがとうございます。教育改善活動というのが毎年継続的に行われるようになりました。教育の質的向上に向けて少しずつ段階的に改善されていっていると思います。

本日は、いろいろな分野でご活躍されている東京大学名誉教授の佐々木先生にお越しいただきまして、基調講演をしていただくことになりました。

佐々木先生は、1942年秋田県生まれで東大の法学部を出られて、卒業されてしばらくして若い時にもう著書を出されています。西日本新聞や日経新聞でもよく目にしますが、いろいろなところで論説を書かれたりして、オピニオンリーダー的存在としてご活躍されています。政治学の泰斗でもいらっしゃいますが、政治学以外の分野でも幅広い知見をお持ちですので、今日のテーマについて楽しみにしているところです。

福岡大学における主軸の機能は教育だと思います。教える主体として我々がおり、教えられる主体が学生という図式が成り立ちますが、最近の大きな流れとして学生の主体的な学びというものが注目されています。教える側の我々主体がアクティブで、教えられる学生側がパッシブというようにかたちとしてはなっていると思いますが、みなさん方の活動が教える側のアクティブさをさらにアクティブに充実させる意味合いを持っていると思います。学生側はパッシブに講義を受けていると思いますが、最近では先生を巻き込んだかたちでパッシブなところがアクティブになっている、少しずつそういうところに向かっていると思われま

私自身もそういう図式を描いて人材育成ということを考えているのですが、パッシブな中のアクティブというものをもう一歩右側のところに矢印をしますと、やはりそれを越えたところにある本当のアクティブとは何かという、学生の主体的な学びのところに繋がたらいちばん望ましいのではないかと思います。そういう本当の意味でのアクティブというところに学生の学びが結びついていけばいいのではないかと思います。佐々木先生がそういうお考えか、あるいは別のお考えかどうか、お聞きしたいと思っております。

また、本日は教育改善活動報告があります。活動報告というかたちになっておりますが、ますますこれからも内容が充実されますことを祈って簡単ですが挨拶に代えさせていただきます。

佐々木先生、本日はどうぞよろしくお願いたします。

講演

演題：「学士課程教育において育成すべき主体性とは」

講演者：佐々木 毅 東京大学名誉教授

佐々木でございます。本日はお招きいただき、ありがとうございました。

ただいま司会の方からご紹介がありましたように、教育ないしは大学に関わるいろいろなことをこれまで経験してまいりました。法科大学院のことについても先ほどご紹介がありましたが、その話は今回は抜きにして、もっと抽象的な話になるかと思います。私は教育学者ではありませんので、教育学者からすれば専門外の間がこんなことを書くのはいかがかと思われているかどうかは知りませんが、そういう意味ではあえて越境的な観点から少し問題提起をさせていただきたいということでもありますし、この本自体が極めて越境的な話を含んでいるわけでございます。

なぜこのようなことを考えたのかといいますと、いろいろ契機はございましたが、最後の引き金になりましたのは、やはり2011年3月11日の大震災でした。私にとりましてはある意味大変ショックであり、ある意味我々の世代が終わったなあという様々な感慨を私に与えた大変事、大地震であり、そのあとに続く原発事故というものを見て、特にその感を深くしたわけでありますが、思い返してみますと、当時科学に対する信頼、もっと言えば科学というより科学者に対する信頼ということが非常に多く議論されました。2011年の夏頃見た文科省のデータによりますと、科学に対する信頼はそれほど下がらなかったわけですが、科学者、技術者に対する信頼が急落したということのようです。

科学とか学問は非人格的な存在であるように見えつつも、実はそれを担っているのは人間であり、科学はいいが科学者はだめだという議論がいつまでも成り立つとは思えないのでありまして、その意味では問いかけられているテーマは非常に大きかったというように思います。

私の本も、今日のお話も、その意味で言うと人間の方に即した話ということになるわけでありまして、様々なご専門がある科学の内容について語るべき知識は持っておりませんので、専ら、人間、科学者の問題、それから科学を学ぶ学生の問題、そういった方面、つまり人間に焦点を合わせてお話をさせていただきたいと思います。

つくづく思いましたが、学ぶということは文脈抜きでは理解できないということです。学ぶということには、大なり小なり歴史的な文脈と社会的な文脈というものがつきまとう。それはなぜかと言いますと、やはり我々人間が歴史的、社会的文脈の中で生きているからでありまして、我々が生きていること、生きていくことと学ぶということは表裏一体の関係にあると思っておりますが、その意味では学ぶことの歴史的、社会的文脈を考えるのが当たり前の話であろうと思うわけです。これは、私のように社会科学をやっている人間にとっては、ある意味当たり前なのでありますが、この意味でのベストセラーと言ったら何かといいますと、みなさんご存知のように福沢諭吉の「学問ノススメ」が最大のベストセラーでしょうし、おそらく日本の歴史の中で最も大きな変革期のひとつに際し、これ

を学問との関係で非常にシャープに問題提起した結果、当時としては想像を絶するようなベストセラーになったし、ある意味では精神的な飢餓感を満足させてくれた非常に重要な作品だったと思います。今読みましても彼がその頃書いたものは非常に鮮烈であり、かつ歴史的、社会的文脈というものをぎりぎり意識させて、あなたはこれから何を学ぶべきなのか、あるいは我々は何を学ばないといけないのかということをも極めて挑戦的かつ明晰に分析したものだと思っています。

しかし、あらゆる時代がそうではないし、あらゆる社会状況もそうではありませんから、だんだんルーティン化してくる。そうするとみんなそうしているからそうするという風に一生涯生き延びるといふか生きるといふ人生ももちろんあるわけです。しかし、少し考えてみればわかりますように、歴史的、社会的文脈というものはそんなに安定したものではありません。我々が極めて安定したものだと思っていた文脈も、たかだか20年、30年ぐらいいろく続かないと覚悟しておいて間違いないだろうと私は思っています。ましてや、我々にとって好ましい歴史的、社会的文脈とはそう続かないと思つて物事を考えるのが間違いないのではなかろうかと思つています。これは人によっていろいろな考え方がございますが、歴史的、社会的文脈がいつも同じであるとか、常に自分たちにとって快適な文脈が提供されているとかいう根拠のない話はそろそろやめにしないといけないという気持ちをおそらく我々の多くが共有せざるをえないようになってきているのではないのでしょうか。

したがって、学ぶということを考えるとき、あるいはそこでの主体性ということを考えるときに、同じ認識を共有する必要はないかもしれませんが、ある種の歴史的、社会的関心、事柄、あるいは自分の位置、あるいは家族というものがあるかもしれませんし、いろいろなものがあるかもしれません、こういったことについて考える機会が全くないということになれば、先ほど衛藤先生からもお話がありました主体性の問題というのはなかなか出てこない、右から入ってすぐ左へ出てはいかないにしても、頭の中で2~3年留まっているだけという話になってくるだろうと思つています。

そして、多くの教育学者が強調していますように、やはり長く見れば明治時代、短く見ても戦後何十年とは違うサイクルが、好むと好まざるに関わらず動き出しているということは否定できないだろうと思つています。

そのことに関して、私は日本の学生、特に学部学生はある意味難しい学士課程を送っていると思つています。というのは、我々の世代からしますと、我々の世代は黙っていても嫌な現実がたくさんありましたし、悲惨な現実や厳しい現実もたくさんありました。否応なしにいろいろなことを見聞せざるをえない中で子ども時代を送ってきた世代であります、その後日本の経済が、我々が学生時代考えつかなかつたほど大成功をおさめ、経済的、社会的な安定性が日本の歴史の中でいい意味で長い期間続き、非常に力強いものとしてイメージされるという時代があつたものですから、非常に人工的な環境というものがどんどん増えて、成長したといえます。受験産業というものはある意味人工的な産業だろうと思つておりますが、そういう環境は知っているのですが、自分たちが人間として生きていくこの時代や社会について、就職活動するまで極めて接点が少ないといふか覚悟を決めさせられるような出来事に出会うという可能性が非常に少ない。その意味で、大学の学士教育はかたちは昔と同じようなかたちを取つておりますが、内実、特に学生の人間的ないろいろな条件というものはかなり激しく変わつてきていて、40年、50年前とは比較にならないような状況が出現しつつあるように見受けられるのであります。

私たちの世代からすれば、主体性のある教育、あるいは教育として主体性を確立しようという話については当たり前の話であってシンポジウムをする必要はないと思うのですが、そういうことを問題にしなければならないようになってきた。ある意味、非常に人為的な仕組みはどんどん発達し、社会の現実との間にそれがバリアになって接点がだんだん希薄化していく。ところが、就職活動ということになると否応なしに巻き込まれざるをえない。そういう意味で気の毒な環境に置かれているとも言えるでしょう。ですから、大学というところで、この歴史的、社会的な文脈についてどのようなメッセージを学生と教員とがある程度共有するか、あるいは共有できないまでも少なくとも意識化するかということは今この日本において非常に大事なテーマのひとつなのではないかと思います。

明治時代ですと「学問ノススメ」を読んで、こういう文脈なんだと理解して、では自分はどうしようという話になったわけです。今は本を書いてもあまり売れませんから学校でやるしかないわけでありまして、また一方的な講義ではない様々なツールが今では用意されていますから、演習にしろ、これから紹介があるようございませうが、学生を巻き込んだかたちでのいろいろな取り組みが行われたりしておりますから、機会はいろいろあるかと思いますが、やはり日本社会もかつてとは同じではありませんし、将来も同じである保証は全くありません。それどころか世界に先駆けてこれだけ急速に高齢化が起こっている国は他にないわけでありまして、その意味では日銀総裁ではありませんが、異次元の社会に入り込んでいく覚悟をしなければいけないということでもあります。あまり恐ろしげらせてみんなどこかに行ってしまうと困りますが、全体として見ると迫りくる現実、あるいは社会的文脈に対して、政治を含めて非常に呑気なのではないかと私は思っております。そして、そのことを若い人は直感しているのだらうと思います。しかし、大人たちも呑気なので、まあいいかと思っているかもしれないし、あるいは考えたくもないと思っているかもしれないし、これはわかりません。

しかし、まず歴史的、社会的文脈をどのように教育のプロセスの中で理解させるか。これは30歳になってから言っても遅いのです。10代から20代の橋渡しの頃にどういった方向感覚を持つか、あるいは人格的アイデンティティを持つかということはそれなりに大事なことでありますので、まさに学士課程というものはその意味で極めて肝心の時期だろうと思います。そういうことについて具体的にどのようにこなしていくのかということは、現場におきましていろいろな考えが出てきうらと思っておりますので、その具体的なあり方についてはおそらく福岡大学におかれましてはこれからも工夫していかれると思っておりますが、できれば少し長めのスパンで若い方に刺激を与えることによって、自分たちの立っている位置のようなものについて、一定の座標軸あるいは考える材料を提供するということが今日非常に必要になっているのではないかと思います。もちろん「学問ノススメ」を読ませてみてもよろしいかと思っております。手段はいろいろあつてよいと思っておりますが、結局、「学ぶことは生きること」だということからすれば、今申し上げたことは何も異様な話ではなくて、むしろ当然なされるべき前提条件に近いものだと言えるでしょう。それを本当は高校までやってきてもらえれば、大学では専門的な話をすれば済むのですが、さてそうになっているかどうかということについては、先生方も学士課程に入られた学生の実態に基づいていろいろな工夫が求められる段階に入ったのではないかと思っております。

さて、私も学ぶとはどういうことかと考えたときに、実はどう考えたらいいのかわかりませんでした。いろいろな人がいろいろな言葉でそれを表現します。「勉強しろ」というのもあるわけですし、勉強すると学ぶとは同じなのかということや、研究すると学ぶとはどう違うのだろうかとか、いろいろ類似の言葉を思い出しながら、けっこうやっかいなテーマだなあと思いました。



「学ぶということはこういうことです。」と言ったときに、みんな違うことをイメージして「学べ」と言っている。言われた方は何を言っているのかわからないものですから、話がいつも空回りする可能性がある言葉ではないかと思ったわけです。特に、これはここだけの話ですが、何かというと不都合なことがあると教育が悪いというのが世間の責任転嫁というか言い方なのです。たしかに教育も悪かった。それは九九ができなかったから悪かったのか、何がどうしてそうなったのか。いつもお互いが自己満足で言葉を発しているという世界があるように私には見受けられます。

そこで、私は先ほどの紹介にもありましたように、素人考えで少し整理してみようかと思ったわけです。まずひとつは「お勉強」という段階です。これは手本があって答えがあってそれを学ぶ、あるいは勉強する、繰り返し習得する、間違えないようにルールを適用する、といったような段階を我々は普通「勉強」と言っているわけで、小学生とか中学生とかいうのはまさに典型でありまして、最後は受験までいくかもしれませんが、「学ぶ」ということは「教え込む」ということとまさに表裏一体の関係になっているような世界だろうと思います。これは場合によっては詰め込み教育だとかいうことでよくないという批判を浴びることがありますが、何も詰め込まないのがいいのかと言われれば、これはこれでまたおおいに議論の余地があると思います。しかし、その手の「学ぶ」ということはあるだろうということがひとつであります。

ところが、学士課程ぐらいになりますともう少しレベルが違ってきまして、私の言葉では「理解する」という言葉を使ったのですが、とにかく答えが入っているというレベルから、なぜこうなったのかとか、なぜこうなったと言えるのかとか、もう少し大学風に言えば少々理論的な話が絡んでくるのが、この「理解する」という段階ではないでしょうか。なぜこのようになっているのか、なぜこのように言えるのか、なぜ先生はこのように言うのか、その根拠は、という話です。これは、大学、特に学士課程において非常に大事な教育テーマだろうと私は思っております。多くの大学でそんなに違うことを教えているのかどうか私にはわかりませんが、私の専門である社会科学系で言えば、新聞にこう書いてあるのはどうしてこう書いてあるのだろう、なぜこのように書くのだろう、なぜこのように分析するのだろうというような、新聞が読めるようになるという少し語弊はありますが、新聞に書いてあることの根拠をそれなりに理解できるようになる、細かな専門的な話はそ

それぞれの領域でレベルがいろいろありますから全てがわかるわけではないでしょうが、某新聞が読めるかということのひとつのメルクマールとして使うという先生が中にはいますから、これはひとつのメルクマールと言えるかもしれません。ところが最近の学生は新聞を読みません。ですので、メルクマール自身が消えてしまったというのが新しい教育環境としては必ずしもいいことばかりではないし、少なくともこちらとしては大変不便な話で、「この新聞を読んでここに書いていることがわかる？何を言っているのか説明してごらん。どうしてこうなるの？」と問いかける、これは教師として非常に楽なツールなのですが、これもできない。ですから、逆にわざわざ新聞を持ち込んで使って読めるようにする。特定の新聞を挙げると差し障りがあるかもしれませんが、例えば日経新聞のような少し理屈っぽいものをきちんと読めるようになる。法学部で読めるようにならないといけないのか、経済学部で読めるようにならないといけないのかなど、そのあたりは私にはわかりませんが、少なくとも、単にこう書いてありますと言うのではなく、なぜそう書いてあるのか、どうしてそのように言えるのかということが説明できなければ困った話なのであります。非常に肩肘張った言い方をしますと、学士課程においては理論ベースの話に接点を持つ必要があるだろう、あるいは共通に持たないといけないだろうと思います。

それがあって諸学が連なっているということではありますが、私のような領域の人間でもそうなのですが、日本は非常に授業の専門化、分化が進んでいます。その意味ではものすごくたくさんさんの授業が提供されている。この大学がどうかはわかりませんが、私が前いた大学ではそうでした、常勤の先生よりも非常勤の先生の方がよく働いていると言えるぐらいにたくさん授業がありました。「〇〇政治」「△△政治」…とたくさん並べる。そうすると極端に言えばいくらでも、30ぐらいはすぐできます。そういうものはある時期以降カフェテリア方式といって、非常に進みました。それは面白いと思いますし、それなりに物知りになるということは悪いことではないのですが、肝心の理論的なことに関わる科目は、意外と先生方も教えたがらない。「自分の専門はここです。」「ここは私の専門ではありません。」というようなことがまま見られます。我々政治学の分野では、昔は「政治学原論」という講義があって、東大の場合では明治23年に最初にできた第一講座というもののひとつなのですが、教える人が来ない。それよりは「〇〇政治史」や「〇〇思想史」などといった科目に行く。そして原論は誰も教える人がいないということもありましたし、原論の人はみんなに関わることを教えないといけない。そうすると、こうやってくれ、ああやってくれという要求はいろいろきて、受け入れないといけない。しかし、はっきり言ってどれだけ感謝されているかはわからないということが無きにしも非ず、です。そんなことだったら「政治原論」を「日本政治」と取りかえようかということを考える人も出てくる。しかし、日本政治を分析すれば政治の理論的な部分の教育ができるかと言えば、個人的にはあまり賛成しがたいところもあるわけでした、そういった理論的なことは領域によって様々なレベルがあるかと思いますが、やはりそこにこだわるのが学士課程教育のメルクマールではないだろうかと私は思っております。この本ではあまりそういうことは書いていませんが。

つまり、そこは社会は教えてくれない領域なのです。それ（理論的な部分）を踏まえたうえで何かを分析したり、記述したりしているわけですが、どこかでそれを可能な限り教えないといけない。ただし、我々のように特に社会を分析の対象にする領域ではいつも同じではない。いろいろな点でバリエーション、変化が起こってくることは避けられません。

一定の変化はもちろんありうると思いますが、どのように物事を捉え分析するか、あるいは分析視角としてどのようなものがあるのか、あるいはこの分析視角を落とせば何が見えなくなるのか、あるいはこれを取り入れれば何が見えてくるのかといった教え方はいろいろあると思います。このあたりが、実は諸外国の大学生と比べて日本の大学生が弱い部分だと思っています。それ以上の細分化された部分については、けっこう強い。ただ、そこにはまった話しかなかなか展開できない。私は東大で学生と時々海外に行くのですが、「君は何やっているの？」と聞くと「天文学の何とかかんとか…で、私はその話だったらできるのですが、それ以外の話ではできません。」という学生がいて、それでは少し困るのです。他の大学の人や外国の大学の人と話をするといったときに、そのことに興味を持った人が誰もいなければ何の話にもなりません。

私は、日本は専門分化についてはあまり心配しなくても進むだろうと思っていて、問題はそのベースになっているものをどのように育むかということで、これが実はコミュニケーションのベースにもなるので、国内においても海外との関係においてもベースになるものです。ここをきちんと学士課程教育の中で意識して教える必要はないだろうかと思えます。私は教育の現場を離れたものですから、今頃そういうことを言っても仕方がないのかもしれないかもしれませんが、つくづく思います。そこはある意味繰り返し繰り返しかなり長いスパンで同じことを言っているというような性格を持っている。ですから、新しい話はあまり出てこない。例えば民主主義について毎年毎年新しい話が出てきたら困るわけで、ちょっとした部分的なバリエーションが出てくるとかいうことはありますが、そんなに新しい話が出てくるわけではない。しかし、ある意味で繰り返しですが、それをもとにいろいろなことが組み立てられているのだということを、いろいろな質疑やディスカッションを交えながら鍛えていく、あるいは意識化させていくということが非常に大事なように感じます。

ただ、そうは言っても我々研究者は、部分的、専門的にはいろいろな意味で新しいバリエーションを発見したいとか、新しい分析視角を示したいとかいうことは体質的にみんな持っていますので、部分的に、ここはそう言われているけれど違うのではないかとかいう疑いといいますか、少し違う角度から見てみようという話になりますと、おそらく学部学生では難しいレベルの話になるかもしれませんが、いずれ研究者や大学院になればこういったレベルの話になっていかざるをえないということになります。その結果として何か新しい像を示すことができますかということが問われるのが博士論文であり、そのレベルになるとただ疑問を出しているのでは仕方がないわけで、結論として新しい知見を出すということが当然求められるだろうと思います。ですから私の本では「知る」「学ぶ、勉強する」「理解する」「疑う」それからそれを「超える」、つまり新しいコンプレックスを示す、このように自分は考えるということを示すということですが、このように循環しながら、新しいことを示したけれども、またこのようにも言えるのではないかとかいうことでまた始まるということもあるかと思いますが、研究者のあり方としては無限に続いていくのだと思います。

このような意味で、共通の材料である理論的なものをベースにしなが、それを各人がどのように理解し、こなし、消化し、自分のものとしてできるかということが単なる主体性ではなくて、大学で学んだ者の主体性であるという実質的な意味を持たないといけないのは言うまでもありません。研究者というのは主体性の塊であるはずであり、そうでないと困ります。年を取ってくるとだんだんどうでもよくなっていくということは

あるかもしれませんが、少なくとも若い時、ある時期までは、あるいは最後までいろいろなことを探求しながら、ここはやっぱり違うのではないか、こういう風に考えたら、こういう証拠もある、こういうデータもある、こういう風に全体を捉えたらどうだろうか、あるいは今までの理論的な全体もまた捉えなおさないといけないということになるとトーマス・クーンの言うパラダイム転換になるわけですが、毎日パラダイム転換をしていたら世の中が困るので百年に一回や何十年に一回起こるのだと思うのですが、研究者というのは少なくとも知識についての主体性というものを持ち続けるということが少なからず大事な条件であるということはいままでありません。

学生さんに、特に学士課程の学生さんにそれを全て求めることはできませんが、いわゆるフンボルト的の大学という言葉をお聞きになったことがあると思いますが、こういう研究者の後姿を見て学生もそれに倣うというのが大学のあり方であるという議論が日本でもあったわけでありまして。この中には一片の真理が含まれていると私は思うのですが、しかし今は後姿を見ろといってもどこを見ていいのかわからないとかいろいろややこしい話になりますからなかなか説明が難しいのですが、我々の頃にはそう言えばなんとなくわかったような気になったものですが、それもあながち間違っただけではなくてその中に重要な真理が含まれているということをおも否定するものではありません。

ただ、ここで大事なことは「理解する」さらには「疑う」、あるいはもっと新しいことを考えるといういろいろな知的作業自体は、非常に俗な言い方をすると見えないのです。「見えるもの」と「見えないもの」という世界がやはりあると思います。そして見えるもの以外はない、あるはずがないと考える人もいると思います。見えないものについて理解するか言っただけで仕方がない、意味がないのではないかと、こういう風に物事を見ている人は大学の中にはいないと思いますが、世間にはけっこう多い。最近には特に「見える化」、少なくとも私はあまり好きな言葉ではないので「そんなに目に見えてたまるか」、見えないからこそみなさん方もうまくいっているのかもしれないし、「何でも見える化されてはたまらない」と個人的にはよく思うのですが、そこで「見える化」できると思っているのが問題といえば問題です。そして見えないもの、もっと極端に言うとも見えるものはお金になるということにけっこう直結するのです。見えるものはお金になる、見えないものは見えない、こういう話がしばしばまかり通っている。

ここで「学ぶ」ということは、全体としていずれ見えることはあるかもしれないがそれ自体は見えないスペース、世界をどのようにして我々は営んでいるか、あるいはその中でそういうものを糧にして生きているかという話です。私が見ている非常に心配なのは、「見える化」、見えるものはお金になる、お金にならないものは見えないことにしよう、そんなものはあるわけがない、意味がないというようなロジックにいかにか大学として巻き込まれないか、大学もある程度はお金がかかりますからお金は必要なのですが、教育というか「学ぶ」ということについては、逆に言えば見えないものをいかに充実させていくかという作業が結局教育であります。教育というものは見えないものであり、見えないということはどういうことかというといくらでも大きくできる、いくらでも広げることができる、そういう世界なのです。大学に奉職して、特に学士課程の学生を教育する際には、少なくともそういうことを気づかせるということが大事だろうと思います。

見えるもの、お金になるもの以外興味ありませんということであれば、何のために大学に入ってきたのかという話になるわけで、もちろんそういう人が世の中にも致し方あ

りませんが、待てよと一歩二歩それを噛みくだいたり、咀嚼したり、あるいは見直したり、批判したり、そしてそのうえでどう考えたらいいのかという見えない世界の奥行きづくりみたいなことが最後の拠り所となるものですから、非常にこれは外に対しては説明しにくい。向こうは「見える化」しろ、見えないものはだめだというロジックで来ますから、非常に難しいところでありまして、教育というものの持つ宿命ではないかと私は思っています。しかしやはりそこにこだわりたい、あるいはこだわるべきだろうと思います。もちろん教育の現場ではレポートを書かせたりなんかして、それを見えるように努力することはありますが、その奥にどれだけの考えとどれだけの知的なあるいは精神的な作業が広がっているか、どれだけ大きなものがその背後に隠れているかということに対して、目配りをする努力が大事であろうと思います。主体性という問題は、最終的にはおそらく目に見えない世界というものがどれだけ形を成しているのか、あるいはどのように形を成しているのかということと結びついているように思うからであります。

いずれにせよ教育の世界は、社会の使っている言葉と間尺の合わない言葉がいろいろあります。ですから向こうのペースに乗ってしゃべってしまうと平板な話になってしまって、全部向こうのペースに乗せられてしまうといったことがあります。これをどのように表現するかは難しいのですが、少なくとも私自身は、福沢諭吉が明治の初めに、牛鍋を食べ、洋服を着て、電車を買ってきて新橋～品川間を走らせる、これが文明開化だという人がいるが、私はそうは思わない、無限に広がり、無限の可能性を持っているものは何かと言えば人々の気風、気持ち、エートス、精神性、当時の貧しかった日本が頼るべきものはこれしかなかったという意味ではそうだろうということはもちろんあると思うのですが、それだけではなく、それを起点としてとにかくやるしかないし、ただお金を出して買ってきて動かしているということを以て、文明開化と言うのであれば、こんなものは非常に難しい問題を易しい問題にすり替えてやっているに過ぎないと言っています。その具体的な中身についてはともかくとして、今申し上げた話はそれに近いものだと思います。ですから目に見えないものをなかったことにしようとかいう話とどのように向き合うのかを考えることは、「学ぶ」ということを考えるときに学生を含めてどのようにイメージを作っていくのかというのは大事な点ではないかと思えます。

それから、教育をされる側の主体性という問題も出てきます。私たちが学生時代に先生の話聞いて一番面白いと思ったのはどういうものかと言いますと、シラバスに書いてある内容は面白いものもあるし、面白くないものもあり、そんなものだろうと学生は聞いているのだと思いますが、興味があるのはこの先生はなぜこんなことをやり始めたのかとか、どうしてこのことにこだわっているのだろうとかいうことだろうと思います。中には、もっぱら先生の奥さんはどういう方ですかとかそんなことばかり言っている学生もいましたが、それはちょっと別にして、何でこの先生はこういうことにこだわって、こういうことを取り上げているのかということ、学生にとっては実は非常に興味があるものだろうと思います。つまり、それはある種の主体性に関わるものであり、有り体に申せば、とにかく我々が知的に格闘する、あるいは格闘すべき対象は無限にある中でなぜこういう問題を取り上げるのか。こういう話はある意味で主体性の問題を考えるときのひとつの、模倣するというわけではありませんが、Example としては非常に生々しい、存在感のある話に属するのではないかと思います。

当然、学生の主体性を涵養しようとされる先生方自身がこれまでの長い時間の中で主体



性の問題と取り組んでこられたはずでありまして、先ほどの私の言葉で言えば、先生はなぜこのような問題にこだわっているのか、なぜずっと追求しつづけているのかということを知りたいというのは、その意味では同じことだと言えるわけでありまして。先生からすれば迷惑な話かもしれないですし、言いたくもないし、恥ずかしい話もあるし、失敗談な

どもいろいろあるかもしれませんので、なかなか難しいことではあるかと思いますが、シラバスに書いてあることをただただ話す機械のように見えるというのは、それだけで、主体性うんぬんという話より注入するという感じになってしまいますので、思うようにはいかないでしょうし、それを拒否する学生もいるでしょうし、試験が終わるとすぐ忘れてしまうということになるかもしれません。

しかしいずれにせよ、教育する側の主体性の問題というものをのべつ表に出す必要はないかもしれないとは思いますが、どのように上手に伝えるかということは工夫されるべきですし、もったいない財産なのではないかと私自身は思っております。

そして我々研究者は、私は社会現象を相手にしていますので特にそうですが、やはりいろいろなことを工夫することによって違うものが見えてくる、そうするとそれまではもうこれでやりようがないと思っていたところが穴だらけだったと言うと語弊がありますが、ブラインドスポットとしてこういうことがあったということが見えてくるとか、そういうことがまさに見えない力の持っている見える力、見させる力だろうと私は思いますので、その意味で研究者としてのモチベーションというようなものが学生に、先ほどのフンボルト的大学のよう後ろ姿を見てというようには今はいきませんが、少なくとも上手に伝わるといってもまたひとつの伝え方ですし、刺激を与える非常に大きな財産ではないかと思っております。

いろいろなことを申しあげましたが、学部段階においてどのような工夫をするかについては、実は各国の大学が今一番悩んでいることなのであります。大学院をどうするかということはある意味で単純です。目標がはっきりしていますし、何をやらなければいけないかということも、できるかどうかは別にして、それなりに議論の余地はありません。ところが、学士課程をどうするかということについては、いわば手探り状態で、各国それぞれ伝統がありますし、日本についても我々の親の世代によく旧制高等学校はよかったという話を聞かされたものですが、いろいろな伝統があります。役に立たない人間ばかり育成していると文句を言う人がいるかと思うと、教養教育をやってほしいと言う人もいるので、大学としては何をどうしたらいいのかよくわからないといったことは無きにしも非ずだと思います。そういう意味で、学士課程をどうデザインするかということは、最もチャレンジングなテーマでありますので、ぜひ福岡大学は福岡大学なりに工夫して、ある種のプラクティスを確立することを心から祈念したいと思っているわけでありまして。

そして、学生に対して主体性の問題は何かということ、ある時代までは就職のところで終

っていたのです。就職してしまうと目標達成で、あとはその組織の中で、という話になるわけですが、今ももちろん定年まで勤められるような組織もないわけではないですが、何かだんだん雲行きがあやしくなってきた、途中で組織がなくなるということも含めて、自分の選択肢との関係もあって、そこから出るということもいろいろあると思います。その意味で、昔と比べて「学ぶ」ということがより長期にわたるようになった。そして極めて重要なのは長生きするようになったということです。65歳以上の人が年金をもらってただただ毎日遊び暮らしているというのであれば、これはまことに具合の悪い話であり、少なくとも何らかのかたちで生き生きと、それなりに新しいことに挑戦しながら生きているという年輩者になってもらいたいというのが、若い人たちのせめてもの願いだろうと思います。そういう意味では何かに興味があり、何かにこだわって、何かをもう少し勉強したいとか、昔から最後はみんな俳句をやると言うように俳句でもけっこうですが、何かを求めている、何かを次に考えているというような人生を否応なしに送らざるをえない。あまりにも長いものですから。

人生50年とか60年とか言っていた頃には必要なかったのですが、これからは就職と退職では終わらず、就職して働きながら何を考えるか、さらには終わったあと何を考えるかというようなかたちで主体性の問題が持つ影響は時間的にどんだんのびてきていると私は思っております。その意味で、年老いた世代の生き方も含めて、この「学ぶ」といった問題は日本社会において大きな社会的なテーマになりつつあるのではないかと。私もこのような「学ぶとはどういうことか」というテーマで、世代を超えたローカルガバメントの講演会に呼ばれるのですが、そこに来られるような方々はだいたい私より上の世代なのですが、いろいろなことに興味を持っていますし、もっと知りたいと思っていますし、あるいは世の中のために何かしたいと思っています。このような気持ちを持っている方が非常に多く、その意味では、学士課程でどれだけ見えない精神的な刺激を受け、発酵させたかということは、その後の、例えば80歳まで生きるとして50年、60年にとってもものすごくインパクトのあることだと思っております。私の体験に即してつくづくそのように思っております。その意味では、残念ながらもあまりにも就職活動がその中に入り込んできているというのは、私はまことにゆゆしきことだと思っております。

それも含めて考えますと、非常に厳しいなかで学生たちは学士課程を送っている、そしてそこでどれだけのことをなしうるのかということはかなりチャレンジングなテーマだろうと思います。先ほど申し上げましたように、この時期の持っている人間の一生にとっての大事さに鑑みまして、今後も工夫をされて、できるだけそこを充実したかたちで次のステップに進んでいけるように工夫を凝らしていただきたいと思っておりますし、またそれがお出来になるのではないかと思っております。我々も同級会やクラス会がありますが、何にも興味を持たなくなった人というのはどうしていいかお互いに困ることがありまして、私は今年70歳なのですが、面白いもので、18歳のときと全然変わらない人もおりますし、全然面影がなくなった人もおりますし、何をしゃべっていいかわからない人もいれば、ものすごく話が面白い人もいます。その意味で言うと、人間の一生の過ごし方というのは嘘がつかないところがあるなあという感じを持っております。

以上、あまりお役に立たない話だったと思いますが、ご清聴ありがとうございました。時間が参りましたのでこれで終わりにします。

【質疑応答】

<参加者> 今日には有意義なお話をありがとうございました。大学の学士課程というのが見えないものに関わるべきで、社会が要請してくる土俵とは別のところで大学の学士課程教育というものがあるべきだというお話を共感を持ってうかがいました。ひとつおうかがいしたいのは、そのような見えないものと主体性がどういったかたちで繋がるのか、私にはまだ今一つわかりませんので、ご説明いただければと思います。

<講演者> あえて気取ったことを申し上げれば、見えないものを多く抱えている、というか多くという表現自体「見える化」になってしまうのですが、ある種のマイクロコスモスと言うのか構造化された自己と言うべきなのか、そういうものに繋がるものを私は見えないものということで表現したかったというのが意図です。ですから、いろいろな人がいますし、いろいろなあり方があるかと思いますが、早くからそういうものを持った人もいますし、だんだん形成されてくる人もいますので、一概には言えないと思いますが、学部時代に種をまかないでおいてそれからというのは、やはり非常に大事なチャンスを失する可能性が大きいのではないかと思います。このように私自身が思っているものですから、その意味ではそこで全てが確立するということでは必ずしもないのですが、しかしそれに向けての可能性が育ってくるような機会を学部時代に先生方と学生、あるいは学生同士も含めて、見えないものを広げる、と言うとまた言葉が「見える化」になってしまうのですが広げていただきたい。

古くから哲学者がいろいろな表現で言ってきたことを私流に言ったのですが、いずれにしても、もし日本社会に一番問題があるとすると、戦後あまりにもみんな「見える化」に走りすぎてしまって、結局見えるもの以外ないものにしてしまったら実はいろいろあった、あんな大地震が起こるとは思わなかった。ですから、見える世界というものは、常に相対化される危険性を秘めているものですから、そしてそういう見えるものがある種の前提の上で成り立っているということを見させてくれるのが見えない世界であるという意味では、戦後の政治を含めて日本社会は非常に「見える化」ないしはそれに繋がる言葉や文化など少し大きくなりすぎたのではないのでしょうか。逆に言うと、先ほど福沢諭吉の言葉を引用しましたように、ああいうメンタリティーの方がこれから必要であり、何より財政が赤字でお金がありませんので、見える話ばかりしてもらっては困るというのが私の政治に対する素朴な印象です。あれをしてくれる、これをしてくれるという話ばかりが出てくるのですが、これもおそらく本人たちが思っている以上にターミノロジーが限定されてきた中でみなさん生きてきたからではないかという感じがしております。十分な説明にはならなかったかもしれませんが、勘弁してください。

<参加者> ありがとうございます。ただ、主体性もまた見えないものですから、主体性という見えないものについて語るということにはどうしてもパラドキシカルなことがつきまとうのかもしれませんが。先生のお話の中でも一方で見えないものの大切さを言おうとするとどうしても見えるというかたちになってくるというあたりが、私は哲学を勉強しておりますので、非常に苦心なさってい

ることがよくわかりました。ありがとうございました。

ポスターセッション

平成24年度「福岡大学 魅力ある学士課程教育支援」に採択された17件の取り組み

《重点教育支援》

取組番号	取組名称 (上段:主題、下段:副題)	取組主体	ページ
テーマa:総合大学としての多様な初年次教育の展開			
①	現場体験と表現重視のキャリアデザイン教育 初年次教育で夢を探し、新たな人生のスイッチを入れよう。	経済学部	P17
②	工学部初年次教育における学習意欲の向上と工学基礎教育の充実 ものづくりの出会いといつでも学習サポート制度	工学部	P20
③	理工系学生の基礎力パワーアッププログラム	理学部	P23
④	「命の大切さを実践する」学士課程の創設	医学部	P26
テーマb:教養教育を起点とする学士力の保証			
⑤	フィールド調査主体の問題発見解決能力育成 地域および企業との共同研究を通じた社会人基礎力と学士力の実践的育成プログラム	経済学部	P29
⑥	ココロとカラダのウェルネスプログラム 心身の活性化と交流のためのスポーツプログラムサービス	スポーツ科学部	P32
⑦	教職志望学生への基礎学力向上プログラム	教職課程教育センター	P35
⑧	英語学習への動機付けと英語コミュニケーション能力の向上を目指す実験的試み LERC English Challenge Program	言語教育研究センター	P38
⑨	実践的教養教育の構築 アカデミックスキルを涵養する	共通教育センター	P41

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称 (上段:主題、下段:副題)	取組主体	ページ
⑩	コラボレーション型キャリア教育の導入によるビジネスリーダーの養成	商学部 商学部第二部	P44
⑪	仁川大学校との交流セミナー 異文化と対峙し、自己と他者を見つめ直す	商学部 商学部第二部	P48
⑫	情報技術を用いたアジア対応エンジニア教育	工学部	P51
⑬	SGDと早期体験学習の連携による初年次教育の充実 学生指導と専門能力啓発の実践	薬学部	P54
⑭	課外教育による総合的学士力の養成 学内外行事参加と専門知識の充実による社会での応用力の涵養	人文学部 東アジア地域言語学科	P57
⑮	体験学習を活用した初年次教育の実践 教育環境の変化に対応した新たな初年次教育プログラムの開発に向けて	人文学部 歴史学科	P60
⑯	科学的国際交流による表現力の継続的実践教育	理学部 物理科学科、化学科	P63
⑰	体育・スポーツのエキスパート育成プログラム	スポーツ科学部	P66

《重点教育支援》 テーマa:総合大学としての多様な初年次教育の展開

取組番号	取組名称	(主題) 現場体験と表現重視のキャリアデザイン教育 (副題) 初年次教育で夢を探し、新たな人生のスイッチを入れよう
①	取組主体	経済学部
	取組責任者	経済学部 教授 阿比留 正弘
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>ベンチャー起業論では、学生にビジネスプランを作成させ、これを年2回のコンテストで発表することを目的として過去14年間実施してきた。地元企業を訪問し、経営者に会い、商品に触れ、社員や顧客を取材することによって、その企業のビジネスプランを調査し発表する取り組みを行なっている。私たちは、ベンチャー起業論の活動を、日本の伝統文化における「守・破・離」で説明している。守で学生は、インターンシップ企業を徹底的に現状分析し、そのビジネスモデルを理解する。これができると破で、現状に対する疑問、問題点の発見をおこなう。夏休みの終わりに守と破をテーマにした「対決・理系研究室紹介」を昨年度は9月1日に実施した。後期は、守と破の分析によって、テーマ先企業との信頼関係を築き、さらに企業がかかえている悩みを解決することを目指して、離をテーマとした調査研究を行う。このようにして発見した問題に対する解決策を12月22日にビジネスプランコンテストで発表した。</p> <p>このような活動を学生主体の運営組織を構築して実施している。阿比留ゼミ生がリーダーとなりコミュニケーションの難しさやリーダーのあり方の難しさを体験している。24年度は受講生も大きく増え全体で280人を超えた。各学生の活動の内容を把握することはとても困難だが、ポートフォリオによって克服した。各プロジェクトチームは会議を開き、行動計画を策定し、企業へのインターンシップを実施している様子をポートフォリオに記入しなければならない。リーダーがいつ、どのような会議を招集し、何を議論し、どのような活動計画をたて、実施しているかが見えるようになり、飛躍的にレベルが向上した。</p>		



取組①: 成果報告ポスター

「ベンチャー起業論」実践型プロジェクトにおける学生の活動の可視化と評価への取り組み

OECDの「グローバルな人材競争の調整」や中央教育審議会の答申「わが国の高等教育の将来像」でも言及されているように、「知識基盤社会」となり、社会の主力を担う層の人材には、定型業務を素早く正確にこなす人材ではなく、**主体性と柔軟性を持ち、問題解決に取り組むことができる人材**が求められるようになってきました。

そのような中、大学での新しい教育方法として、インターンシップやPBL(Project Based Learning)等への取り組みが進んできています。

しかしながら、PBLには、教員の手がかかるため広く実施することが難しい、学生たちのプロジェクト活動を評価することが難しい、教室外での活動が見えづらいなどの課題もあります。

	かつての大学
目的	研究者やエリートの育成 専門分野の研究機関
姿勢	大学は専門知識の伝達と研究の場 学業成果等、全ては学生の自己責任

	ユニバーサル化時代の大学
	社会を構成するあらゆる人材の育成 地域社会の問題解決の基盤となる
	知識だけでなく、実践を通じた教育 サポートの必要な学生へのケア

ベンチャー起業論では、例年250名以上の受講生がプロジェクト活動に取り組んでおり、以前は同様の課題を抱えておりましたが、現在はプロジェクト支援システム「Tribes」を活用することで、これらの課題へと対処しています。また、データを分析することで、学生たちの動向がつかめるため、授業方法や学生指導の改善するためのポイントが見えてきます。

課題

大人数の学生たちの活動をどのように評価すべきか？
評価の方法、評価の根拠をどのように示することができるか？

複数年継続しているプロジェクトにてノウハウを蓄積していきたい

1チームが10名を超えるチームもあり、メンバー間での情報共有や役割分担や進捗管理が困難

プロジェクト支援ツール「Tribes」の活用

- ・評価方法、エビデンスの明確化
- ・チームや個人の活動量の数値化、グラフ化
- ・他チームの活動との比較による学生の奮起
- ・目立たない学生の活躍が可視化
- ・チーム内での情報共有、ノウハウ蓄積
- ・PDCAサイクルの修得

・ToDoはすべてシステムに登録し、管理することで、PDCAサイクルの実践を行う
・学生のプロジェクト活動は、全てシステムに登録することとし、評価の根拠とする
・調査データ、プレゼンテーションデータ、議事録等、プロジェクト活動の成果物もシステムに保管する

Tribesの概要

チケット

「チケット」とは業務指示書の意味です。やるべきことはToDoとしてチケットに登録します。業務に着手した時や、やり終えた時には、チケットの状態を変更します。

計画 → プロジェクト活動 → 進捗管理

ノート

プロジェクトの中で作成した議事録や提案書などの文書やデータ、調査報告書、プレゼンテーション資料などを、保管・蓄積します。

データ蓄積、ノウハウ蓄積

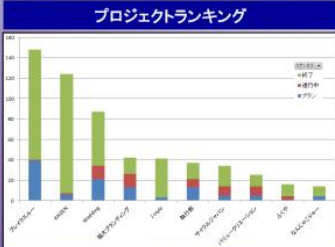
ホーム

チケットやノートが登録されるここに情報として表示されます。活動中に感じたことや、仲間に向けたメッセージ等を書き込むこともできます。

仲間の活動を可視化

活動ログデータ分析(プロジェクトや学生個人のアクティビティ)

データは評価用のエビデンスになるだけでなく、グラフ化し学生にフィードバックしたり、指導方針の決定や要サポート学生の発見に活用できます。



プロジェクト内分析

ToDo発行分析	山本 勇樹	高橋 千景	田中 真一	河合 翔太	藤井 莉生	小島 三	合計
山本 勇樹	1	0	0	0	0	0	1
高橋 千景	0	2	0	0	0	0	2
田中 真一	0	0	1	0	0	0	1
河合 翔太	0	0	0	1	0	0	1
藤井 莉生	0	0	0	0	1	0	1
小島 三	0	0	0	0	0	1	1
合計	1	2	1	1	1	1	8

プロジェクトごとのToDo処理量やノート作成数等をグラフ化し、毎週、発表することで、学生たちの活動量が増えていきました。当然、単に数が多ければいいというわけではなく、沢山のToDoをこなしていく中で、どのような単位でToDoを発行すればいいか、どのように作業分担すればいいかを学んでいきます。また、ToDoリストを中心に会議を進めることで会議の質の向上が見られ、議論が行動につながりました。

ベンチャー起業論は非常に負荷の高い授業であるにも関わらず、学生の主体性を引き出し、実践を通じて問題解決力を養うという教育方法により、単位修得後にもプロジェクトに参加し続ける学生が多く、H25年度は実質的に300名を超える授業となっています。

受け入れ企業から高く評価されるプロジェクトも多数発生しています。

ディスカウントストア「ルミエール」では、非食品の売り場改善提案を行い、店長会議でのプレゼンテーションの実施や特別表彰の受賞をしています。

福岡大学病院では、精算時・診療時の待ち時間の比較調査を行い、幹部会議(企画運営会議、診療部長会議等)やスタッフ1000名以上の前でのプレゼンテーションを実施しました。本取組は福岡大学病院のホームページでも紹介して下さっています。(http://www.hop.fukuoka-u.ac.jp/topics/kaizen_project.php)

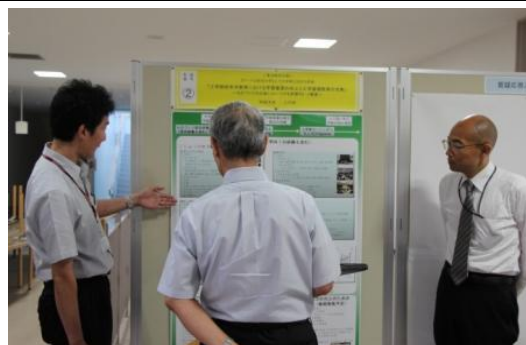
《重点教育支援》 テーマa:総合大学としての多様な初年次教育の展開

取組番号	取組名称	(主題) 現場体験と表現重視のキャリアデザイン教育 (副題) 初年次教育で夢を探し、新たな人生のスイッチを入れよう
①	取組主体	経済学部
	取組責任者	経済学部 教授 阿比留 正弘
1. 取り組みに対する主な質問とその回答		
<p>1、 実際にTribesを学生が使って良かったところは？ ↳学生のタスク管理が楽になった（手帳がスッキリ）</p> <p>2、 使い始めた時期は？ ↳今年の4月から</p> <p>3、 Facebookとの違いは？ ↳Tribesは情報漏洩を防ぐことができるので大事な情報の場合は良し。</p> <p>4、 媒体は？ ↳携帯（スマートフォン、i-phone）でも、PCでも</p> <p>5、 何か違う団体でも使えるのか？ ↳すぐはできないが、準備はできているので、契約していただければ。</p> <p>6、 現場体験とは？ ↳ベンチャー起業論の受講者約300人が17のプロジェクトに分かれ、10～20人ほどのチームを組んだものがある。その1つのチームに1つのテーマ先企業がつき、その企業の現状分を様々な視点から行き、最終的にビジネスプランを発表するというもの。</p> <p>7、 毎回の授業ではどんなことを？ ↳インターシップ先の様々な業種の経営者が講義に来られるというもの。</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<p>予想よりも多くの方に興味を持っていただくことができ、私たちのやっていることに自信をもつことができた。</p>		
3. 今後改善すべき点		
<p>学生たちはこの活動をするために24時間、行動し、マクドナルドなど、近隣のレストランを利用しています。しかし深夜に近隣の店舗に迷惑をかけているという現状があります。それを解決するために、ネット環境の整った学内の居場所（活動拠点）を確保してほしい。</p>		

取組②:取組概要

《重点教育支援》 テーマa:総合大学としての多様な初年次教育の展開

②	取組名称	(主題) 工学部初年次教育における学習意欲の向上と工学基礎教育の充実 (副題) ものづくりの出会いといつでも学習サポート制度
	取組主体	工学部
	取組責任者	工学部 電子情報工学科 教授 鶴田 直之
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>本事業は、新入生のものづくり研修と新入生に限らない学習サポート制度からなる。</p> <p>1) ものづくり宿泊研修：初年次教育で最も重要な目的は、入学した学科への興味と将来への目標を持たせることと、学びの質が変わる大学への適応を促進することである。この目的を達成するため、各学科の特徴となる工場や現場見学を行い、また、宿泊研修（一部の学科は学内研修）では教職員や友達とのコミュニケーションの場を提供し、学科の連帯感を醸成する。研修の時期は、学生の大学での学習スタイルや対人間関係等への適応を促すために1年次のできるだけ早い時期に行う。</p> <p>2) 「工学部ラーニングcommons(T-Square)」の設置：「もっと深く学びたい」、「勉強の仕方が分からない」、「授業について行けない」、「進路について」の様々な悩みを持つ学生は少なくない。そこで工学部内に気軽に相談できる部屋 {ラーニングcommons} を設置し、もっと学部を身近に感じてもらうと共に話す力を育成する。設置場所は、図書館工学部分室とし、「図書館のラーニングcommonsの分室」と「工学部ラーニングcommons」の「共同運航」の形式をとる。</p> <p>3) 工学基礎能力の向上のための「e-learning」の実施：日本語力向上のための「e-learning」による支援を初年次の後期に行う。また、このリメディアル教育については、2)のラーニングcommonsスタッフも情報の共有を行い、サポートを行うと同時にラーニングcommonsの利用機会の向上に繋げる。(今回の発表の時点では未実施)</p>		



大学への適応
学修意欲の向上

学修基礎の確立
弱点の克服

より深い学び
学修の悩み相談

ものづくり宿泊研修
(学内研修も含む)

工学基礎能力の向上
のためのe-learning

工学部ラーニングコ
モンズ(T-Square)

ものづくり宿泊研修 (学内1日研修も含む)

くじゅうの杜を活用した宿泊研修

化学システム工学科

<行程>
4月7日(日)
九州電力八丁原発電所(地熱発電所)見学
福岡大学やまなみ荘泊
4月8日(月)
株式会社ブリヂストン 久留米工場 見学
新日鐵住金株式会社 大分製鐵所 見学

<学生参加率>
76%

<効果>
☆新入生同士や新入生と学科教員の親睦を深めることができた。
☆充実した大学生活を送るための様々な情報を交換することができた。
☆化学システム工学科の卒業生が活躍する工場や発電所の見学は、将来の職業や人生について考えるよい機会となった。

建築学科

<行程>
5月18日(土)
三班に別れ建築・町並の見学(日田・小国・由布院)
やまなみ荘泊
6人ごとのグループ作業:翌日の発表の準備
5月19日(日)
やまなみ荘にて研修
グループごとに見学から得た知見・感想を発表

<学生参加率>
78%

<効果>参加学生へのアンケート調査による
☆学生同士の親睦が深まった(28%)
☆様々な建築・町並を見学できた(25%)
☆建築を学ぶ意欲がより強まった(17%)

電気工学科(予定)

<行程>
9月12日(木)
共同実験・演習
福岡大学やまなみ荘泊
9月13日(金)
九州電力八丁原発電所(地熱発電所)見学

<ねらい>
☆活気を持って後期の活動を開始できるよう、学ぶ意欲を高める
☆働くことへの関心・意欲の向上を図る
☆集団行動を通じて学ぶ機会とする
☆学生同士、あるいは、学生と教員の親睦を深める機会とする

社会デザイン工学科(予定)

<行程>
9月12日(木)
那珂川にて建設中の五ヶ山ダム見学
福岡大学やまなみ荘にて社会資本整備に関してグループ発表準備
9月13日(金)
午前:前日の見学内容などをとくにグループで発表(グループ作業)
午後:九重"夢"犬吊橋見学後帰福

<ねらい>
☆グループ作業を通して新入生と教職員の親睦を深める
☆ダム建設現場を見学することで、今後のキャリアについて考える
☆JABEEで求められているチームでの作業を1年次から体験する

学内1日研修「自分発見！スタートセミナー」

機械工学科、電子情報工学科

<プログラム>4月8日(月)

<p>9:00 オリエンテーション</p> <p>①実習 あなたの学習スタイル</p> <p>②実習 グループビルド 記者会見 ふりかえり 昼食</p>	<p>③実習 総あたりインタビュー ふりかえり</p> <p>④実習 17:30 課題解決実習 ふりかえり</p> <p>⑤実習 イメージ交換</p>	<p>⑦実習 私が得たこと、学んだこと ⑧まとめ</p> <p><学生参加率> 機械工学科=88% 電子情報工学科=80% (不参加の学生には、後日、追実践)</p>
--	---	---

この授業を受け、正課授業への取り組み姿勢に変化が起きますか?

●はい(継続的)
●ややはい(部分的)
●ややいいえ(部分的)
●いいえ(継続的)
●不明

課題:どの取り組みも学生参加率が予想を下回っており、不参加の理由の分析と対策の検討が必要。
ただし、多くの場合、大学に適応できない学生が参加を拒んでいるわけではないと見られる。

工学部ラーニングcommons(T-Square)

<図書館工学部分室の利用>
☆図書館のLearning Commonsと工学部の学習支援室との「共同運航」による実施
☆図書館工学部分室のスペースおよび机・椅子をそのまま利用する
☆簡易な間仕切りや、パソコン等の付帯・器具は工学部所有のものを使い、工学部で管理する

<工学部のOB教員による指導>
☆退職された教員を任用して指導を実施
☆特別なプログラムを実施するのではなく、雑談の中から学生の思いを引出し、指導に繋げる

<e-Learningなどの電子コンテンツの活用>
☆急速に普及しつつある電子コンテンツを活用した指導も行う

<大学院生を中心とした学生サポーターの活用>
☆工学部研究科の大学院生に学生サポーターの呼びかけをしたところ、希望者多数

<開室期間>
☆平成25年度前期は、7月8日から7月22日の試験開始日まで
☆平成25年度後期以降は、前期の様子により決定

工学基礎能力の向上のためのe-learning (後期実施予定)

<民間のコンテンツを使用>
☆テキスト付コンテンツを使用
☆日本語表現法 10回コース+1回の添削指導
☆文章の書き方:4章構成
☆レポートの書き方:5章構成
☆理系論文の書き方:2章構成

<対象者>
☆教育開発支援機構で実施した日本語力向上支援講座を受講した学生を中心に、日本語力向上の必要性を感じている1年生の希望者60名(先着順)を対象

<T-Squareでの平行指導>
☆仲間意識を持って取り組めるよう、T-Squareで一緒に学習する場を提供する

取組②:リフレクション

《重点教育支援》 テーマa:総合大学としての多様な初年次教育の展開

②	取組名称	(主題) 工学部初年次教育における学習意欲の向上と工学基礎教育の充実 (副題) ものづくりの出会いといつでも学習サポート制度
	取組主体	工学部
	取組責任者	工学部 電子情報工学科 教授 鶴田 直之
1. 取組みに対する主な質問とその回答		
<p>Q1 ラーニングコモンズとはどんな活動か? A1 学生がわからない問題・質問について教職員が回答する場</p> <p>Q2 ラーニングコモンズの広さは? A2 四畳半程度</p> <p>Q3 「共同運航」意味は? A3 図書館のスペースをそのまま利用し、パソコン等は工学部で管理</p> <p>Q4 教職員の常駐は大変では? A4 工学部のOBの教員に依頼している</p> <p>Q5 学生は多く来るのか? A5 まだ多くはない。今後に期待</p> <p>Q6 不参加の理由は? A6 情宣不足。実施時期や連絡方法の工夫が必要</p> <p>Q7 スタートアップセミナーの内容は? A7 一日の研修を通じて自己理解を深め、また、他者とのコミュニケーション力を高めるきっかけづくり。 具体的な内容：レーダーチャートによる自己特性の理解、少人数グループによるインタビュー、課題解決（隣の歯医者までの地図作成）、総当たりインタビュー、カード交換等</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<p>ラーニングコモンズについての質問が多く、興味を持たれた様子であった。テストケースとして発展させていくべきだろう。スタートアップセミナーは学生も教員も楽しく取り組んで、成果が得られた。建築学科の宿泊研修においては、見学した建築物を翌日グループ単位で発表するための資料作りに熱意を持って取り組んだ。興味を持った事柄には、労力を惜しまずに、またグループ作業にも尻込みもせずに積極的に取り組むことが改めて分かった。</p>		
3. 今後改善すべき点		
<p>出席率を高めるべく、他学部での取り組みなども参考に改善する。出席しなかった学生への対応も今後の課題である（機械工学科・電子情報工学科では欠席者に対し後日セミナーを開催した）。ラーニングコモンズに関しては、指導を必要としている学生に対しての積極的な情宣・広報が必要だと思われる。</p>		

《重点教育支援》 テーマa:総合大学としての多様な初年次教育の展開

③	取組名称	(主題) 理工系学生の基礎力パワーアッププログラム (副題)
	取組主体	理学部
	取組責任者	理学部 地球圏科学科 教授 横張 文男
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>プログラムA：高校数学のリメディアルプログラム</p> <p>4月初めに理学部と工学部の新生を対象に高校数学について到達度調査を行い、工学部のリメディアルクラス編成に用いると共に、微分積分Iの成績との相関を調べた。前期は工学部2学科(TA、TK)については到達度不良者約110名(TA55名、TK55名、4クラス)と、SM応用数学コースについては新生全員47名(2クラス)に対して、数学リメディアル授業を行った。内容は、工学部は高校の微分積分の補完と大学正規講義の補習、応用数学コースはベクトルと行列に関する補習を行った。</p> <p>後期では、TMの「機械工学基礎演習」成績不良者24名に対して、後期リメディアルクラスを編成した。またSM応用数学コースは、前期にひきつづき、行列に関する講義の補完授業を行った。</p> <p>当初予定した学生サポーター制度は、制度の未整備や予算不足のため今年度は実行することができず、来年度実施を目指すこととし、代わりにリメディアル講師による数学サポート教室を開いた。</p> <p>SM応用数学コースの平成25年度推薦入試合格者に対して、合格発表後「数学C」に関する課題を課し、1月より2月下旬まで4回の添削を行なった。</p>		
<p>プログラムB：物理学パワーアップ道場</p> <p>理工系の1年生(工学部(869名)、薬学部(233名)、および理学部物理科学科(63名))を対象に、物理学パワーアップ道場(以下、道場という)を平日の5、6時限の時間帯に、9号館の教室と物理科学科の共同研究室を使用して開設し、力学およびその関連科目について学生の基礎力のパワーアップを図った。工学部と薬学部については、パワーアップ課題(担当教員が講義時間に配布した宿題)に対する1年生の答案(道場に提出される)を、本プログラムへの補助金で雇用した学生スタッフ(物理科学科の2～4年次生)が採点して答案返却時に個別指導する形をとり、採点結果は講義担当教員に報告した。道場で処理した答案は約4,500件である。物理科学科の1年生については、1年次必修の講義と演習の担当教員による課外の個別指導を道場において実施した。学生スタッフとは別に講師2名を雇用し、情報センターのmoodleシステムを利用した自習プログラムの開発とパワーアップ課題の採点資料の作成を依頼した。アンケートによると、学生スタッフに指導を受けた1年生には道場システムは好評である。しかし、道場を利用していない学生もかなりいる。道場の学生スタッフについては、学年を超えた縦のつながりができてきており、メンターグループ育成の基礎はできていると考えている。</p>		
<p>プログラムC：理系こそ作文力</p> <p>人文科学研究科博士課程修了の日本語講師と、作文添削および指導補助として人文科学研究科院生5名、理学研究科地球圏科学専攻の院生4名を雇い、講座は4月12日から毎週木曜日4時限目に35名でスタートし、15回開講した。最初の20分弱で地球圏科学科スタッフの卓話を行い、残りの時間で毎回異なる課題を提示し、作文力強化のための作文実習(ワーク)をグループおよび個人で行った。課題作文は毎回講師および補助院生による入念な添削が行われた。6月30日、7月1日に九重町泉水キャンプ村で1泊2日の「作文キャンプ」を実施し、地球圏科学科の生物、地学、地球物理の3分野の教員が自然の見方について現地講義を行った。生憎の雨であったが、28名の参加受講者は多様な自然の魅力に直接触れることができた。8月4日のオープンキャンパスにおいて、フォトエッセイ展「Love the Earth II」を開催し、評価の高い作品を表彰した。講座最終回にアンケート調査を実施し、受講生の本プログラムに対する評価を調査した結果、成果があったとする意見が期待以上に多かったので、平成25年度は更に内容を拡充したいと考えている。</p>		

取組③: 成果報告ポスター

平成24年度魅力ある学士課程教育支援

理工系学生の基礎力パワーアッププログラム

理学部では理学部および工学部の1年次の学生を対象に、「理工系学生の基礎力パワーアッププログラム」を平成23年度から展開している。高等学校での科目履修が選択制のために大学で学ぶ上で基礎となる科目が未履修だったり、履修しても理解が不十分だったために、大学での専門教育科目の理解に苦悶している学生がおり、数年の原因ともなっている。また読書経験や文章作成経験が少ないために、文章の理解力や、表現力・構成力が不十分な学生も多い。本プログラムではこのような学生を対象に、必要基礎学力の修得を支援して専門課程教育にスムーズに移行できるようにすること、および文章力が不十分であることを気づかせ、自ら文章力をパワーアップする力を育てることを目指している。理学部では大学の支援事業がスタートする前から基礎学力養成支援の取り組みを展開してきたが、平成23年度から大学の取り組みとして本事業を財政的に支援していただき、2年目の平成24年度には更に大きく発展させることができた。本プログラムを構成する3つのサブプログラムの活動について、以下の通り報告する。

申請代表者：横張 文男（プログラムA 秋山献之；プログラムB 赤星 信；プログラムC 秋山哲男）

プログラムA 高校数学のレディアルプログラム

対象：工・理（応用数学科）1年生 400名

プログラムの目的と概要

本プログラムは、学力格差が広がった理学部と工学部の低学力層の新入生に対して、数学基礎教育に必要な知識と学力をできるだけ補完することを目的とし、学生の学力レベルに合わせた学習支援体制を整えることが目的である。これは「学士課程教育」の質の維持・向上を図ろうとする「魅力ある学士課程教育支援」の考え方に沿うものである。

次の3つのサブプログラムから成る。

- 1 理学部と工学部の新生入生を対象として、高校数学に関する学力の調査・確認を行う。
- 2 工学部2学科（T・A、T・K）の新入生のうち、1の調査結果に基づき学力が不十分であった学生に対して、前期数学レディアル授業を行う。TMについては、前期専門科目の成績不良者に対して、後期数学レディアル授業を行う。理学部応用数学科の新入生については、全員を対象に連年数学レディアル授業を行う。
- 3 応用数学科への推薦入試合格者に対して、入学前レディアル教育を行う。

1 高校数学に関する学力到達度調査

- 理学部4学科と工学部6学科の新入生を対象として、4月上旬に「高校数学に関する到達度調査」を実施する。
- T・A、T・K、S・Mの3学科については全数調査、その他の学科には半数調査。
- 2000年（平成12年）度より継続して実施。経年比較を行なう。

表1 高校数学に関する学力到達度調査結果（理学部）
到達度テスト得点率

2 数学レディアル授業

- 2005年（平成17年）度より継続して実施。
- 4名の講師は九州大学大学院理学部理学の学生あるいは修士号。
- 教材はこれまでのレディアル講師が作成したものでおよび一部修正を加えたもの。
- 工学部の内容は微積分、SMはベクトルと行列。
- 前期、後期それぞれ12回の授業と期末テスト。
- T・A、T・Kの2学科もそれぞれ、学力到達度不良者約60名を対象として、前期2クラスを開講。
- S・Mは全員を対象として、連年2クラスを開講。
- TMは根拠工学科基礎演習の成績不良者24名を対象として、後期1クラスを開講。
- 学科によってはティーチング・アシスタントを配置。

表2 T・A前期定期試験結果（微積分）
理学部4学科前期定期試験結果

3 入学前レディアル教育

- SMの推薦入試合格者を対象。
- 添削者は助教以上のスタッフほぼ全員。
- 1月から3月の期間、計4回の添削。
- 教育内容は、高校数学「数学C」

4 課題と問題点

- 予定した学生サポーター制度は実行できなかったが、代わりにレディアル講師とティーチング・アシスタントによる数学サポート授業を開いた。
- レディアル授業は正規授業でなく単位もないことから、途中から出席状況が悪くなり、出席学生への影響もみられる。良い状況を維持するには、学科全体のレディアルへのサポートが必要。

表3 SMレディアル授業出席状況
SM出席状況

プログラムB 物理学パワーアップ道場

対象：工・業・理（物理数学科）1年生 約1160名

プログラムの目的と概要

(1) 目的: 物理学の基礎力向上のための学習時間の確保

物理学の基礎力向上のためには授業時間以外の学習時間が必要である。本来ならば、そのような時間は学生が主体的に確保すべきものであるが、現実には他者からの強制力という支援がなければ学習時間の確保は難しいのではないかと。本プログラムの背景にはこのような不安がある。自主的な学習の強制という矛盾を克服するために、以下の通り報告する。

- ・学生同士の手合わせにふさわしい教材の開発
- ・それを学生に適用するためのパワーアップシステムの構築
- ・そのシステムで中核となる学生スタッフ（メンター）の育成

(2) 実施策: 物理学パワーアップ道場の開設

- ・教員のオフィスアワーとは別に学生が質問しやすい場の提供
- ・物理数学科のゼミ室と9号館の一階教養を「道場」として利用
- ・平日の16:30~19:00にSPの学生スタッフ3名ほどが常駐
- ・学部の特を越えた学生スタッフ育成支援
- ・演習科目を併せていない教養科目の補完

(3) 支援内容: 宿題と面談

- ・支援科目: SPが担当する工学部(6学科)1年次の力学、即ち「力学A」(6学科必修)と「力学B」(3学科必修、3学科選択)、SP1年次(6学科)の「物理学と数学(前期必修)」と「基礎電磁気学(前期必修)」および「数学部1年次(6学科)の「物理学(前期)」
- ・課題配布: 授業科目に担当者が課題プリントを配布
- ・答案提出: 履修者は、指定期限内までに答案を道場に提出
H23年度は、答案の提出が授業時間前まで遅延されていたが、H24年度は、学科別提出に同時期にすることを決めている。
- ・答案採点: 答案は道場の学生スタッフが採点(採点基準は教員参照)
- ・答案返却: 課題毎の指定返却期間に、道場まで返却
道場に受け取りに来た場合は、まず、道場用紙に学号等を記入させ、学生スタッフが採点を担当する。その際、必要な注意事項を伝え、質問に答えることが出来る。
返却後、1年生は担当教員が面談を申し込み受領する。
- ・状況報告: 道場は答案提出状況を、適宜、各クラス担当者に送付

答案の提出、採点、返却

学年	提出	採点	返却	合計	割合
19年	100	100	100	300	100%
20年	100	100	100	300	100%
21年	100	100	100	300	100%
22年	100	100	100	300	100%
23年	100	100	100	300	100%
24年	100	100	100	300	100%

問題点と今後の課題

(1) 教材の開発

工学部の学科はクラス、それぞれ事情が異なり、課題の調整は難しい。H24年度は前期後期とそれぞれ別の課題を準備し、担当者の判断で取捨選択して使う形をとった。出題されたも、答案の提出率は高くはない(上の表参照)。年度末に実施した学生アンケート(回収率39%)によれば、道場は有意義であった、というものは多かったが、道場を全く利用していないが、答案を提出しただけの年生も多く、また、余計なお世話、という感想でもらっている学生も存在する。道場の場所が狭いから遠いという一説と聞かれるが、コンテンツの改良の余地は大きいとある。総合情報処理センターのMoodleシステムを利用した学習支援システムについては、基本的な計算練習や概念理解度のチェックを行う学習プログラムが追加されている。映像音声コンテンツについては、残念ながらH23年度制作のもののみとなっている。

(2) 教材の提供とピアサポートシステム

紙媒体のパワーアップ課題を講義担当者を通じて履修者に配布し、それに対する答案を道場の学生スタッフが採点して、答案返却時にピアサポートの形で履修者の基礎力をパワーアップするとともに、そこで得られた情報を講義担当者にフィードバックする一連のシステムは徐々に定いつつある。今後は、このシステムをより洗練されたものにしていくと同時に、コンテンツを逐次改良していく仕組みを構築する必要がある。また、学習時間の調査や学力および成績との相関の把握も課題である。

(3) メンター・グループの育成

物理数学科の学生の間で道場の認知度は上がってきているが、時間的に安定して業務に参加できるのは、大学院進学を目指して勉強中の3、4年生が、勉強の好きな2年生である。教職活動で忙しい、4年生は単位を定めることが難しい。また、道場の業務は学務中に限られるため、生活がかかっている学生は年間を通じて働ける学外のアルバイトを選ぶ。また、物理学に関する指導はかなり専門性が深く、時に相当ハードにもなる。1年生の来訪には遠く、ゆっくりに面談指導ができることと、そうでないときがあるため、平均的なペース維持の工夫が必要である。また、金銭的動機以外の動機もメンター・グループ育成には重要な課題である。

ある日の面談指導の様子(左: 学生スタッフの先生、右: 1年生の学生)

プログラムC 理科こそ作文力

対象：理学部地球数学科1年生 60名

1. 目的と準備

理科学生には深刻な文章表現力不足が認められる。彼らが自主的に楽しみながら作文力を強化し、考える力の開発に取り組み始める機会を支援し、併せて専門分野の専攻として自然観察の興味を引出す。

応募者 35名 (15名に修了修了)

文理融合型人材育成による講師と指導スタッフ
講師：日本語教育経験者
院生スタッフ：人文科学研究科と理学部研究科の院生計6名

2. 実施プログラムの概要

- ・4週間の目標の達成、週次出口の把握と確認
- ・グループワーク、グループワークと個人ワークの併用
- ・1泊2日の作文キャンプ：野外観察体験
- ・理学部科学科教員の10分間スピーチ
専門分野の導入授業にも活用
- ・論文リポートに専攻とエッセイを掲載

3. 作文作品と添削例

フォトエッセイ「Love the Earth II」
応募者 15名
作文キャンプ 6月30日~7月1日

4. 新しい試みと成果の公表

- ・講義を重なることに添削会議で学生の成長が確認できた。
- ・講義参加者も7月のキャンプ終了時点で30名が継続参加。
- ・7月に表現力の集大成としてフォトエッセイを制作。
- ・完成した作品を8月4日のオープンキャンパスで展示。
- ・来場者の評価(投票)が高かった作品を優秀作品として表彰。
- ・途切れた自然を表現するために、言葉を選別して表現して始めた。

5. アンケート調査

- ・受講理由は「文章力に自信がなかったから」、全員が、終了後は「以前より力が付いた」と答えた。
- ・力付いた作文ワーク課題
原稿事故を題材とした時事問題の意見文
話し言葉と書き言葉の区別
石の観察記述文など
- ・感想 ○添削による指導で作文力の向上につながった。○自分の作文力を再認識することができた。○改善すべき点が明確になった。○読み手の立場になって考えて書くことの大切さがあった。○大勢の読み手に視線に慣れるように書く楽しさがあった。○書くための準備の方が多かった。
- ・作文キャンプについての感想 ○自然の中で教員や参加者との触れ合いが深まった。○今後の学修のための手助けを得ることができた。

6. 今後の課題

- ・導入教育として自然観察の充実(作文キャンプの更なる充実)
- ・自然観察に引き出すための仕掛けの工夫
- ・表現力と文章構成を意識した作文ワークプログラムの開発
- ・読者の導入と作文ワークの内容充実
- ・添削の更なる充実

《重点教育支援》 テーマa:総合大学としての多様な初年次教育の展開

③	取組番号	(主題) 理工系学生の基礎力パワーアッププログラム (副題)
	取組名称	
	取組主体	理学部
	取組責任者	理学部 地球圏科学科 教授 横張 文男
1. 取り組みに対する主な質問とその回答		
<p>プログラムA 出席率を上げるための工夫は？ 正課の講義との連携をとることが望ましいが、現実問題としては非常勤の先生もおられて難しい。 新規に学科としてリメディアルをやってもらえるか？ 教室として申し出ていただければ前向きに検討します。</p> <p>プログラムB 道場システムの具体的な内容は？ 時間、場所、スタッフ、対象者、周知方法などを説明。 何時から始めたか？ 2011年から13年度まで。 提出率、返却率は？ 時間とともに減少する傾向はある。 高校で物理を履修していない学生への対応は？ 特に区別はしていない。 評価はどうやっているか？ アンケート調査の結果、よく利用した学生からは高い評価を得ているが、道場が遠い、必要を感じないという反応もある。正課の成績との相関は未分析。</p> <p>プログラムC 講座講師は？ 理系院生と日文院生のコラボ、お互い刺激になり活発 講座の内容は？ 原発記事の意見文、地図の説明文、4コマ漫画の文章化など多様な課題。院生が細かく添削する。 最適な人数は？ 5, 6人のグループを作って作業させる。グループ内でディスカッションが進み、作業能率が上がる。最大35名登録し、修了は15名。 対象の学生は？ 地球圏1年生にチラシを配り募集。 参加する学生の傾向は？ 書くことに対してコンプレックスが大きい。一度欠席すると次から来なくなる傾向がある。 受講生のモチベーションを維持する方法は？ 講座の最初に地球圏教員による卓話。導入教育として効果がある。 今後の発展方向は？ 正課科目として1単位の演習にする予定。 文章構成力はつくか？ 構成力は上昇するが、文脈の判断や語彙力などは15回では効果が出ない。 講座の時間は？ 90分、内訳は20分（卓話）、30分課題の意義づけ、30分作文ワーク。</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<p>プログラムA：以外に多くの方がこのリメディアルへの取り組みに興味があることが分かった（経済学部など）。 プログラムB：工学部教員への情宣が不足していたことが分かった。 プログラムC：理工系他学部からも同様のプログラムがほしいと言われた。</p>		
3. 今後改善すべき点		
<p>プログラムA, B： 正課の成績との相関を評価する仕組みと取組が必要。 プログラムC：プログラム内容とその内容的な連携を充実させることが課題。</p>		

取組④:取組概要

《重点教育支援》 テーマa:総合大学としての多様な初年次教育の展開

取組番号	取組名称	(主題)「命の大切さを実践する」学士課程の創設 (副題)
④	取組主体	医学部
	取組責任者	医学部 心臓・血管内科学 教授 朔啓二郎
取組概要(取り組みの目的・活動内容)		
<p>近年、生活習慣病の増加により、癌や脳血管疾患、心臓疾患が日本人の死因の60%を占めている。食生活や運動、喫煙、飲酒、ストレスなど日々の生活習慣の見直しや改善を図ることがこれら疾患の最大の予防法であり、この対策をいかに行い、人的および経済的損失を少なくするかが現在の喫緊の課題となっている。特に、生活習慣病リスク年齢に達する前の青年期において、健康に関する自己管理ができる知識と実行力を養成することはこの予防対策に大きく貢献することになる。本学には青年期にある約2万人の学生が在学しており、彼らに対して健康増進をキーワードとした質の高い教育内容と教育環境を提供し、自己の健康づくりはもとより地域の健康づくりを担う人材として育成していくことは前述した問題に対する対策のひとつになる。同時に地域社会への貢献にもつながる。また、本学は、医学(医学科・看護学科)、薬学、スポーツ科学の健康を科学する学部を擁する多面的健康教育ができる国内で唯一の教育機関であり、本プログラムは福岡大学の存在価値を高める絶好の企画である。取り組み内容としては、下記3つである。</p> <p>①AED講習会の実施：AEDを単なる飾りとして認識している現状を打破し、実行力のあるヒトを育成する。</p> <p>②健康に関するアンケートの取得、解析：バランスの取れた規則正しい食事・生活・睡眠の重要性を知ることにより、自己管理(生活習慣)能力向上を計る。</p> <p>③命の大切さを考える公開講座の開催：ヒトとして基本的な生命に対する感覚、コミュニケーション能力を養う。命の大切さを考えるきっかけを作る。</p>		





福岡大学 魅力ある学士課程教育支援(総合大学としての多様な初年次教育の展開)

Learning that Life is Precious II

「命の大切さを実践する」

目的

生活習慣病リスク年齢に達する前の青年期にある本学学生(および職員へ)

1. 自らが健康管理と健康増進を図る知識と資質を涵養できる
2. 命の大切さを考えることができる
3. 健康づくり社会へ寄与する人材育成ができる
4. 地域の多面的健康増進教育拠点を構築する

平成24年度実績
のべ5593名+α
本学学生参加

取組み

初期救命処置およびAED使用法の実践教育

福岡大学共通教育科目「生涯スポーツ演習」アクアスポーツ履修者対象

【付録】第47回 日本内科学会認定内科救急・CJLS講習会

受講者数: 822名

平成24年9月30日に日本内科学会が主催する内科救急・CJLS講習会が福岡大学病院で開催された。福岡大学病院で開催されるのは3回目となる。今回も、福岡大学病院救急部内科のスタッフがインストラクターを務めた。福岡大学から地域へ健康増進を啓発し、救急医療に貢献している。

健康増進のための生活習慣及び健康に関するアンケート調査

全学部的一年次生4336名対象(回収率:96.2%)

(1)健康に関する身体的・意識的背景

女子学生は、男子学生に比べ体重が多い。また女子学生の84.3%が「今よりもやせたい」と思っている。男子学生に比べ、女子学生の方が健康に関心のある学生が多く、改善が必要な生活習慣は、男女ともに「食生活」「運動不足」「生活の不規則さ」を上げた。これらの傾向は3年前同様の結果であった。

BMI 18.5未満の学生の肥瘦意識

(2)健康に関する日常生活習慣

食習慣では、昼食と夕食に比べ、朝食は食べない学生がいた。多くの学生は、3食を規則的に摂取しているが、栄養バランスを考慮していない。日の平均睡眠時間は、6.03(±1.09)時間であり、54.5%の学生が睡眠時間が一定していない。女子学生に運動している学生が多かった。喫煙率は男子学生6.2%、女子学生0.6%で低いと言える。ストレスを感じている学生は男子55.1%、女子60.7%であり、その原因は、男女ともに「大学の勉め」「アルバイト(友人関係)」「就職・進路」をあげていた。

ストレスの原因

(3)健康増進に対する大学の取組みに関する共感性

学生食堂のメニューにエネルギー・栄養成分の表示については、女子学生は「利用する」が43.0%で「利用しない」の27.0%を大きく上回った。サラメー等の感傷については、男子学生では37.9%、女子学生では49.5%が「利用する」と答え、積極的に実施に向けて検討することが好ましい。

公開講座 本学学生および一般市民を対象に

魅力ある学士課程教育支援 学士課程「命の大切さを実践する」報告会

日時:平成24年7月5日 会場:福岡大学病院メディカルホール

参加総数 200名

講演1「福岡大学一年生の生活習慣の調査結果」 中嶋 恵美子先生
福岡大学保健学 看護学科准教授

講演2「大学生と職員への心静養生活の実践」 松尾 邦浩先生
福岡大学病院 救急救急センター 准教授

講演3「スタイリスト研究報告」 福岡大学病院 臨床研究支援センター 教授 野田豊大先生

第69回 日本循環器心身医学会総会 市民公開講座「命の大切さを考える」

日時:平成24年11月18日(日)14:00~15:00
会場:福岡大学病院メディカルホール

参加総数 400名

特別講演「芸術と心と体」 芸術家 外屋 悦郎氏

現在スペインでご活躍の外屋悦郎氏をお招きし、芸術家の心、体そして生活習慣などのお話しを伺った。海外での生活習慣、食事の基盤、芸術家としての心や体のケアをお話しいただき、青年期における食事や健康の自己管理を行う大切さを実感してもらった。過去2年間で行ったアンケートは8000名の調査から、学生のストレス、その解消法に苦む実態が明らかになった。福岡出身で世界にははたらく外屋さんのお話は青年期にかかえる勉強や進路へのストレスを緩和し、自分自身を考えるきっかけにもなった。

共同研究 福岡大学医学部 心臓・血管内科学、福岡大学病院、福岡大学エクステンションセンター、福岡大学医学研究科 先端医療科学系、先端循環器病治療研究会、福岡大学領域別研究チーム(コレステロール逆転送系研究)、福岡大学総合科学研究チーム1、福岡大学産学官連携研究機関「心臓・血管研究所」、NPO法人 臨床応用科学 医療プロジェクト

結論

- ・毎年膨大な生活習慣データ集積と心静養生活法のアクション(エビデンス)がある
- ・本企画からの提案を、学生教育・生活指導の施策の1つに入れるべきである
- ・生活習慣・健康に関する調査結果は学位取得のテーマとなっている
- ・さらなる継続(エクステンション)と予算の拡充が必要である

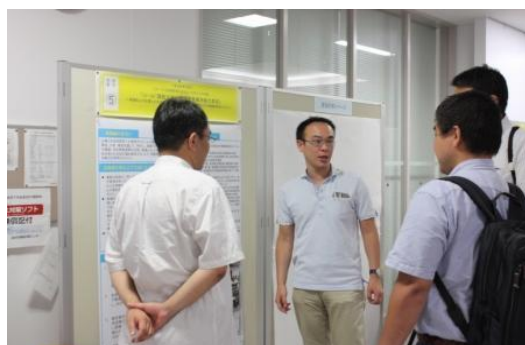
取組④:リフレクション

《重点教育支援》 テーマa:総合大学としての多様な初年次教育の展開

取組番号	取組名称	(主題)「命の大切さを実践する」学士課程の創設 (副題)
④	取組主体	医学部
	取組責任者	医学部 心臓・血管内科学 教授 朔 啓二郎
1. 取組みに対する主な質問とその回答		
<p>健康に関するアンケートについて：</p> <p>①健康認識に影響しているのは？男女共にストレス、食事、運動</p> <p>②ストレスの原因は？一年生に聞いているので、大学の勉強が最も多かった。ストレス解消の方法は男女共に一位は友達との遊戯で、二位に男女差があり、男子はスポーツ、女子はショッピングであった。</p> <p>③一年生で勉強に悩み、ドロップアウトする学生がいるが？ストレスの原因一位が大学の勉強がストレスになっているのは、やはり一年生にアンケートをとっているからである。初年次教育が重要ということを示している。</p> <p>④回収率の高さは？「生涯スポーツ演習」履修者である全学部的一年生に実施している。回収率は年々あがっている。青年期の生活習慣や健康認識を反映していると考えても良い数と認識している。</p> <p>⑤痩せている (BMI18.5未満) のに痩せたいと思っている学生がいるが？女子学生の痩せ願望の強さを示している。生殖機能などが成熟する時期の「やせ」は健康に影響する。今後、生活習慣と関連させ解析していきたい。</p> <p>AED講習会について：</p> <p>①講習会でのAED使用台数は？トレーナー7台と本物1台</p> <p>②本学にAEDの設置台数が少ない。もっと増やせないか？できれば各学部一台ずつ設置するのが望ましい。</p> <p>③講習会の対象は？また、申込は必要？全学部的一年次生を対象とし、「生涯スポーツ演習」の講義の一環で実施している。申込は不要。また、医療関係者を対象に行う講習会は申込が必要。</p> <p>④講習会のインストラクターの資格はある？医療関係者むけの講習会は資格があるが、学生向けの講習会は特にいない。今は、病院（循環器内科）の医師が行っている。マンパワーの不足が問題となっている。</p> <p>⑤講習会を受けた学生の反応は？2～3割の学生は興味を持っているようだ。</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<p>本学にAEDの設置台数が少ないという意見が多かった。薬学部には一台もない現状であり、実際に心臓の悪い学生がいる中で授業をすることに職員は不安を感じながら生活していた。</p> <p>また、高校を卒業したばかりの一年次生にとって大学の勉強が大変なストレスとなっているのは、職員も感じている現状である。</p>		
3. 今後改善すべき点		
<p>本学にAEDの設置場所を増やすべきである。各学部で最低一台ずつの設置が望ましい。そして、AEDの使用に関しては、いざとなると使う勇気が持てないという意見が多く、もっとAEDを使う機会を増やすべきである。そこにはインストラクターの育成も課題となってくる。</p> <p>また、ストレスを感じやすい一年次生にとって初年次教育がいかに重要かという事が示される。今回のフォーラムによって、この取組が他学部にあまり浸透していないと感じた。さらなる学部横断的な実施が望ましい。</p>		

《重点教育支援》 テーマb:教養教育を起点とする学士力の保証

5	取組名称	(主題) フィールド調査主体の問題発見解決能力育成 (副題) 地域および企業との共同研究を通じた社会人基礎力と学士力の実践的育成プログラム
	取組主体	経済学部
	取組責任者	経済学部 教授 齋藤 参郎
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>本取組は、演習型の講義において、学生をフィールド調査や企業との共同研究プロジェクトに参加させ、「自分の頭で考える」習慣を身につけさせるとともに、これを問題発見や問題解決に結び付ける自覚的な学びの方法を習得させることを目的として、2つの流れで行った。</p> <p>1つ目は、九州の県庁所在地の中心商店街と連携し、中心商店街での消費者回遊行動調査の実施を主体とした、フィールド調査の企画、実施、分析、報告のサイクルを学生に体験させる演習講義である。具体的には、1)九州各地の都心部や中心市街地等において、学生が企画した調査を実施し、その調査データを用いデータ解析、報告書作成の一連の研究過程を体験させる。2)調査の企画実施には、地元の商店街、自治体、企業などと連携し、提携を結ぶ。3)研究成果を、自治体、商店街、市民などが参加する研究報告会を開催し、研究成果を発表・公表し地域貢献を行うとともに、更なる課題を採取する。4)収集した調査データを解析し、調査研究成果報告書を取りまとめる。</p> <p>2つ目は、企業との共同研究プロジェクトを立ち上げ、学生が、これに参加する演習型講義である。具体的には、1)地元のゲーム開発企業など、大学との共同研究に積極的な企業と共同研究契約を結ぶ。2)企業と共同研究の目的を明確に設定する。3)企業との共同研究プロジェクトに学生を企画段階から参加させ、現場担当者と打ち合わせしながら、実際にソフトやシステム開発を行って、実際に事業として社会実験を実施する。4)適宜、中間報告など、研究の進捗状況を、演習型講義の中で行う。5)実際に開発したソフトなどを用いて、現場で社会実験を行い、事業としてのフィージビリティの観点から評価し、最終的に成果を研究報告会で発表する。</p>		



取組⑤: 成果報告ポスター

本取組のねらい

企業との共同研究への参加やフィールド調査の企画、設計、実施、分析、報告を通して、学生に、現場でのさまざまな体験や経験、学生間教員間の対話、現場となった商店街や自治体担当者との対話の場を提供することで、問題発見力と問題解決能力を習得させること

主体性を育む上で工夫した点

- 複数の教員が、同一のデータや問題に対し、異なった解釈や意見を持っていることを、明示的に学生に示し、多視点からの考察や、他者と異なった自分の意見を述べてもよい、との勇気を、大学入学の早い時点の初年次段階の学生に与えた
- 現場の商店街や自治体の担当者に、最初から、学生が対等に話すことは、難しい。そのためには、学生が、自己主張できる、有利な立場をつくってあげることが必要である。そのための大きなポイントが、現場にとっても学生にとっても教員にとっても、等しく全くはじめてのデータ、情報となる、フィールド調査から得られたデータであり、そのデータに対する解釈や理解において、学生が、教員、現場と対等の立場で議論できるようにした
- さらに、学生に、統計分析からモデル構築にいたるまでのデータ解析の技能を習得させ、政策志向の考え方と融合させることで、学生の積極的な現場での発言、提案を引き出すことができた

本取組の成果

1. フィールド調査プロジェクトでは、学生企画の8本の調査が実現した。特に、本年度は、毎年実施している福岡都心部・熊本都心部・鹿児島都心部での消費者回遊行動調査に加えて、新たに、筑紫野市、大分市、別府市、宮崎市で消費者行動調査を実施し、現地で本取り組みが大いに評価された
2. 各研究グループの研究成果を報告する「まちづくりマーケティング調査研究発表会」(2013年2月13日、於:よみうりプラザ)を開催し、合計20本の研究報告を行い、各参加者と議論を行った
3. 鹿児島市、筑紫野市、熊本市、宮崎市での消費者行動調査の研究成果を、地元関係者に向けて、報告会を開催し、参加者から高い評価を得た。次年度以降も継続を強く要望されており、本取り組みが地域貢献に大きく寄与した。また、研究成果の一部が地元のマスコミに取り上げられるなど、大きな注目を集めた
4. 企業との共同研究プロジェクトでは、アプリ開発の企業と共同で、スマートフォンで位置情報を自動的に収集する回遊行動調査アプリを開発し、鹿児島都心部回遊行動調査の実施にあわせて、鹿児島市天文館地区で実験を行い、データの収集に成功した

平成24年度スケジュール

● フィールド調査プロジェクト

- 2012年4月7日 鹿児島都心部回遊行動調査報告会(於:山形屋)
- 2012年4月28日・29日 筑紫野市回遊行動調査の実施
- 2012年5月13日 熊本市中心市街地視察・黒川温泉調査ならびに黒川温泉青年部との意見交換会
- 2012年5月26日・27日 熊本都心部回遊行動調査の実施
- 2012年6月30日・7月1日 福岡都心部回遊行動調査実施
- 2012年7月17日 筑紫野市共同調査研究報告会(於:福岡大学病院メディカルホール)
- 2012年8月8日 熊本大学工学部まちなか工房・すきたい熊本協議会主催「中心市街地活性化セミナー」での熊本都心部回遊行動調査の分析報告(於:日専連ホール)
- 2012年10月14日 大分中心市街地・別府中心市街地視察
- 2012年11月10日・11日 鹿児島都心部回遊行動調査実施
- 2012年12月1日・2日 宮崎都心部回遊行動調査の実施
- 2012年12月15日・16日 大分都心部回遊行動調査の実施
- 2012年12月15日・16日 別府市来訪者回遊行動調査実施
- 2013年2月13日 平成24年度まちづくりマーケティング調査研究発表会(於:よみうりプラザ)
- 2013年3月25日 宮崎都心部回遊行動調査報告会(於:宮崎銀行橋通支店)

● 企業との共同研究プロジェクト

- 2012年4月～7月 企業の選定・業務内容の決定(回遊行動調査アプリの開発)
- 2012年8月～10月 企業との打ち合わせ・アプリ作成・テスト
- 2012年11月10日・11日 鹿児島市天文館地区で社会実験
- 2012年12月～2013年2月 事後評価
- 2013年2月13日 平成24年度まちづくりマーケティング調査研究発表会(於:よみうりプラザ)で成果報告



問題点

- 学生の旅費について、参加学生が2割を負担することになっている。本取組では、学生が熱心に取り組む、複数の調査にかかわるほど、学生の負担額が大きくなり、活動の妨げになっている

《重点教育支援》 テーマb:教養教育を起点とする学士力の保証

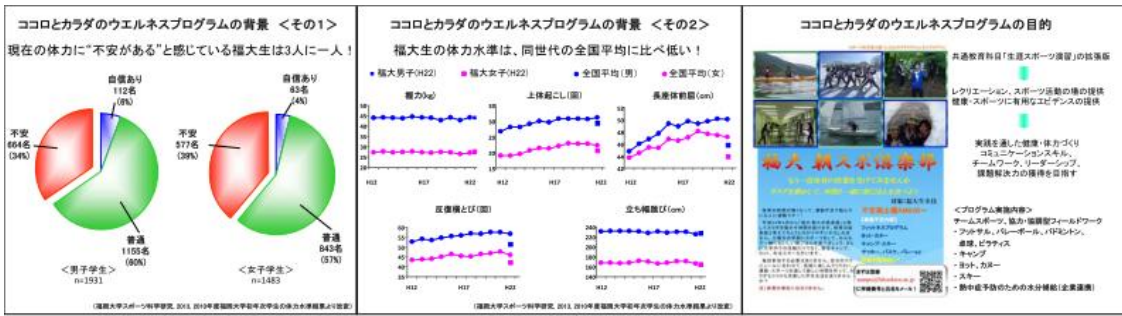
取組番号	取組名称	(主題) フィールド調査主体の問題発見解決能力育成 (副題) 地域および企業との共同研究を通じた社会人基礎力と学士力の実践的育成プログラム
⑤	取組主体	経済学部
	取組責任者	経済学部 教授 齋藤 参郎
1. 取り組みに対する主な質問とその回答		
<p>●1 この取り組みは何年生から参加しているのか？ (回答) 1年生のころから演習形式の講義の一環としておこなっており、学年が進むにつれて、スキルアップを図っている。 (コメント) 1年生から継続的に参加していくことはとても重要なことですね</p> <p>●2 社会とのかかわりはあるのか？ (回答) フィールド調査を行う前から地元商店街、自治会などと学生がディスカッションし、問題を発見し、ている。調査時には、一般の方にアンケートを行うので、地元の生の声が聴ける。報告会では、地元商店街、行政から忌憚のない意見が出され、新たな問題発見につながっている。1年生のころから演習形式の講義の一環としておこなっており、学年が進むにつれて、スキルアップを図っている。</p> <p>●3 経済学部では、数学にとっつきにくいと思われるが、そのあたりはどのように対応しているのか？ (回答) 2年次の講義科目で一般的な数学を勉強し、3年次で応用数学を勉強する。数学が苦手な学生が多い経済学部では、この調査・分析を通じて、とりあえず数学がわからなくてもSPSSなどの統計ソフトを利用すれば、何らかの結果が得られ、なぜその結果が得られるのか、また、調査・分析を通じてどのようなことが問題となっているのかに興味を持つことで数学を使ったモデルの構築への習得を行っている。</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<ul style="list-style-type: none"> 先生から教えてもらったこと、テキストに載っていることだけではなく、地元の意見や、実際に得られたデータを扱うことの重要性を改めて認識した。 1年生から4年生まで同じテーマで取り組んでいき、継続的に実施している点が非常に評価されたことから、その重要性が再認識できた。 		
3. 今後改善すべき点		
<ul style="list-style-type: none"> 社会に対する成果、学生の成果が明確な形でみえてないので、成果物を作るなり、政策提言を明示的に行うことで、このプログラムに対する改善が図られるとの意見が得られた。 		

取組⑥:取組概要

《重点教育支援》 テーマb:教養教育を起点とする学士力の保証

取組番号	取組名称	(主題) ココロとカラダのウェルネスプログラム (副題) 心身の活性化と交流のためのスポーツプログラムサービス
⑥	取組主体	スポーツ科学部
	取組責任者	スポーツ科学部 教授 檜垣 靖樹
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>本プログラムでは、共通教育科目「生涯スポーツ演習」の拡張版という位置づけで実施し、学部学年を超えたグループでのレクリエーション・スポーツ活動を通して、コミュニケーション・スキル、チームワーク・リーダーシップ、課題解決力などの醸成を促すこと、さらに積極的な運動・健康（ウェルネス）への意識化により心身の健康度の改善を図ることを目的として、以下の取り組みを実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 朝スポ倶楽部：不定期土曜8時から1時間程度のスポーツ活動を前・後期それぞれ5回実施した。総登録者数は205名であった。 2) キャンプ：くじゅうの杜キャンパスやまなみ荘キャンプ場において、冒険教育施設を活用したプログラムを実施した後、杓掛山までの登山を行った。参加者数は15名であった。 3) ヨット・カヌー：福岡市小戸ヨットハーバーにてヨット・カヌー体験プログラム及び熱中症対策講座を実施した。ライフジャケット着衣による安全管理を徹底し、ヨット部員によるサポートを受けた。参加者数は44名であった。 4) フィットネス：毎週月曜日18:00より第二記念会堂リハビリ室にて60分のピラティス教室を全10回開催した。自宅などでも取り組める簡単な運動を中心に実施した。参加者は10～30名であった。 5) スキープログラム：くじゅうの杜キャンパスやまなみ荘に宿泊し、九重森林公園スキー場にて実施した。スキー技術別にグループ分けをし、技術向上と学部を超えた交流促進を図った。参加者数は34名であった。 <p>尚、本プログラムの成果の一部を平成25年1月発行の七隈の杜第9号「心地よい運動のすすめ」に掲載した。</p>		





○プログラム概要

朝食をしっかり食べることが、規則正しい生活習慣を身につけ、生活習慣病の予防、そして、ココロとカラダのウエルネスにとって大切である。このことから、「おいしく朝食を食べる」をテーマに朝に活動することをメインにするということで、「朝スポ倶楽部」と命名され、ウエルネスプログラムサービスの提供を行っている。

【朝スポ倶楽部への参加登録】

- 朝スポ倶楽部への登録
学籍番号と氏名を asapo@fukuoka-u.ac.jp へ送信
- プログラム内容・日時・場所の確認
上記アドレスからプログラム内容・日時・場所が配信される
- 参加希望を返信
希望のプログラムがあれば、具体的なスポーツ活動名を返信
- 朝スポ倶楽部の活動へ参加
メールアドレス登録者数: 205名



○福大朝スポ倶楽部 通常プログラム

スポーツ活動

＜活動概要＞
朝スポ倶楽部の活動として、前期(5月～7月)、後期(10月～12月)の不定期土曜日の朝8:00から、第二記念会堂および第一記念会堂にて1時間程度のスポーツ活動を実施した。対象は朝スポ倶楽部の会員に登録している学生で、毎週メールにて参加者を募り、希望する学生が参加する形態をとった。

＜活動内容＞

日付	活動内容	参加者	活動場所
5月19日	フットサル/バドミントン	18名	第一記念会堂
6月2日	卓球/バスケットボール	9名	第一記念会堂
6月16日	バレーボール	4名	第二記念会堂
6月30日	バドミントン/卓球	11名	第二記念会堂
7月14日	アテンドット	6名	第一記念会堂
10月6日	バスケットボール/卓球	18名	第一記念会堂
10月27日	テニス	8名	陸上競技場
11月17日	フットサル/卓球	10名	第二記念会堂
12月1日	バドミントン/フットサル	2名	第二記念会堂
12月8日	バレーボール	6名	第一記念会堂

○福大朝スポ倶楽部 夏季集中プログラム キャンプ

＜活動概要＞
朝スポ倶楽部の夏季集中プログラム第2弾として、8月5～7日の2泊3日の日程で、福岡大学くじゅうの杜キャンパスやまなみ荘キャンパスにおいてキャンプを実施した。新しく出陣した冒険教育施設を活用したプログラムを実施した後、香炉山までの登山を行った。

＜参加者数＞
学生6名 学生スタッフ7名 引率教員2名 総参加者数15名

＜参加者の感想＞
○キャンプに参加して普段出来ないようなこと(登山、ロッククライミング)が出来たので、とても高にまりました。また、人と協力することの大切さを学びました。本当に朝スポキャンプに参加出来たことを誇りに思っています。

○今回は「チャレンジ」と言うことで、PA?を使ったいらんなことに挑戦しました。そして、少数ながらも自由なキャンプ、授業の一環という友人とのキャンプでは経験出来ない様なこともたくさん出来ました。初めは、一緒に行く友達が風邪でキャンセルして多少の不安がありました。土曜の朝スポでよく見るメンバーだったので、緊張はありませんでした。みんな慣れて、すぐに仲良くなりました。今年の夏一番の思い出になりそうです!!

○福大朝スポ倶楽部 冬期集中プログラム スキー

＜活動概要＞
朝スポ倶楽部の冬期集中プログラムとして、12月26～28日の2泊3日の日程で、福岡大学くじゅうの杜キャンパスやまなみ荘に宿泊し、九重森林公園スキー場にてスキー実習を実施した。技術レベルごとに班分けをし、教員スタッフが安全なスキーの楽しみ方を指導した。また宿舎であるやまみ荘にてレクリエーションなどを実施した。

＜参加者数＞
学生34名 学生スタッフ5名 引率教員8名 総参加者数47名

＜参加者の感想＞
○初めて朝スポに参加することで不安だったが、大学スタッフがとても良くサポートしてくれたので、3日間とても楽しく過ごすことができた。スキーは1回しか滑ったことがなかったのに急になってる山を見て不安になったが、指導のお陰で上手く滑れるようになった。

○ホテルでは食事もおおいしく、温泉も気持ちよく本当に最高だった。自由時間も十分にあったので初対面の人とも仲良くなることができ、充実した時間を過ごすことができた。雷が電気がいりで大変驚き、感動した。

○夜のレクリエーションなど、いろいろ楽しかった。違う学部の子と普段からわかる機会がないので仲良くなってよかった。参加してよかったと思った。

●朝スポ倶楽部サポーター教員
石塚利夫、黒瀬真一郎、永山直、田原二(現 名城大学)、藤澤秀行(現 和洋女子大学)、松永千賀、本田真貴、渡邊正和、塚山泰典、佐藤博樹

●朝スポ倶楽部サポーター学生
スポーツ科学部スポーツ科学科と健康運動科学科の学生、体育委員会幹事員

○福大朝スポ倶楽部 夏季集中プログラム カヌー・ヨット

＜活動概要＞
朝スポ倶楽部の夏季集中プログラム第1弾として、8月3日に福岡市小戸ヨットハーバーにてヨット・カヌー体験プログラム及び船中症対応講座を実施した。ライフジャケット着点による安全管理を徹底し、ヨット教員によるサポートを受けた。

＜参加者数＞
学生23名 学生スタッフ17名 引率教員4名 総参加者数44名

＜参加者の感想＞
朝スポに今期初めて参加しました。普段では出来ないスポーツの体験の機会をつくって下さった事にも感謝しています。ヨット、カヌーは競技としてどのようなものか知らなかったため、今回の体験が興味を持ちました。1、2年生のうちからこのような機会に定期的に参加すると、大学生活の中の興味も広がるのではないのでしょうか。是非、今後の活動にも参加したいと思っています。

○福大朝スポ倶楽部 フィットネスプログラム

ピラティス教室〜めざせきれなおなか！めざせスマートボディ〜

＜活動概要＞
毎月、毎週月曜日18:00から外部専門講師を招聘し、第二記念会堂1Fホールにて60分のピラティス教室を全10回開催した。自宅などでも取り組める簡単な運動を中心に実施された。

＜ピラティス教室登録者数＞ 43名

＜参加者数＞
第1回27名 第2回31名 第3回20名 第4回19名 第5回13名 第6回13名 第7回12名 第8回12名 第9回12名 第10回13名

＜受講者参加理由＞
✓やせてキレイになりたい、17名
✓腸胃をつけたい、基礎代謝を上げたい、7名
✓姿勢をよほしたい、7名
✓腰を痛くしたい、下半身をひきめたい、6名
✓体脂肪を減らしたい、4名
✓その他: 腰痛・肩こり改善、柔軟性アップ、歪み改善、健康維持

○セルフモニタリングシートで体重や体脂肪率の把握と生活習慣の自己評価も実施!

取組⑥:リフレクション

《重点教育支援》 テーマb:教養教育を起点とする学士力の保証

取組番号	取組名称	(主題) ココロとカラダのウェルネスプログラム (副題) 心身の活性化と交流のためのスポーツプログラムサービス
⑥	取組主体	スポーツ科学部
	取組責任者	スポーツ科学部 教授 檜垣 靖樹
1. 取組みに対する主な質問とその回答		
<ul style="list-style-type: none"> ・ココロとカラダのデータとしての関連性、これらのデータと活動との結びつきについて ・ココロの調査について、心理テストを行うべきでは？ <p>【回答】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢体力テスト結果とココロの状態の関連性をみるために、今後、アンケート調査結果と照合して解析していきたい。 ➢今後、カラダとココロの関連性を検討し、1) どのような結びつきがあるのか、2) 朝スポに参加することでどのような効果があるのか、など明らかにする。 ➢今年度(H25)は、POMS、SF36、STAIなどの心理テストを利用し、生スポ論の授業で調査することが可能か⇒限界、アンケート調査は無記名であるので、ココロとカラダの関連性、朝スポ参加者の特徴やその効果を検証するためには、記名式のアンケートを検討すべきか。 <ul style="list-style-type: none"> ・活動目的の詳細について <p>【回答】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢スポーツ活動の場の提供やレクリエーション・スポーツ活動を通して、体力づくりやコミュニケーションスキルの向上を目指す目的で実施している。 <ul style="list-style-type: none"> ・参加者数が少ない理由について <p>【回答】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢広報活動が浸透されてなかった ➢日程や時間帯等のスケジュールが学生のニーズに合っていなかった ➢午前8時開始は早すぎるため(自宅通学生は間に合わない?) <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ施設を利用できる時間帯は？ ・他の学部でスポーツ施設を利用したい場合は？ <p>【回答】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢基本、部活動が行われていない時間帯を利用している ➢スケジュール調整は難しいと思われる 		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<ul style="list-style-type: none"> ・本プログラムの評価として、短期的および長期的な視点の在り方 		
3. 今後改善すべき点		
<ul style="list-style-type: none"> ・学生参加者数の増加を促す情宣活動の充実 ・プログラムに参加しやすいスケジュール調整 ・プログラム評価 		

《重点教育支援》 テーマb:教養教育を起点とする学士力の保証

取組番号	取組名称	(主題) 教職志望学生への基礎学力向上プログラム (副題)
⑦	取組主体	教職課程教育センター
	取組責任者	教職課程教育センター長 高妻 紳二郎 (人文学部 教育・臨床心理学科 教授)
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>本プログラムは教師を目指す学生を対象とし、教科指導力のベースとなる基礎学力向上と学際的な視野をもつことができる人材を養成することを目的としている。そのために「知識」(3・4年生、院生による1・2年生を対象とした模擬授業)、「体験」(フィールド・ワークやイベントの企画・実施(史跡・博物館等調査、理科実験教室等))、「連携」(教科横断的・総合的なイベントにおける学生間の交流/現職教員との交流)、「省察」(ポートフォリオによる「知識」「体験」「連携」を通じた活動の省察)の4つの要素を軸とし、以下の5部門を用意し、継続的に成果の蓄積を図ってきた。</p> <p>①社会科学教育部門では、「社会科学習プログラム」として、(1)社会科学勉強会、(2)現地フィールドワーク、(3)長期休暇中の自主学習会を実施した。</p> <p>②英語科教育部門では(1)教職志望の3・4年生による1・2年生も参観可能な模擬授業実践環境の構築、(2)他大学や学会発表における同取組への視察を行った。</p> <p>③数学科教育部門では、学外から現職教員の育成に定評のある講師と本学卒業の数学科教員を招聘しての講演会と座談会を開催した。</p> <p>④理科教育部門では、科学啓発活動への参加を促し、近隣開催のリフレッシュ理科教室や理科読の会等の現場を見学取材させることを通して自己の理科教員としての資質を向上させる取組を継続して実施した。</p> <p>⑤ポートフォリオ活用部門では、講義や課外活動でのポートフォリオ活用を促し、学校におけるボランティアの記録を取り、それを基に振り返りの検討会を実施する等の有効活用を図った。</p>		



取組⑦: 成果報告ポスター

本プログラムは教師を目指す学生を対象とし、教科指導力のベースとなる基礎学力向上と学際的な視野をもつことができる人材を養成します。

そのための4つの視点

- 「知識」… 3・4年生、院生による1・2年生を対象とした模擬授業。
- 「体験」… フィールドワークやイベントの企画・実施。
- 「連携」… 教科横断的・総合的なイベントにおける学生間、／現職教員との交流。
- 「省察」… ポートフォリオによる「知識」「体験」「連携」の省察。

基礎学力につながる独立した5種類のプログラム

- ① 社会科教育部門
 - ② 英語科教育部門
 - ③ 数学科教育部門
 - ④ 理科教員部門
 - ⑤ ポートフォリオ活用部門
- 個別の取組みを通して教科指導力の向上をめざす。
- 教職履修カルテWebシステムの活用。各プログラムの成果(レポートや指導案、実践ビデオ、感想等)を蓄積。

→ 今回は①③④の成果に焦点化した発表を行いません。

社会科教育部門

I. 概要

- ① 社会科勉強会(4月～7月、10月～12月)
日本史(古代・中世)、日本史(近世～現代)、世界史(古代・中世)、世界史(近世～現代)の4つの単元を分け、それぞれ5時間あるいは6時間に補習形式で開催した。内容は、学生によるレジュメ報告や、模擬授業が中心である。
- ② 現地フィールドワーク
学生、院生スタッフ、教員に加え、歴史研究者や学校教師との連携のもと、バスハイイクによるフィールドワークを企画。
・「旅費の光と影～女僕館編の話～」(7月1日)
・「史跡フィールドワーク～城跡・近代建築・神社を訪ねて～」(11月23日)
・「史跡フィールドワーク～福岡の戦争遺跡・資料館を訪ねて～」(12月10日)
- ③ 長期休暇中の自主学習会
地理・公民を含めた模擬授業披露会に学部生が自主的に取り組んだ。(2～3月)

II. 工夫した点

- ① 教職を目指す、あるいは教職免許をもつ大学院生が、サポート役にまわって、学生目線での教材研究の指導、勉強会の企画・運営に当たってもらうことにより、学部生目線の自主性が発揮されやすい環境を整えた。→ **学生の主体性の涵養**
- ② 世界史学習に関しては、未履修者が多いという現状を踏まえ、高等学校の教科書・資料集をベースにした。→ **基礎学力の涵養**
- ③ 日本史学習に関しては、ただ概説を振り返るのではなく、「モノ」「地域」「文化」を軸に、学生自身が選択したテーマを数回に分けて教材化させた。→ **教材研究の訓練**
- ④ 実際に、歴史的な「モノ」(有形・無形問わず)に触れる機会を、実習形式の勉強会やフィールドワークを通じてつづけた。→ **リアルな歴史観の蓄積**
- ⑤ 教育実習を控えた学生を「教師役」、1～2年生の学生を「生徒役」とした模擬授業をおこなった。→ **教科教育法のスキル向上**
- ⑥ 現役の学校教師との交流の場を設け、教材研究のノウハウを修得する機会をつづけた。→ **大学生と現役教師との協働**

III. 具体的な成果

- ① 「学力」「授業力」「度量」を鍛えたことによって、自信をもって教育実習に挑めた。
- ② 学生たちがつくった板書計画や学習記録、授業の様子等をデータとしてストックしておくことで、学生たちにとって「振り返り」の作業が可能となった。
- ③ 現役の学校教師との交流を深めることができ、学生が教材研究のサポートを受けるためのパイプ作りの基盤を構築することができた。
- ④ 歴史を専門とする学会との連携・交流を通じて、学生が学んだことを社会に発信することができた(例:イギリス女性史研究会会報『女性・ジェンダー・歴史』第9号掲載)。



【左上】
模擬授業の様子

【右上】
日本史(古代・中世)、
良感の輸送づくりの様子

【左下】
現職教員とのフィールドワーク

IV. 他学部への波及効果

参加者の所属が、人文学部(歴史学)中心ではあったものの、経済学部、法学部など幅広い参加を促すことができた。
→ 社会科の免許は、人文学部(歴史、文化、臨床心理)、法学部、経済学部、商学部で取得可能なので、学部を超えた「学際的」な取り組みが期待できる。

数学科教育部門

I. 概要

連続講演会「高度情報知識基盤社会における教育のあるべき姿」と題して、次の講演会を実施した。

- ① 演題:『数学的活動の考え方ー雑(すい)の体積の公式を出してみようー』
講師: 岡部恒治氏(埼玉大名誉教授)

岡部氏は、「分数ができない! 大学生」の筆頭著者としても有名な数学者、数学教育者である。手作り教材を用いて三角錐などの立体の公式を生徒たち自らで発見させるなど、新学習要領で強調されている「数学的活動」とは、どのように実践すればよいのか参加型授業実践をおして指導していただいた。



- ② 演題:『所変われば、算数・数学教育も変わる?』
講師: 牛道文宏氏(京都産業大学理学部数理科教授)

牛道先生は、純粋数学の研究と並行して、数学教員を育成する活動をしており、数学者の立場から小学校・中学校・高校の教員を対象に講演や助言指導をおこなっている。長年、教員と対話し教員を見てきた経験から、教職志望の学生たちに、得業教壇に立った時に役立つような現場の話を多数していただいた。特に、算数数学と理科や社会科など他教科との連携をとることを強調され、いくつかの具体的なカリキュラムも示していただいた。また、数年前に福岡大学理学部応用数学科を卒業した中学校の数学教員の公開授業のビデオを見せていただき、解説をしていただいた。



II. 具体的な成果

教育実践指導の豊富な経験を持つ、たいへん著名な数学者・数学研究者から今日的な数学教育のあり方について極めて具体的に実践的なお話や実践指導をしていただくことができ、教職を目指す学生にとっても、教職科目の指導をしている教員にとっても、教育現場の課題がよく理解できて有益であった。

理科教員部門

I. 活動のスキーム

- ① 科学啓発活動を知る。
・リフレッシュ理科教室
・出張理科教室
・理科誌
・科学の祭典 ほか
- ② 活動へ参加する。
・取材
・実験補助
・活動参加者(指導者)との交流
- ③ 報告書にまとめる。
・報告書の添削指導
- ④ ポートフォリオの材料として活用する。

II. 今年度対象のイベントと活動

- ・サイエンスモールin飯塚(複合イベント)
(9月22日～23日、飯塚コミュニティセンター)
- ・理科誌の会(福岡大学科学技術コミュニケーションG主催)
- ・世界一好き! 科学広場in飯塚(SAFnet主催)

III. 今年度の成果

→ 活動は、イベント全体の取材と報告書作成。

今回対象としたイベントは、どれも長年にわたって、教育委員会、市役所、図書館と連携して、われわれが育ててきたものであった。学生は、その現場を取材し、活動がどのような組織によって、どのように運営されているかを知る事ができた。また、イベント参加者がどのような感想を持っているか、またこのような活動の社会的ニーズを実感した。

・取材活動と報告書作成を通して、社会的情報のマネージスキルの不足を実感し、スキル向上の重要性を認識した。

IV. 検討課題

- ① この取り組みをどのように制度化するのか
正課カリキュラムに取り組むのか、または正課外の取り組みとするのか。指導受入れ人数に制限。社会と直につながった活動であるという意識をもたせるための準備。
- ② 参加者(指導者)との交流スキームの企画
理科支援員制度や学生サポーター制度など、日常的な教育現場とのつながりを作るきっかけとなること。
- ③ ポートフォリオ制度の活用
報告書を教職課程の活動実績として、ポートフォリオに組み入れる。

こちらに報告書を
展示しています。

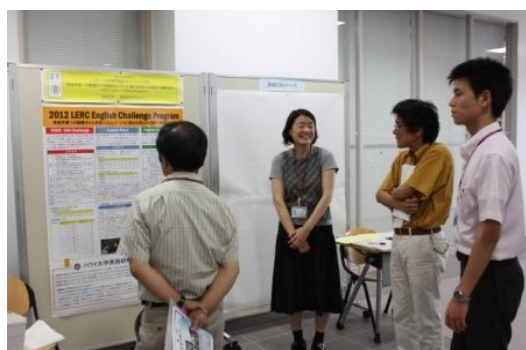
《重点教育支援》 テーマb:教養教育を起点とする学士力の保証

取組番号	取組名称	(主題) 教職志望学生への基礎学力向上プログラム (副題)
7	取組主体	教職課程教育センター
	取組責任者	教職課程教育センター長 高妻 紳二郎 (人文学部 教育・臨床心理学科 教授)
1. 取り組みに対する主な質問とその回答		
<p>社会科学教育部門</p> <p>Q: 教職教育も含まれているのか (各教科で共通するような)</p> <p>A: 教科の中身が中心。授業の経験。</p> <p>Q: 特徴は?</p> <p>A: 学生主体であること。上級生が下級生を指導する。</p> <p>Q: 参加人数は?</p> <p>A: 20人ほど</p> <p>Q: 運営は?</p> <p>A: 大学院生のTA。教育実習の経験等を生かしてから指導。企画段階から。</p> <p>Q: 模擬授業の前後で評価を測るような指標はあるか?</p> <p>A: 今のところ客観的な指標はない。</p> <p>理科教育部門</p> <p>Q: 参加学生について</p> <p>A: 本当に熱心な学生しか参加しない。単位にならないため。しかしそれが良かった。研究室や授業の関係の延長で実施。自分から参加を表明できないような学生も巻き込めないだろうか。</p> <p>数学教育部門</p> <p>Q: 教育実習の準備を目的とした授業?</p> <p>A: 授業とは別。独立したプラスアルファのもの。</p> <p>ポートフォリオ</p> <p>Q: ポートフォリオとは</p> <p>A: 学習の成果・履歴を蓄積していくもの。教員からの評価と言うよりも学生の自己評価の材料。学習・活動等の履歴を採用試験時に提出できるようにするとよいのでは。</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 模擬授業や取組全体を通じた成果の指標の開発が必要。ただし、成果指標が必ずしも必要ない取組もあるので、その場合は検討すべき。 ・ 卒業生を活用するのであれば、直近に採用された若手教員を招く方がより学生が身近に感じるのでは。 ・ 学生にとって有効利用できるポートフォリオの構築を目指す。 		
3. 今後改善すべき点		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 取組のターゲットとすべき学生を焦点化するのか、それとも門戸を広げるのかを検討すること。 ・ 成果指標の明確化を取組によって検討すること。 ・ ポートフォリオに注げる材料を継続的に収集することを各取組で意識して進めること。 		

取組⑧: 取組概要

《重点教育支援》 テーマb: 教養教育を起点とする学士力の保証

8	取組名称	(主題) 英語学習への動機付けと英語コミュニケーション能力の向上を目指す実験的試み (副題) LERC English Challenge Program
	取組主体	言語教育研究センター
	取組責任者	言語教育研究センター長 大津 敦史 (人文学部 英語学科 教授)
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>本プログラムでは、英語学習への動機付けと英語コミュニケーション能力を向上させることを目的として以下の3つのプロジェクトを実施した。</p> <p>① 「TOEIC 550 Challenge Project」による英語学習への動機付けの向上 TOEICスコア550点にチャレンジし、平成23年9月から平成24年7月の間に受験したTOEIC (IPを含む) のスコアで応募した58名の中から各学部のスコア上位者2名とこれを除く全学部の最高得点者1名の計19名を選抜し、平成25年2月2日から24日までハワイ大学英語研修プログラムに派遣した。</p> <p>② 「English Speech Contest」の開催とその参加準備を通じた英語スピーキング能力の育成 9月29日に16名の参加者により、「Future Japan」をテーマとしたコンテストを行った。「文章の組み立て」や「ジェスチャー等表現力」を含めた総合的な英語スピーキング能力について審査し、優勝した学生をハワイ大学英語研修に派遣した。</p> <p>③ 「English Plaza」の開設とその利用による英語コミュニケーション能力の涵養 気楽に英語会話を楽しみながらコミュニケーション能力を高めることを目的に4月9日から7月6日、9月17日から12月14日までネイティブの外国語講師2名が月曜から金曜までの午後2時間常駐する「English Plaza」を文系センターに開設した。参加者は延2,481名となった。また、9月10日から12日まで英語合宿「English Plaza in Kujunomori」を実施した。学生30名、教員7名が参加し英語を使った様々なアクティビティに取り組んだ。</p>		



2012 LERC English Challenge Program

英語学習への動機付けと英語コミュニケーション能力の向上を目指す実験的試み

TOEIC 550 Challenge

TOEICで高得点取得を目指して英語力を磨き、実際にTOEICを受験し応募してきた学生の中から各学部毎にスコア上位者を2名ずつ選抜し、2月にハワイ大学で開講される3週間の英語研修プログラムに校費で参加させるプロジェクト。

実施概要	
応募資格	1)英語を母語としない本学学部生 ※英語圏以外からの学部留学生を含む ※親が英語圏出身者である場合、本人が日本で生まれ育った場合は可 2)海外滞在経験者はその期間が合計6か月以内である者 3)本学入学後の所定の期間に実施されたTOEIC公開テストまたはTOEIC IPテストを受験した者 4)LERC English Challenge Programにおいてハワイ大学英語研修参加者に選出されたことがない者 ※研修への参加には保護者の承諾が必要。
応募要領	応募用紙に公式認定証またはスコアレポート(いずれも原本)を添えてセンター窓口(文系センター1階)に提出。
募集期間	平成24年9月14日(金)～9月21日(金) ※受付時間 8:50～16:50(土曜日は12:35まで)
選出基準	人文・法・経・商(二部を含む)・理・工・薬・医・スポーツ科 学部各学部内で、高得点を取得した者上位2名を選出。
結果発表	平成24年10月2日(火) 10:00 ポータル・掲示で発表
研修期間	平成25年2月2日(土)～2月24日(日)

応募総数: 58名(昨年度: 70名)
応募者平均点(学部別)

L	J	E	C	S	T	M	P	G
696	620	685	636	633	638	691	667	577

選出結果: 19名

学部	学年	スコア	学部	学年	スコア
L	4	710	S	4	580
	3	750		1	745
J	4	725	T	4	760
	1	710		2	660
E	4	800	M	1	890
	3	550		1	840
B	2	705	P	3	740
	1	785		2	770
C	1	720	G	4	560
				3	905

English Plaza

毎日2時間2名のネイティブ教員と、文法や発音など気にせずとにかく「英語で会話を楽しむこと」で会話力とコミュニケーション力を培うことを目的としたプロジェクト。今回は合宿版English Plazaも実施。

実施概要	
前期: 4月9日～7月6日	時間: 12:30～14:30
後期: 9月17日～12月14日	場所: プラザ50

参加者数	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	計
実施回数	15	19	21	5	10	19	19	10	118
参加者数	420	375	422	97	268	416	336	147	2481
1回平均参加者数	28	20	20	19	27	22	18	15	21

(昨年度参加者数) ※参考

実施月	4月	5月	6月	7月	9月	10月	計
実施回数	5	17	22	6	10	19	79
参加者数	84	209	328	67	120	223	1031
1回平均参加者数	17	12	15	11	12	12	13

学生からの要望もあり前年より開催期間を2か月延長した。参加者数が増えたことはもとより、今年特筆すべきはEnglish Plazaに常日頃参加している学生が多数海外留学に参加したことである。培った英語力を試しに海外へ行く多数の学生達を目的にしたことで、このプロジェクトの意義を強く確信した。

<特別企画> English Plaza in Kujunomori

実施概要	
日時	平成24年9月10日(月)～12日(水)
場所	くじゅうの杜キャンパス「やまなみ荘」
費用	3,000円(学生)
人数	学生: 30名 教員: 7名 事務: 2名

2泊3日で英語漬けになる合宿版English Plazaを実施した。学生の英語レベルが様々だったためレベルによって7班に分け、少人数のグループワークや劇、クイズ大会、全員で行うインタビューなど誰もが楽しく参加できるよう7名の教員が工夫して行った。この合宿に参加するまでEnglish Plazaに来たことがなかった学生が半数いたが、後期からEnglish Plazaにも積極的に参加するようになった。




English Speech Contest

普段学んでいる英語力だけでなく、文章の組み立てやジェスチャー等の表現力を含む総合的な英語スピーキング能力を審査し、優勝者をハワイ大学英語研修に校費で参加させるプロジェクト。

実施概要	
日時	平成24年9月29日(土) 10:00～15:00
場所	中央図書館1階 多目的ホール

テーマ: "Future Japan"
日本での生活はどうなるか、世界においてどのような役割を担うかなど様々な分野や方向における未来の日本の可能性について述べる内容

実施概要	
応募資格	1)英語を母語としない本学学部生 ※英語圏以外からの学部留学生を含む ※親が英語圏出身者である場合、本人が日本で生まれ育った場合は可 2)海外滞在経験者はその期間が合計6か月以内である者 3)LERC English Challenge Programにおいてハワイ大学英語研修参加者に選出されたことがない者
参加者数	応募総数: 22名 コンテスト出場者: 16名(辞退: 6名) スペシャルスピーチ: 1名(昨年度優勝者)
要領	1)1人当たり5分 2)視覚機器は使用不可 3)壇上にはアウトラインのみ持込可。(原稿は不可)
審査基準	1)Contents(40%): 主題の展開、有効性、独自性と創造性、首尾一貫性 2)English(30%): 文法、単語の選択、文の構成、表現力 3)Delivery(30%): 明快さ、聴衆を引き込む話し方、速さと流暢さ、アクセントとイントネーション
結果	1位 山下 奈穂子(薬学部 薬学科3年) "Medical tourism would be in the future" 2位 三谷 奈央(人文学部 英語学科3年) "Stop talking to your phone and do it yourself" 3位 中村 香(人文学部 英語学科4年) "Japan as Asia, and Japan as the world"



会場の雰囲気を作り出そうと試みる者やジェスチャーを使い聴衆に訴えかける者など昨年度に比べてスピーチ時の工夫が感じられた。



ハワイ大学英語研修(Winter NICE)

【研修日程】2013年2月2日(土)～2月24日(日) 23日間 (Winter NICEは2月4日～2月22日)
【クラス分け】Advanced Class 3名、High Intermediate Class 5名、Intermediate Class 9名、High Basic Class 3名、Low Basic Class 0名
【研修内容】English Class(計 約46時間)、ワークショップ、エクスカッション等
【授業内容】グループディスカッション、プレゼンテーション、ディベート、学外授業等

参加した学生のアンケートより

- ▶自分の英会話力不足を痛感するとともに英語力向上への意欲が高まった。
- ▶ハワイと日本の文化や歴史について事前にもっと知識を深めていくべきだった。
- ▶他国の学生との考え方や表現の仕方の違い、お互いの文化について知ることができた。
- ▶ホームステイを通して異なる文化・生活様式や協調性を学び、ホストファミリーや現地の人と積極的に交流することで自分の視野を広げることができた。



言語教育研究センター

取組⑧:リフレクション

《重点教育支援》 テーマb:教養教育を起点とする学士力の保証

8	取組番号	(主題)英語学習への動機付けと英語コミュニケーション能力の向上を目指す実験的試み (副題)LERC English Challenge Program
	取組名称	
	取組主体	言語教育研究センター
	取組責任者	言語教育研究センター長 大津 敦史(人文学部 英語学科 教授)
1. 取組みに対する主な質問とその回答		
<p>Q1 英語コミュニケーション能力の向上で、どの程度成果あがったのか？</p> <p>A1 まず英語コミュニケーション能力を定義するのは難しい。listeningとreadingという単なる受容能力だけではなく、speakingとwritingという表現能力まで含めたトータルな能力だとすれば、TOEIC SWないしTOEFL iBTを利用するのが最も効果的にその能力を測定する方法であるが、現段階では価格面でも実施面でもまだまだ難点が多い。この取組みの成果を数値化するのは難しいが、報告書中のアンケート項目 (Can Doリストの如き内容) への回答から、listeningとspeaking能力の伸びを指摘する参加者は多かった。成果の検証のために、今後は研修前の数か月を利用して、e-learningによる個人学習を実施させ、その前後でTOEICを受験させて取得スコアの伸びを測定する予定である。</p> <p>Q2 TOEICを受験した学生数は58名のみか？</p> <p>A2 550点以上を取得してこのプロジェクトに応募した学生数が58名であり、TOEICを受験した総学生数はもっと多く、応募対象の7月のTOEIC IP (1・2年次生対象) 受験者は398名で、550点以上の取得は71名であった。</p> <p>Q3 動機付けについてはどのような効果があがったのか？</p> <p>A3 本プログラムに参加した学生のうち、これまで12名の学生が国際センターが主催する短期・中期の留学 (1か月～1年) に繋げていることから判断すると、本プログラムへの参加が更なる発展への契機となっていることがうかがわれる。</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<p>上位レベル (実際には中の上のレベルも含むが) の学生のみならず、本学では圧倒的に多数である中位以下のレベルの学生に対応し得るプログラムが必要である。これについては、GAP科目であるGE (グローバル・イングリッシュ) ならびにこれと補完関係にあるGAP講座 (課外学習) の活用が効果的と信じる。また、下位レベルの学生が多く履修する英語再履修クラスでは、平成25年度より、e-learningと対面授業を合体させたblended learningを導入し、学習者としての自律性を高める実験的試みを実施しているので、その成果を期待したい。</p>		
3. 今後改善すべき点		
<p>本プログラムに応募できるTOEICスコアの下限を平成25年度から550点から600点に変更し、更なる目標アップを目指す。スピーチコンテストでは、平成26年度からグローバル時代の要求に応えるため、単なる個人スピーチではなく、チームによるグループ・プレゼンテーションへと進化させる予定である。</p>		

《重点教育支援》 テーマb:教養教育を起点とする学士力の保証

<div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; width: 40px; height: 40px; display: flex; align-items: center; justify-content: center; margin: 0 auto;"> 9 </div>	取組番号	(主題) 実践的教養教育の構築 (副題) アカデミックスキルズを涵養する
	取組名称	共通教育センター
	取組責任者	共通教育センター長 田崎 茂 (理学部 物理科学科 教授)
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>本取組は、アカデミックスキルズ (AS) を育成し、その基礎の上に、卒業後に社会のリーダーとして活躍するために必要な実践的能力を涵養することを目標としており、①「ASゼミ」、②「Problem (or Project) Based Learning ゼミ」 (PBLゼミ)、③「教育サポーター制度」の3つの部分から構成されている。特に①について平成24年度の取組概要は以下のとおりである。</p> <p>(1) 「ASゼミⅠ」 (前期科目) の担当者は人文・理・工・経済学部 に所属する4名であり、登録者数は37人であった。目的は「読む、書く、話す」という、学部・学科を問わず共通に要求される基本的なアカデミックスキルズを育成することとし、形態は、受講者を4つのグループに分け、4人の教員が3回ずつのゼミを担当するとした。具体的には、第1回目に受講者全員に対するオリエンテーション、第2回目から第13回目までは上記の4人の教員によるグループ別の授業、第14、15回目は受講者全員による合同ゼミとした。合同ゼミでは、「原子力発電は必要か」というテーマを設定し、グループ間によるディベートを行なった。合同ゼミでは多彩な意見が出された。</p> <p>(2) 「ASゼミⅡ」 (後期科目) の目的は「思考と発想のレッスン」とし、担当者の所属学部および形態はASⅠと同じとした。ASゼミⅡの登録者数は37人であった。第14、15回目の合同ゼミでは「ハインツのディレンマ」をテーマとした。このディベートでは、ASゼミⅠでの議論より更に活発な議論がなされ、受講生の成長が見て取れた。また、受講生の一部は、その後、教育開発支援機構が実施する「大学から始める『言葉の力』育成プログラム」 (課外) のサポーターとして活躍している。</p>		



取組⑨: 成果報告ポスター

アカデミックスキルズとは

アカデミックスキルズとは、学生が大学で学問を学ぶ際に必要となる基本的な技法をさします。具体的には、「読む力」「聴く力」「書く力」「話す力」などです。これらの基本的な能力を基礎に、「論理的思考力」「コミュニケーション力」「発想力」へとつながります。

学生が、上記のアカデミックスキルズを身につけて、大学での教育に積極的・能動的に参加し、大学生生活を充実させるものになることを期待しています。

共通教育科目として開講されたアカデミックスキルズゼミは、総合大学である福岡大学の利点を生かした、学生、教員共に「文理融合型」の実践的な少人数教育であり、学生が異なる分野の考え方を学び、柔軟な思考力を涵養することを目指しています。

アカデミックスキルズゼミは、前期と後期にそれぞれアカデミックスキルズゼミⅠとⅡ(以下、ASゼミⅠとⅡと記す)を開講しています。受講生の多くは、ASゼミⅠとASゼミⅡの両方を受講します。ASゼミⅡの具体例として右の各教員のゼミの内容をご覧ください。

アカデミックスキルズゼミの形態は

アカデミックスキルズゼミは、人文科学分野(人文科学部)の教員、社会科学分野(経済学部)の教員、自然科学分野(理学部)の教員、科学技術分野(工学部)の教員の合計4名の教員が担当しています。第2週から第13週までは、受講者を4つのグループに分け、3週ごとに上記4名の教員のゼミを巡回するようになっています。具体的には、AからDまでの4グループが下のようなローテーションで教員のゼミを巡回します。ASゼミⅠもASゼミⅡも共にこの形態をとりま。

	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
第1週	人文科学分野	社会科学分野	科学技術分野	自然科学分野
第2～4週	合同ゼミ	合同ゼミ	合同ゼミ	合同ゼミ
第5～7週	自然科学分野	人文科学分野	社会科学分野	科学技術分野
第8～10週	科学技術分野	自然科学分野	人文科学分野	社会科学分野
第11～13週	社会科学分野	科学技術分野	自然科学分野	人文科学分野
第14週	合同ゼミ	合同ゼミ	合同ゼミ	合同ゼミ
第15週	合同ゼミ	合同ゼミ	合同ゼミ	合同ゼミ

集大成は合同ゼミ

アカデミックスキルズゼミの最後に「合同ゼミ」を企画しています。合同ゼミでは、上記4つのグループによるプレゼンテーションとディベートを行います。ASゼミⅠでは「原子力発電を存続すべきである」というテーマと、ASゼミⅡでは「ハイソックのデザイン」をテーマとしました。このディベートでは、ASゼミⅡにおいて、ASゼミⅠにおける議論より更に活発な議論がなされ、受講生の成長が見られました。この取り組みの中で、学生は資料を集め、議論を交わしながら論点を整理・構築し主張を展開します。その過程の中で学生は、「資料を読む力」、仲間の意見を「聞く力」「コミュニケーション力」、発表の原稿を「書く力」などを試されることになります。また、質疑応答の中では、発表者の意見を聞き不明な点、論拠の不備な点などについて「聴く力」、質疑の際の「論理的思考力」「発想力」を発揮することが期待されます。合同ゼミはアカデミックスキルズの活用場になると考えています。

ASゼミⅡの各担当者のゼミの内容

文系(人文科学分野)

テーマ:「菓の分配問題—一錠しかない特効薬を誰に与えるべきか?」
目標:菓の分配問題を検討することを通じて、自分の価値観や見方を確認し、それは異なる価値観や見方の可能性に気づく。

- 第1回 一錠しかない特効薬を誰に与えるべきか? : 問題を正確につかみ、自分なりの回答を考える
- 第2回 一錠しかない特効薬を誰に与えるべきか? : 他人の回答を聞きながら、多面的に考える
- 第3回 一錠しかない特効薬を誰に与えるべきか? : 皆でよりよい解決策を探る

文系(社会科学分野)

テーマ:「大学教育はどれだけ年収を引き上げるか?」
目標:パソコン教室でICTを活用しながら、費用対効果の考え方を分析スキルを学ぶ

- 第1回 大学教育の費用と経済効果を示すデータをインターネットも活用しながら収集する
- 第2回 教育費用と将来の年収引き上げ効果から大学教育の収益率を計算する
- 第3回 得られた収益率の計算結果は何を意味するかを考え、どのように活用できるかを議論する

理系(自然科学分野)

テーマ:「エネルギー問題を考える」
目標:エネルギー問題をテーマに、資料の読み方、情報の収集、問題の発見、解決策の策定に至るプロセスを通して、思考力と発想力を培う

- 第1回 いくつかの与えられた資料を読み、資料を読み解く力を磨く
- 第2回 自ら情報を収集し、問題の調査・整理を通して問題の発見を行う
- 第3回 話し合いの中から、問題解決のための新たなアイデアを探る

理系(科学技術分野)

テーマ:「個人商店の八百屋の生き残り戦略を企画立案してみよう」
目標:グループで意思決定をアイデアを詳細化していく際の仕様設計とエンジニア設計のスキル、Parallel Thinkingの手法を学ぶ

- 第1回 個人商店と大型チェーンスーパーとを比較して、できるだけ多くの特徴を見出し、個人商店の利点と欠点を分類整理しながら客観的に分析する
- 第2回 ステークホルダの考え方をマインドマップを使い、多くの人とWin-Winの関係を築き、個人商店の利点を伸ばしつつ欠点を緩和するアイデアを考える
- 第3回 エンジニア設計で用いられる図表の表現を活用し、戦略を実行していく工程とスタッフの役割を設計し、「成し遂げるために必要な事柄について学ぶ」

実施結果

＜授業アンケートの分析＞

この授業に対する感想:授業内容への関心は、「より知りたい」と「やや知りたい」という肯定意見がASゼミⅠでは49.5%であり、ASゼミⅡでは100.0%となっています。

自己申告による出席率:ASゼミⅠでは71.4%の学生が、ASゼミⅡでは66.7%が8割以上出席したと申告しています。この数字はゼミの科目としては改善を必要とする数字であると思われます。実際、ASゼミⅡにおいては、欠席者が目立ち、ゼミの進行に支障を来した事例が報告されています。

授業の理解度:「良(理解できた)」と「やや理解できた」を含めるとASゼミⅠでは94.3%、ASゼミⅡでは100%でした。

＜日本語力向上支援講座で学生サポーターとして活躍するASゼミ卒業生の声＞

文系女子学生:「アカデミックスキルズゼミを受ける前は、気が強いので意見が違ふ人とはぶつかることがあり、自分の伝えたいことしか言わず、そのまま相手も私もスッキリしないときがありました。しかしながらゼミで意見が違ふ人と相反するだけではなく、一緒に解決策を見出す協調性も学ぶことができ、一歩大人に前進することができたかなと思います。」

理系男子学生:「アカデミックスキルズゼミを受講して他人とのコミュニケーションの取り方、特に他人を納得させるためにはどういう話し方をすれば良いかということを持って体験でき、かなり鍛えられたと思います。また、レポートなどを書く上でも論理的に組み立て、まとめることもできるようになったのではないのでしょうか。」

＜平成25年度への改善点＞

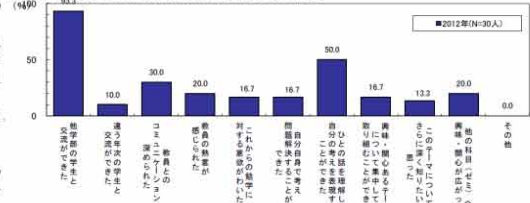
担当教員とグループの追加:教育開発支援機構の専任教員2名を加えて6名体制にし、学生を6グループに分けることにより、より多くの学生に対応できるようになりました。

また、ASゼミⅠでは、法学部の教員も加わり、分野の広がりも拡大しました。

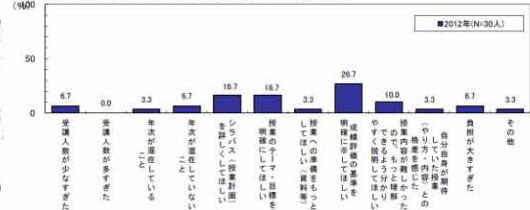
担当コマの追加:ゼミ形式の授業における学生の巡回を「4週×3名の教員」として、一人の教員が担当する週を3週から4週に増やしました。これにより、授業内容をより充実させることができました。

出席重視の周知徹底:無断欠席が減点の対象になることを学生に周知しました。この効果については、今後に分析して参ります。

5. このゼミを受講して良かったと思う項目(複数回答)【設問5】



6. このゼミを受講して改善してほしいと思う項目(複数回答)【設問6】



ASゼミⅡの授業アンケート結果の一部

《重点教育支援》 テーマb:教養教育を起点とする学士力の保証

取組番号	取組名称	(主題) 実践的教養教育の構築 (副題) アカデミックスキルを涵養する
⑨	取組主体	共通教育センター
	取組責任者	共通教育センター長 田崎 茂 (理学部 物理科学科 教授)
1. 取り組みに対する主な質問とその回答		
<p>Q1 : 「実践的」とはどういう意味か? A1 : 座学ではなく参加する学生がactiveに学ぶという意味</p> <p>Q2 : 受講者数の上限は何名か? A2 : 60名</p> <p>Q3 : 文系、理系共通の授業内容で行っているので、予備知識の有無で理解度に影響はないか? A3 : 予備知識が不要の課題を与えるように配慮している</p> <p>Q4 : 90分のうちディスカッションに割く時間はどれくらいか? A4 : 担当者によって異なるが、多くの時間をディスカッションに割りている</p> <p>Q5 : ディスカッションに時間を割くと「書く」ために時間がなくなるのでは? A5 : ASゼミⅡの主目標は「思考と発想のレッスン」を施すことにある</p> <p>Q6 : 教員の負担が大きいのでは? A6 : 負担が大きいのは事実であるが、教員として学ぶことが実に多く、教員にとってプラスの経験となっている</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
学部で行われている類似の試みについて貴重な情報がえられた		
3. 今後改善すべき点		
<ul style="list-style-type: none"> ・グループワークを通じて学んだアカデミックスキルズを1人で地道に学ぶ場面にもどのようにして結びつけて行くかが今後の改善点のひとつであると思われる ・担当教員を増やしコマ数を増やすことも今後の改善点のひとつである 		

取組⑩:取組概要

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) コラボレーション型キャリア教育の導入によるビジネスリーダーの養成 (副題)
10	取組主体	商学部、商学部第二部
	取組責任者	商学部 准教授 杉本 宏幸
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>コラボレーション型キャリア教育は、学内外諸機関との連携（コラボレーション）を通じて学部教育への関心・理解を促すこと、これを体験する学生達が学部で中心となって活躍すること、そして将来的にビジネスリーダーとして活躍することを目指す教育プログラムである。2012年度は大きく三つの要素で構成される。</p> <p>第一に、1年次生向けの外部企業連携型基礎ゼミナールである。商学部開講の商学・経営基礎ゼミナール4クラスが（株）宣伝会議等と連携した「キャッチコピー作成ゼミ」、商学基礎ゼミナール1クラスが天神ロフト・コクヨ等と連携した「天神ゼミ」を実施した。本プログラムには商学部3-4年次生もボランティアとして参加した。</p> <p>第二に、2年次生以上を対象とした商学部開講のインターンシップである。単にインターンシップを経験した学生に単位認定するのではなく、夏期のインターンシップ経験が学部の学びとどう関わっているかをインターンシップ成果報告会（後期期間）で議論する。2012年は商学部就活塾（後述）と連携し、4年次生が講義に参加する試みも実施した。</p> <p>第三に、就職活動中または就職活動前の3・4年次生を対象に、2名のキャリア・アドバイザーが中心に指導する商学部就活塾である。商学部就活塾は就職活動時期の学生達に対するクラスへの集団指導で、個別指導は商学部キャリア開発支援室（文系センター棟14階1411研究室）で行う。「就職活動を一緒に頑張る場所」を創るために推進した就活塾は、同学年同士の支え合い・学びあいに加え、就職活動を終えた上級生が下級生へ教える仕組みを組み込んだピア・サポート型教育プログラムとして現在構築中である。</p>		

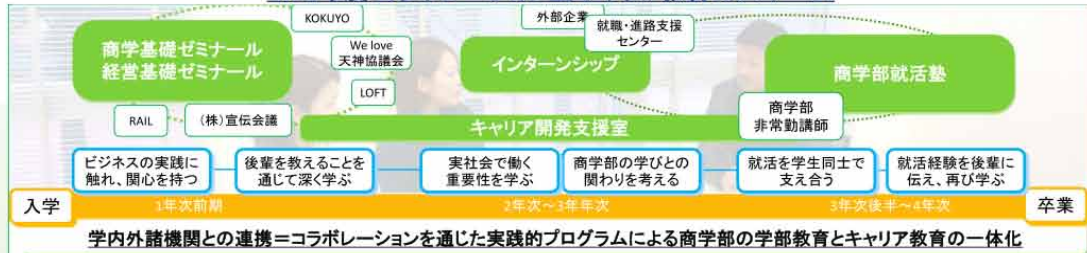




**コラボレーション型キャリア教育の導入による
ビジネスリーダーの育成**

商学部キャリア教育調整委員: 二宮麻里・太宰潮・篠原巨司馬・藤野真、商学部就職・進路支援センター委員: 杉本宏幸
 商学部非常勤講師: 高野一郎・山川由紀

2012年度 コラボレーション型キャリア教育のスキーム



<p>講義: 商学・経営基礎ゼミナール(1年次) 二宮麻里・太宰潮・篠原巨司馬・藤野真・杉本宏幸 +山川由紀</p> <p>本プログラムを享受した学生数: 109名 99名(1年次生)+9名(3年次生)+1名(4年次生)</p> 	<p>講義: インターンシップ(2-3年次) 高野一郎・二宮麻里・太宰潮・篠原巨司馬・藤野真・杉本宏幸</p> <p>本プログラムを享受した学生数: 24名 2名(2年次生)+18名(3-4年次生)</p> 	<p>商学部就活塾(3-4年次) 高野一郎・山川由紀</p> <p>本プログラムを享受した学生数: 247名 110名(4年次生)+127名(3年次生) (+延41名(上級生4年次生))</p> 
--	---	--

取り組みの概要

<p>1年次生対象の基礎ゼミナール(99名)で外部企業と連携したPBL(4クラスが(株)宣伝会議およびRAILと連携したPBL「キャッチコピー作成ゼミ」、1クラスがインキューブ天神店、天神ロフト、ココロ、We Love 天神協議会、デジタールハワード福岡校と協力のPBL「天神ゼミ」)を実施した。ビジネスの現場に触れることを通じ、商学部の学びにさらに興味を持ってもらい、社会との関わりの中で理解してもらうことを目指すものである。商学部3-4年次生がボランティアとして参加し、1年生の指導にあたった。</p>	<p>2年次以上で履修可能な講義インターンシップでは、前期中の事前研修、夏期インターンシップ(就職・進路支援センター経由)、後期のインターンシップ成果報告会を経て単位認定される。実社会で働く重要性を学ぶことはもちろんだが、単にインターンシップに行くだけでは得られるものが少ないことが懸念される。そこで2012年度より、4年次生の先輩から話を聞く機会を設け、さらに、インターンシップでの経験が学部での学びとどう関わっているかを考える成果報告会を実施する講義へ変更した。</p>	<p>就職活動中または就職活動前の3-4年次生を対象にした商学部就活塾(合計7クラス)を実施した。就活塾がクラス単位の集団指導であるのに対し、必要な個別指導は商学部キャリア開発支援室(文芸センター棟14階1411研究室)で指導している。苦しく嫌なものと思いがちな就職活動を、「みんなで一緒に頑張る」ものとして捉え直すことができる学生層の育成。その場所を商学部内に構築するための取り組みである。就職活動を終えた4年生には、下級生の指導にあたってもらう仕組みを本年度から導入した。</p>
---	---	--

取り組みの成果

<p>・避けられなかった入学後1年生の学習意欲低下だったが、本PBL経験の1年生達は、その低下には歯止めがかかった。(2012年4月、2012年7月のアンケート) ・1年次生の指導を通じて上級生連(ボランティア)が学ぶことができた。学部が目指す人材育成であるビジネスリーダーを本PBLからも育成できる可能性がある。 先輩を見て学び、後輩を指導しながら学ぶピア・サポートによるビジネスリーダー育成</p>	<p>・商学部就活塾と連携し、2012年6月13日(水)講義で商学部就活塾所属4年次生4名がインターンシップの意義を説明した。(4年生2名は半年後、商学部就活塾で後輩を指導した)＝商学部就活塾等のピア・サポートの素地・後期に実施したインターンシップ成果報告会(就職・進路支援センターの職員も部分的に参加してくれた)の実施により、学部での学びとインターンシップとの関わりを考える機会を持ってもらうことができた。 <small>※2012年度より「就職・インターンシップ」履修科目を「就職・キャリア開発」に変更し、これにより2013年度までの取り組みの必要である。</small></p>	<p>・「みんなで一緒に頑張る」組織(＝商学部就活塾)構築＝同級生同士の支え合いというピア・サポートの側面・後輩の意見となって、就職活動の経験を下級生へ指導し、卒業前まで「教える」ことを通じて学ぶ ＝先輩が後輩を指導するピア・サポートの側面 単なる就活サポートに陥るのではなく、支え合い、学びあい、教え合う教育プログラムとしての商学部就活塾</p>
---	--	--

取り組み上の問題点 (学生の主体性を育む上で工夫した点)

<p>・商学部では、基礎ゼミナールの履修クラスが学籍番号順に機械的に割り振られるという構造的な特徴がある。マーケティングや経営戦略へそもそも関心が高い学生が受講した場合、意欲を引き出すことが困難である。 ・上級生が単なる講義アシスタントとなってしまうと十分学べないため、講義・PBL構築段階からの役割検討が重要。 ・社会と関わることにする意識の低さ、マナーの欠如。</p>	<p>・インターンシップの時期が学生によってやや異なるため、インターンシップ成果報告会の時期が決定しにくい。 ・やや厳しいプログラムであるため、「インターンシップに行きさえすれば単位認定されると誤解していると思われる学生層は、講義途中で放棄してしまう。(3名放棄) ・学部独自にインターンシップ先を開拓するか否かが議論となるが、講義担当者の交代等、組織的対応が難しい。</p>	<p>・単に「就活の(技術的な)世話をしてほしい」学生が商学部就活塾を希望することを防げず、学部の核となる人材育成の狙いが上手くいかなかった。(16名の脱落者) ・先輩による指導は効果的だったにも関わらず、3年次生を指導してほしい時期、ほとんどの4年次生は卒業論文に追われる。学部教育の構造的な特徴によるピア・サポート推進の難しさが、対策を検討中。</p>
--	--	--

他学部・他組織での適用可能性

<p>・現状では困難である。本PBLはまだ着手しただけで、個別教員による多大な努力によって成立している。ビジネス系学部であるからこそ可能な側面も無い。他学部・組織で実行するノウハウ蓄積・検討には、コラボレーション型キャリア教育の数年の継続が必要である。</p>	<p>・成果報告会は、どの学部・組織でも実施可能である。 ・2012年度以後の商学部の場合、講義・インターンシップは、学部教育とキャリア教育を接合させる試験的な講義の一つとなっている。同様のやり方は、ビジネス系の学部であれば、どこでも可能であると考えられる。</p>	<p>・意欲的な学生達をさらに鍛え、これら学生達が学部の核になること、これら学生達の他への影響を狙っている。 ・行動が遅い学生にアプローチしたい場合には適さない。 ・就職活動を指導する専門スタッフ数名、これへの協力体制があれば、どの学部・組織でも実施可能。※要予算</p>
--	---	--

取組⑩:リフレクション(1)

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

10	取組名称	(主題) コラボレーション型キャリア教育の導入によるビジネスリーダーの養成 (副題)
	取組主体	商学部、商学部第二部
	取組責任者	商学部 准教授 杉本 宏幸

1. 取り組みに対する主な質問とその回答

<p>【取り組みの形式的な部分に関する質問】</p> <p>[コラボレーション型キャリア教育全般] (質問1) コラボレーション型キャリア教育を構成する科目やプログラム (PBL (Problem Based Learning) の基礎ゼミナール、インターンシップ、商学部就活塾) は現在の形になって何年目なのか。 (回答1) 2013年7月時点で、PBL型の基礎ゼミナールは4年目、インターンシップは2年目 (ただし、講義としてのインターンシップは過去から存在する)、就活塾は2年目である。</p> <p>[PBL型基礎ゼミナール] (質問2) PBL型の基礎ゼミナールは何回実施しているのか? (回答2) 15回である。ただし、PBLによっては必要に応じて課外での活動も実施する必要がある。</p> <p>[インターンシップ] (質問3) 学生達はいつインターンシップへ行っているのか。また、インターンシップ先の独自開拓を学部では (組織的に) 行っているのか? (回答3) 夏季休暇中に実施している。また、現時点では学部での開拓など、組織的な開拓は行っていない。本取り組みは、学内の役職との関わりで担当者の任期 (2年間単位) が決まってしまうため、当該期間内に組織的対応を行うこと、その体制を構築することが極めて難しい。ただ、個別教員の研究活動や本取り組みの推進過程で、各教員は独自に企業との関係を構築している。このコラボレーションが、1年基礎ゼミナールでのPBL実施につながっている。</p>
<p>【取り組みの実施内容に関する質問】</p> <p>[コラボレーション型キャリア教育全般] (質問4) ビジネスとの関連があまり無い学部では、商学部・商学部第二部が推進するコラボレーション型キャリア教育を推進することはできないのではないかと考えている。この取り組みでは、商学部・商学部第二部の学部教育とキャリア教育の境界が曖昧になることを目指している。 コラボレーション型キャリア教育は、こうした方針に基づき、学内外諸機関との連携 (コラボレーション) を通じて推進される正課内外の教育プログラムである。これを他組織で活用する場合、例えば学部であれば、各学部の専門に適したコラボレーションを検討いただいた上で推進なさるべきと考える。無論、このスキームをそのまま使える部分もあるはずである。ただ、コラボレーションの具体的なあり方は各学部やそれぞれの専門によって変わってくるはずであるし、変えるべき部分が存在するはずである。その点は、各組織で是非ご検討をお願いしたい。</p> <p>[インターンシップ] [商学部就活塾] (質問5) インターンシップ (や現場での実習) が当たり前になると (半ば義務化されると)、それ自体が目的化してしまい、逆に職業意識が養えないこと、(学びやキャリア形成に対する?) モチベーションが低下することなどが懸念される。学生達が働くことの意味を持つこと、色々な選択肢を持つような視野を広げること、自身の可能性に (主体的に) 気づいてもらえることが学部教育に必要ではないか。 (回答5) その通りであると考えます。 商学部では講義「インターンシップ」の履修を義務化しておらず、学部での学びとの関わりを持ってもらうことを重視している。商学部就活塾にも全員に入ってもらっているわけではなく、これは希望者に対する指導である。現4年次生の就活塾は後輩に教えることを前提にした希望者を募っている。</p> <p>[商学部就活塾] [PBL型基礎ゼミナール] (質問6) 先輩が後輩に教えながら学ぶとはいえ、先輩が後輩に教える際、伝わっていないことがあるのではないかと。どんなことが伝わっていないか? (回答6) インターンシップや就職活動などで、まだ当事者になっていない学生達に対して、上級生たちが経験を伝えようとしても (経験していないからこそ) 伝わりにくいことがあった。 また、例えば、4年次の卒業論文執筆に追われていたりする等、本取り組みを経験した学生達全員が先輩として指導にあたるわけではない。本来必要な教えることを通じて学ぶ側面が限定的になって</p>

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

いることは否めない。後輩に指導することを前提にしたプログラムを構築・維持するため、例えば、商学部就活塾ではモチベーションに関して中～高レベルの学生を優先的に採用しようとしている。就職活動支援という側面を強く打ち出しすぎると、どうしてもモチベーションが低い層（手とり足とり就職活動支援をしてほしい層）が商学部就活塾を希望することが否めない。このため、中堅から上位学生を集中的に指導し、それら学生群（ビジネスリーダー層）が他へ及ぼす影響を狙っている。ただし、どれくらいの（先輩）学生が自主的に（主体的に）後輩を指導しようとしてくれるかは今後の課題である。

〔商学部就活塾〕〔PBL型基礎ゼミナール〕

（質問7）社会とのかかわりでPBLを実施することは重要であり、既に我々の学部でも実施しているが、企業との連携や共同プロジェクトでは、どうしても先方（企業）にとつてのメリットが重視されてしまう。これが、学部で学ぶことと一致しにくいこともある。企業実務の知識を身に付けることや企業側のメリットが優先されてしまう。大学の価値はどのようなものと考えていけば良いのだろうか？

（回答7）企業とのPBLを推進すると企業のニーズを重視する必要がある。これが、学部教育やゼミナール等での専門教育と必ず合致するとは言にくいかもしれない。そのときの大学の在り方をここで議論することは難しいと思うが、例えば、学部における教育の在り方、教えるべき専門科目の中身との関わりになってくるのではないだろうか。

2. 質疑応答を通じて得られた知見

コラボレーション型キャリア教育では、ピア・サポートの仕組みを取り入れており、上級生は自身が経験したことを、後輩達へ教えることを通じて学ぶこと、同級生同士での学びあい・支えあいを重視している。しかし、経験したことを教えるも、教えられること・伝えられることは部分的であったことが質疑応答を通じてわかった。（この質疑応答には、本取り組みの受益者である学生2名に実際に来て対応してもらった。）

また、あまりにも職業教育に特化しすぎると、逆にモチベーションが低下してしまうことが示唆された。ただ、この場合、何に対するモチベーションであるのか峻別が必要であるように思われる。

本取り組みでは、商学部・商学部第二部の学部教育を推進した結果、キャリア教育が実現されると認識している。しかし、キャリア教育を学部の専門性の延長線上に位置づける限り、各学部の学部教育で何を教えるべきであるか再確認されるべきであるように思われる。

3. 今後改善すべき点

コラボレーション型キャリア教育は、学部におけるゼミナールでの教育を支援する性格を現在有している。

しかし、現状として、基礎ゼミナールのPBLは流通・マーケティング分野や経営分野に偏っており、今後、これを学部内の他分野にどれだけ広げられるかが検討課題となる。これは本取り組みに関わるスタッフが流通・マーケティング、経営、管理会計の分野の教員であるため、これが継続される限り、他分野へ拡大することは極めて困難である。

基礎ゼミナールで実施するPBLは、受講する1年生だけが対象になるわけではなく、3年生などの上級生も参加していて、上級生が教えることを通じた学び等に寄与している。上級生が教えることを通じた学びの仕組み（ピア・サポート）は本取り組みの大きな特徴である。ただし、上記「1」質問6でも述べたように、どれくらいの（先輩）学生が自主的に（主体的に）後輩を指導しようとしてくれるか、どれくらいの学生が学部で目指すビジネスリーダーの人材となりうるかは今後の検討課題である。

先輩が後輩に教え、同級生同士で学び支えあうピア・サポートの仕組みについても形式知の側面、暗黙知の側面があるように思われる。先輩が後輩に教えたことによって、後輩はどのような学びがあったのか、先輩自身は何を学べたのか、これら効果はかなり識別しにくい。同級生同士で支える仕組みも同様である。可能であれば、こうした点を再検討することも考慮したい。

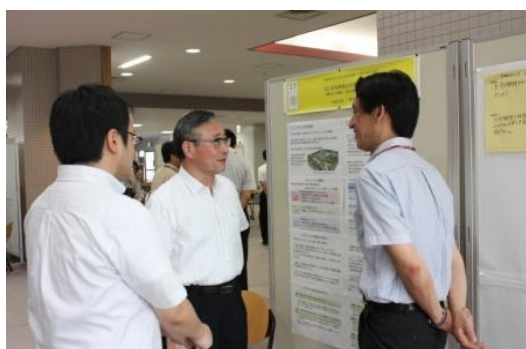
PBLの取り組みと商学部就活塾の取り組みをどのように明確に連携（コラボレーション）するかが、本年度以後では課題となる。場合によっては、学部における専門教育の内容を再確認する必要があるかもしれない。

※本取り組みで報告しております講義「インターンシップ」は、平成25年度は「福岡大学 魅力ある学士課程教育支援」の補助なしで運営可能な体制に切り替えております。これは、平成24年度までの補助の成果であります。

取組⑪: 取組概要

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) 仁川大学校との交流セミナー (副題) 異文化と対峙し、自己と他者を見つめ直す
11	取組主体	商学部、商学部第二部
	取組責任者	商学部 准教授 松永 達
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>本プログラムでは、仁川大学校との交流を通じて、韓国についての総合的な理解を深め、異文化コミュニケーション能力を高めることを目的として、以下のような取り組みを行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 韓国の経済・経営・社会・文化・言語について、学外の専門家や学内の教員から幅広く学び、さらに学生が自ら文献や資料を整理して報告することで、韓国に関する総合的な知識と理解を深めた。 2. 日韓の経済や経営の類似点と相違点を理解し説明できるようになること、それとともに日本と韓国それぞれの経済や経営の強みと課題についての理解も深めること、さらに日本に対する他者の視点に接してそれを検討することによって、自己の思考を鍛えることを目的として、日本と比較しながら韓国の特徴を学び、そして自ら情報を整理し、さらに現地でフィールドワークを行い、帰国後にレポートを提出した。 3. 初歩の韓国語の学習、および英語を利用した異文化コミュニケーションの実践的な練習を行った後、韓国を訪問して、仁川大学校の学生と韓国語・日本語・英語を使って交流を深めることにより、異文化間でのコミュニケーション能力を高めた。 4. ゼミナール形式での事前・事後学習にてグループでの調査や発表を重ねる中で、学生のプレゼンテーション能力や討論の能力が向上した。また、仁川大学校の学生との交流の際は、積極的な韓国の学生の姿勢が刺激となり、学生のチームワークやリーダーシップが高まった。 		



仁川(インチョン)大学の概要

所在地: 韓国・仁川広域市(人口270万人;ソウルの西隣)

法・経・商・人文・理・工・スポーツ科学・教育に相当する学部を擁する総合大学(韓国の国立大学法人)

本学との協定校(2010年5月交流協定締結)

日本文学や日本語教育の学科もあり、日本に強い関心を持つ学生も少なくない



2008年に完成した広大な新キャンパス

スケジュールの概要

商学部・商学部第二部の専門教育科目

「海外交流ゼミナール(4単位)」として開講

4/11~ 7/18 8/3	<ul style="list-style-type: none"> 事前学習 [前期週1コマ+4コマ(8/3)] 韓国の経済・社会と韓国語入門の講義 演習形式による討論と発表 演習形式による異文化コミュニケーションの授業
8/13~ 8/17	<ul style="list-style-type: none"> 仁川大学校訪問 [7コマ] 講義、仁川大の学生との交流、フィールドワーク
8/22	<ul style="list-style-type: none"> 事後学習 [4コマ(8/22)] 事前学習および現地研修の成果をもとにして、グループごとに定めたテーマについて発表および討論

プログラムの目標達成の検証(1)

①異文化コミュニケーション能力に関する検証

- 初回の授業で、英語で簡単なスピーチを一人ずつ行う
- それに対して、他の学生がピアレビューを行う。評価項目と基準は事前に定めておく。
- また、各人も自己評価を行う。事前に評価シートを作成して記入させる。

→他者による評価と自己評価により、自己の能力や課題を客観的に評価できるようにした。

→そして、4ヶ月後の英語での異文化コミュニケーションの授業で、各人の能力の変化や今後の課題をあらためて検証させた。

プログラムの目標と達成状況(1)

<p>目標1 韓国に関する総合的な知識と理解を深める</p> <ul style="list-style-type: none"> これまでの関心によって得た知見、事前学習で講読した文献や資料による知見と、実際に訪問して得た見聞や経験による知見が、総合的に叙述されたレポートが多く見られた。
<p>目標2 日韓の経済や経営を比較して、互いの特徴についての理解を深める</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本と韓国の経済や経営を比較して、類似点と相違点について理解することができた。 同時に日本と韓国それぞれの経済や経営の強みとその課題についての理解も深めることができた。

仁川大学校との交流の優れた点

- 仁川大学校 (University of Incheon)
 - 受け入れ体制充実 広大なキャンパス内の宿泊施設を利用可能
- 仁川 (Incheon) 地域の特徴
 - 巨大な国際空港と港湾を擁し、北東アジアの旅客や物流のハブとして目覚ましく発展 ~北東アジアの急激な構造変化を象徴する地域
 - 周辺には、国際競争力の高い大企業の工場も数多く立地
- 商学部の専門科目に関連の深いフィールドスタディーの場が豊富
- 福岡との交通が至便
 - 福岡を午前中に出発すると、昼から活動可能
 - 最終日も午前中は活動可能



仁川大学校訪問およびその前後のスケジュールの詳細

8月3日	事前学習(1コマ) 渡航前のガイダンス
8月13日	午前 福岡出発 昼前に仁川大に到着 歓迎会・キャンパスツアー・学生同士の交流活動
8月14日	午前 仁川大学校での講義 午後 フィールドスタディ(1) 臨空新都市見学
8月15日	フィールドスタディ(2) ソウルの国立博物館、景福宮の周辺を見学
8月16日	フィールドスタディ(3) 現代自動車・現代製鉄所の工場を見学
8月17日	午前 終了式 午後 仁川出発 福岡到着
8月22日	事後学習(4コマ) グループごとの討論・発表

プログラムの目標達成の検証(2)

②韓国の経済・経営・社会についての理解、およびそれと比較対照して得られる日本の特徴についての理解に関する検証

- グループごとの報告の際のレジュメやプレゼンテーションの内容により、各時点での理解度を検証
- 訪問日誌を小冊子にして作成し、学生に配布。訪問中に毎日、研修内容やその感想を記入させる
- 事後学習終了後に「日韓比較」レポート(4000字以上)を提出

→これらの提出物と、プログラム開始前に提出させた韓国理解に関する小論とを相互に比較

→さらに、プログラム終了時に達成目標に関するアンケートを実施

プログラムの目標と達成状況(2)

<p>目標3 異文化間でのコミュニケーション能力を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> 現地の学生は初日から最終日まで、毎日朝から夜まで10名以上が福大生と行動をともにし、韓国語・日本語を交えて深い交流が実現した。 帰国後も種々のSNSなどを利用して、連絡を交わっている学生も少なくない。
<p>目標4 プレゼンテーション能力や討論の能力を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> 韓国語ができる学生は、現地での歓迎会や修了式にて韓国語で挨拶した。 事前学習の演習には、ゲストとして学内の韓国人留学生の参加を得た。積極的に自分の見解を述べる留学生の姿勢が学生への刺激となって、各グループの意見交換が活発になり、理解が深まる効果を得られた。
<p>目標5 異文化理解と海外での交流を通じて他者と向き合った経験を生かして、学生が自分自身を見つめ直し、新たな課題を設定する</p> <p>-仁川大の学生の積極性が強い刺激になり、「今後の学生生活を見直すきっかけとなった」、「自分の努力しなければならない部分が見えてきた」、「異文化との交流は自分のそれまでの世界観を変えようという感覚が得られた」 -プログラム終了後、次年度からの海外長期留学を決意し、その準備を始める学生も現れた。</p>

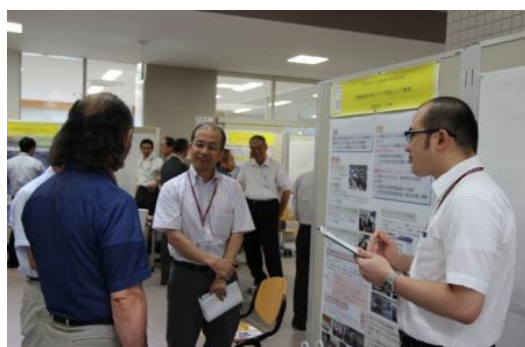
取組⑪:リフレクション

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) 仁川大学校との交流セミナー (副題) 異文化と対峙し、自己と他者を見つめ直す
⑪	取組主体	商学部、商学部第二部
	取組責任者	商学部 准教授 松永 達
1. 取り組みに対する主な質問とその回答		
<p>(1) 交流の継続性は？ →人的関係に依存しているので、仁川大学校の国際交流担当者が変わった場合、仁川大学の対応に変化がある。</p> <p>(2) 支援期間終了後の取り組みの定着や継続性はどうか？ →今年度の授業終了後に検討するが、学部で可能な予算の範囲で実現できるプログラムを考える必要がある。</p> <p>(3) 応募者の人数は？男女比は？取り組みの成果は？ →応募者は定員20名に対し、40名程度である。男女比は、応募者・合格者ともに3/4が女子学生で占められている。この交流セミナーの参加者からは、留学やワーキングホリデーなどでさらに海外での経験を積んでいる学生も現れている。</p> <p>(4) なぜ韓国を選択したか？ →日本と韓国の経済と経営を比較することによって、商学部の様々な専門科目にかかわる知見を高めることができるため。また、韓国に興味がある学生が少なくないため。</p> <p>(5) 仁川大学校の学生のレベルは？ →レベルは非常に高い。総じて英語の運用能力がかなり高く、日本語の能力が高い学生も少なくない。</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<p>(1) 一旦立ち上げたプログラムの今後の継続性をいかに担保するかということの重要性。</p>		
3. 今後改善すべき点		
<p>(1) 福大生の語学運用能力（英語、およびこのプログラムの場合は韓国語）を事前に高める必要がある。</p> <p>(2) プログラムの継続性が明確であれば、早い段階から学生にプログラムの存在を周知させて、早期から海外交流の準備を指導することができる。</p>		

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) 情報技術を用いたアジア対応エンジニア教育 (副題)
⑫	取組主体	工学部
	取組責任者	工学部 電気工学科 准教授 小浜 輝彦
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>本取組の目的は、福岡大学の優れたICT（情報コミュニケーション技術）インフラを利用し、低コストで、アジア人として国際的に活躍できるエンジニアの育成システムを確立することにある。学生と教員が海外の学生・教員とフェイス トゥフェイスの国際交流（相互訪問も含む）を行い、優秀な学生をより成長させるため平成24年度は以下の試みを行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 工学部教員によるTOEIC勉強会を開催しTOEICの平均点を改善。 2) ソーシャルネットワークFacebookに交流サイトを開設し、学生及び社会人、海外の人との交流を実施。 3) インターネットテレビ会議システム（福岡大学現有設備）を用いて、海外部門間協定校の学生及び教員と交流会を複数回実施。 4) 海外訪問団の受入。 5) パワーポイントを用いた英語によるプレゼンテーションコンテストを工学部で独自開催。優秀者には海外現地調査に参加できる特典を付与することで参加者のモチベーションを向上。 6) 部門間協定校、インドネシア・イスラーム大学ジャカルタ校に学生7名、教員3名の10名を9日間派遣。施設見学、文化交流、両校混成チームによるサマースクール等を実施。 <p>上記取組により、学習意欲・向上心の高い工学部学生が学科、学年、国、文化等の垣根を越えて交流したことで、アジアに目を向けた国際感覚を有するエンジニア育成が行われた。</p>		



取組⑫: 成果報告ポスター

目標

国際的な感覚・能力を有するエンジニアの育成
 ○発展著しいアジア地域に対応できる教育
 (アジア人としての国際的エンジニア教育)

年間行事

1) ガイダンス

4月21日(土)、学部生に対し
 1年間の計画を紹介



2) 講習会

Facebook講習会を1回実施。
 工学部教員によるTOEIC勉強会(e-learning, Reallyenglish
 (リアル・イングリッシュ・ブロードバンド社)を4月23日～
 7月13日まで22回実施

3) インターネットテレビ会議

部門間協定校であるインドネシア国立イ
 スラーム大学ジャカルタ校と1～2ヶ月間隔で
 テレビ会議を実施



5) 海外からの訪問団受け入れ

8月22日～30日の間、イスラーム大学11名(学
 生6名、教員5名)の訪問団を受け入れた。今後
 の交流の進め方、大学院進学の可能性等につ
 いて議論



6) 国際交流プレゼンテーションコンテスト

8月25日(土)に国際交流プレゼンテーションコンテストを実施。
 工学部から10件、イスラーム大学から2件の発表があり、審査の
 結果、最優秀賞、優秀賞、奨励賞、審査員特別賞が授与された。
 受賞者の学部生から7名を海外現地調査メンバーに決定。

4) フェイスブック交流会

4月にFacebookサイトにて「国際コミュニケーショ
 ン研究会」ファン交流サイトを設置し、福大生のみ
 ならず海外の学生、社会人との交流を実施



5ヶ月間



少人数に絞った
 1) 英会話トレーニング
 2) 3月の現地調査・研修に向けての準備
 3) メーリングリストによる情報交換
 ※これらの活動を通して、学科・学年間の垣根
 を越え、メンバーの連帯感が強まる。

7) 海外現地調査・研修

平成25年3月7日～15日の日程で
 イスラーム大学ジャカルタ校を訪問。現地では、施
 設見学、現地調査の他、プレゼンテーション、文化
 交流、サマースクールを実施。



手法

ICT(情報コミュニケーション技術)インフラを積極活用
 (低コスト)

→ Facebook、ビデオ会議システム(Polycom)

海外校訪問団の受入

→ 部門間協定校の訪問受入
 (アジアの協定校受入を通じた国際交流)

国際交流プレゼンテーションコンテスト

→ 英語によるプレゼン、海外学生との交流

海外研修

→ 学部生7名の部門間協定校への派遣
 (アジアの協定校派遣を通じた異文化体験、理解)



成果

1. 低コストで年間交流を実施
2. パワーポイント用いたプレゼンテーション能力の向上
3. 英語によるプレゼンテーションを通して、英語表現を磨く
4. コンテスト受賞特典に海外研修を付与することで、コンテスト参加者の拡大、向上心の強い学生の選抜
5. TOEIC平均点UP(416点(25名)→467点(6名))
6. 選抜された学生間のコミュニケーションを密にすることで学科・学年の垣根を越えた交流が促進(自発的集まりや勉強会)
7. 友人を通じた周りの学生への波及効果(海外プログラム参加希望者の増加)
8. プログラム終了後、学生の自発的勉強会、交流の実施、継続

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) 情報技術を用いたアジア対応エンジニア教育 (副題)
12	取組主体	工学部
	取組責任者	工学部 電気工学科 准教授 小浜 輝彦
1. 取り組みに対する主な質問とその回答		
<p>Q: フェイスブックの参加は誰でもできるのか? もっと宣伝すべきでは?</p> <p>A: 交流ページはフェイスブックに登録している人なら誰でも参加できるオープンな場。フェイスブックの利点を活かして今後はもっと積極的に情宣し活用したい。</p> <p>Q: テレビ会議の参加人数は?</p> <p>A: 日本側学生は5~6名。英語の壁とスケジュールが突然決まって情宣不足になったこともあり少なかった。学生同士の対話や教員同士の発表会が行われた。インドネシア側は大講義室に設備があり大勢の学生が参加した。</p> <p>Q: 英語の勉強など途中で脱落する学生はいたか?</p> <p>A: 英語の勉強会は当初30名程度いたが、単位化されていないこともあり次第に尻すぼみとなっていった。モチベーションをいかに維持させるかが課題である。</p> <p>Q: 学生のモチベーションを上げる対策は?</p> <p>A: 任意プログラムのため全体の底上げは難しい。そこで意欲ある少人数の学生を集中的にトレーニングすることで彼らの能力を高めた。周りの学生は彼らから刺激を受け、波及効果があった。</p> <p>Q: 海外研修先のインドネシアはどうだったか?</p> <p>A: 雨期は過ぎていたがとても蒸し暑かった。水道水が飲めないなど、健康維持に最も気を遣った。現地の人々は熱烈歓迎、アジア人らしいもてなしを受けた。インドネシア人は日本に非常に良い印象を持っている。</p> <p>Q: なぜインドネシアか?</p> <p>A: 2年前に工学部と部門間協定を結んだ大学を派遣先としたため。</p> <p>Q: インドネシアの学生との言語は?</p> <p>A: 英語。お互い母語ではないのでブローケンでも問題にならない点が良い。英語の勉強は、e-learningを使った勉強会と市販の教材(瞬間英作文トレーニング等)を使ってこまめに実施。とにかく声に出す機会を増やした。</p> <p>Q: 学生の旅費負担は?</p> <p>A: プログラムの性質上2割負担であったが、先方の大学が現地費用のほとんどを負担したため2万円程度に収まった。</p> <p>Q: 今後も継続するのか?</p> <p>A: H25年度も継続する。8月にはインドネシア訪問団が来日予定。</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<p>グローバル教育を模索・試行している人にとって本プログラムは非常に関心が高かった。ただし、単位化されていない任意プログラムであるため、参加学生の裾野の拡大やモチベーション維持に苦労したことも事実である。フェイスブック交流会の情宣等に工夫を凝らすなど学生と教員の参加者数拡大が求められる。将来的には何らかの単位化が望ましいと考えられる。</p>		
3. 今後改善すべき点		
<p>(1) 参加学生数の拡大: 任意参加であること、英語の苦手意識から学生参加数が伸び悩む。参加者を増やす工夫が必要(取組の単位化など)。</p> <p>(2) 国際プレゼンテーションコンテストの質向上: 英語による発表のみで質疑応答は実施せず。将来は、質疑応答に耐える語学力の向上を目指す。</p> <p>(3) フェイスブックのさらなる有効活用、交流会の情宣。</p> <p>(4) インターネットテレビ会議、海外現地調査・研修先の拡大と交流の充実。</p>		

取組⑬: 取組概要

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

13	取組名称	(主題) SGDと早期体験学習の連携による初年次教育の充実 (副題) 学生指導と専門能力啓発の実践
	取組主体	薬学部
	取組責任者	薬学部 教授 金城 順英
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>本プログラムでは、SGD (スモール・グループ・ディスカッション) と「早期体験学習」を連携させ、薬学部の理念・目標にかなう薬剤師育成を目的に、以下のような初年次教育の取組を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①入学と同時に、少人数のグループによる討論と発表会等を行うSGDを結成し、「他己紹介」や「コンセンサスゲーム」などを行い、意見交換 (コミュニケーション) ができる態勢作りを行った。 ②薬学出身者が活躍する現場を見学・体験させることによって、6年間の学習の動機付けを行なう目的で、夏休み中に1年次生全員が、病院、薬局、企業の3カ所を見学した。 ③見学の実施に前後して、「服装について」、「何を学んでくるか」、「何を学んできたか」などのSGDを行い、見学各所で得た体験の共有化を各SGDグループ内で行うとともにレポートを提出させた。 ④学生が提出したレポートは冊子化し、見学先に配布した。同時に見学先からはアンケートを回収した。最終のSGDで「早期体験学習の良かった点および改善点」を討論して改善点を抽出し、次年度へのフィードバックとした。 ⑤SGDを前期と後期にわたり、ほぼ毎週開催したことで、薬剤師の使命、薬学・医療を取り巻く諸問題などについて深く考察・議論をさせると同時に、コミュニケーションスキル、プレゼンテーション能力を向上させることができた。 ⑥「早期体験学習」では、医療現場で活躍する薬剤師を見学し、薬剤師として必要な基本的姿勢を身につけることや医療における薬学の役割、使命について体得させるとともに、患者様や社会のために奉仕している薬剤師を実感させ、医療人として共感的態度や信頼関係の重要性を認識させた。 		



1. 目的

薬学部の理念・目標【基礎知識と技能に“人間力”を調合し、崇高な使命感を備えた薬剤師を目指す】にかなう**薬剤師育成**を目的に、SGD(スモール・グループ・ディスカッション)と「**早期体験学習**」を**連携させた教育**を行う。

2. SGDとは

- SGD(Small Group Discussion: 少人数グループ討論)とは、PBL(Problem-based Learning: 問題解決型学習)チュートリアルの一つ。
- 従来の講義型教育が教師のTeaching主体であるのに対し、学習者が**Learning**することが大きな特徴。
- 教員はチュートラーとして積極的に関与しない学習者参加型学習方法。
- 考え方の異なるグループ員同士が、討論という形を経て、**グループ内の合意を形成する過程**が重要となる。
- SGDを有効に進める方法として**KJ法**がある。

3. KJ法とは

- 1) グループ員各自が文庫カードの一枚上面に「設定されたテーマに関する**思い付いたこと**」を記入する。
- 2) 2日目、3日目が本人のカードを隣に回す。
- 3) 目付てきたカードの2日目に、「思い付いたこと」を記入する。この際、**1日目の意見に参考にしてもしなくても良い**。
- 4) 3日目が本人のカードを隣に回す。
- 5) 目付てきたカードの3日目に、「思い付いたこと」を記入する。この際、1、2日目の意見を参考にしても、しなくても良い。
- 6) 1～5を繰り返す。意見が出尽くしたら終了。
- 7) 書き終わったカードを切り離す。

4. 早期体験学習(概要)

平成24年度早期体験学習
入学者数 232名

4月 23日(水) 4時～5時 5月 10日(水) 12時～13時 5月 24日(水) 18時～19時 6月 7日(水) 18時～19時 6月 21日(水) 18時～19時	見学・総合実習(1)～(6)期 ・アパレルデザイン科 ・仏教 ・仏教 ・仏教 ・くすり調剤 ・くすり調剤 ・くすり調剤
--	--

5. 早期体験学習とSGDの融合

日程	SGD場(主なもの)	場所
4月	SGD(物産展)、「コンパニオンスクール」	
4月～7月	SGD(産科について)	
4月～7月	SGD(自由テーマ)	教員(本島健樹)が中心
4月～7月	SGD(薬学生のための早期体験学習ガイド) 100名発表	
4月～7月	SGD(早期体験学習における課題について) 100名発表	
4月～7月	SGD(薬師・病院・企業で何を学んでるか) 見学先への質問をまとめる	
7月	薬師・病院・企業で何を学んでるか	
8月	薬師見学	
8月	病院見学	
8月	企業・医療従事者の講話	
8月	企業・医療従事者の講話	
8月	レポート提出	
9月～10月	SGD(薬師・病院・企業で何を学んでるか) 見学先からの質問をまとめる	
10月	SGD(早期体験学習の軌跡) 産科より改定 先生へのフィードバック(学生発表)	
11月	レポート集の作成と発表への配布、アンケートへのフィードバックカードの回収	

赤字: SGD関連, 青字: 早期体験学習関連

- 8) 「島」を作る。既成概念にとらわれず自由に、行っている「思い付いたこと」を**思い付いたこと**の人名を載せる。
- 9) 「島」を作る。既成概念にとらわれず自由に、行っている「思い付いたこと」の人名を載せる。
- 10) 既成概念にとらわれず自由に、行っている「思い付いたこと」の人名を載せる。
- 11) 「島」と「島」を繋ぎ合わせる。ツリー型またはアインシュタイン型に合わせる。



6. 学生側

良かった点

- 本人に関して
 - 具体的な将来像がつかめ**身近に感じられる**ようになった(14名)
 - 薬剤師という職業像をつかめ**華(格好)**が広がった(8名)
 - モチベーションが上がった(5名)
 - 積極的に質問でき知識が深まった(4名)
- SGDに関して
 - 意見交換(コミュニケーション)できるようになった(29名)
 - 他人の意見を知り参考になった(26名)
 - 友人ができ、仲良く楽しく取り組めた(24名)
 - 内容を論理的にまとめ発表できるようになった(18名)
- 見学先に関して
 - 様々な職種を見学でき**雰囲気**を知ることができた(19名)
 - 実際の現場を見学でき**貴重な体験**になった(14名)
 - 貴重な体験談を**直接聞けた**(11名)
 - 病院、薬局、企業の**違い**がわかった(10名)
 - 薬剤師の業務内容、イメージがつかめた(8名)

改善点

- 本人に関して
 - 積極的な質問ができなかった(19名)
- SGDに関して
 - 議論を**活発**にできなかった(16名)
- 見学先に関して
 - 企業・博物館・部の見学で、**働く薬剤師の姿**が見えなかった(8名)

7. 見学先側

良かった点

- 見学態度に関して
 - 真面目、熱心、学習意欲**あり(43施設)
- 服装に関して
 - きちんとした学習らしい清潔感**ある白衣姿(41施設)
- その他
 - レポート集の送付は有意義**(12施設)
 - 他大学に比べ、**格好は優秀**(6施設)
 - 初心に裏れた、刺激になった(2施設)

改善点

- 見学態度に関して
 - 事前に**質問の用意、メモ取り**の指導(5施設)
- 服装に関して
 - 暑そう、もつと**軽装**に(3施設)
- その他
 - 印象が薄れるので**アンケートを早く**(2施設)
 - 不十分な対応**しかできず申し訳ない(5施設)

8. H25年度改善点(フィードバック)

- 見学先変更
 - くすり博物館見学を**3施設**追加、各10名見学に変更
- アンケートに関して
 - 薬局見学时に直し**、その後すみやかに回収し、態度・服装等に問題があれば、成績に反映させる。

9. まとめ

- SGDを通じた学習をほぼ毎週行い、コミュニケーションスキルやプレゼンテーション能力を身につけながら、徐々に意図を高め、実際の施設見学を実施したことで、各自が**高い視点から見学に臨む**ことができ、結果として**高い成果**を得ることができた。
- これらの技能は、将来、特に**患者や医師、看護師との間で重要**となることであり、入学後間もない1年生に実施した意義は大きい。副次的ではあるが、このような**動機付け**を行ったことで成績不備等による留年者数を抑えることができた。(3名/232名)
- このようなSGDによる教育効果は、薬学部のみ該当するものではなく、**広く他学部でも導入可能**であり、特に**就活能力を高められる**と考える。

取組⑬:リフレクション

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) SGDと早期体験学習の連携による初年次教育の充実 (副題) 学生指導と専門能力啓発の実践
13	取組主体	薬学部
	取組責任者	薬学部 教授 金城 順英
1. 取り組みに対する主な質問とその回答		
<p>①SGDには薬学部教員が全員参加するのか →基本的に助教も含め全員参加である。</p> <p>②早期体験学習では何を学ぶのか →学生がSGDを通して何を学ぶべきか考え早期体験学習を通して学んだことを確認する。</p> <p>③薬学部の学生は比較的優秀な学生が多いと思うがこのような体験学習が必要なのか →医学科、看護学科に比べ、入学時に医療系に進学したという意識の低い学生が多い。そのため、実際の医療現場などを早期に体験することで、意識の改革、モチベーションを上げることに繋がっている。</p> <p>④KJ法をSGDでどのように生かすのか？ →KJ法は意見の集約に最適な方法であり、まだ入学もない多様な価値観をもった学生の考え方を抽出し、まとめるには最適な方法である。</p> <p>⑤早期体験学習の前後で学生の意識はどのように変化するのか？ →確実にモチベーションがあがる。</p> <p>⑥単位認定は？ →通年で1単位である。</p> <p>⑦薬学教育に関わる教員の一体感はどのように形成されるのか →薬学教育者ワークショップにほぼ全員の薬学部教員（助教を含む）が参加し、教育に関する意思の統一に繋がっている。</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
多くの賛同する意見を頂戴し、有り難かった。		
3. 今後改善すべき点		
初年次教育として有用性は高いことがわかったが、それが3年次以降の専門教育に有効的に繋がってはいない。2年次における同様の教育の開発が課題。		

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) 課外教育による総合的学士力の養成 (副題) 学内外行事参加と専門知識の充実による社会での応用力の涵養
14	取組主体	人文学部 東アジア地域言語学科
	取組責任者	人文学部 東アジア地域言語学科 教授 甲斐 勝二
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>本プログラムでは、学科で準備する各種の課外活動へ学生を誘うことにより、学力はもとより、社会での積極性・行動力・企画力が身につくようにと、以下のような取り組みを行った。</p> <p>まず4月、新入生を対象とした「フレッシュマンセミナー」を行った。企画は上級生が担当した。新入生の中には本学科を第一志望としなかった学生もいるが、このセミナーで新しいスタートを始めようと、やる気を起こしている。</p> <p>福岡国際映画祭では本学科の教員と学生による「字幕制作映画上映会」を行い、福岡では珍しい映画を市民に公開した。会場では学生が市民に対応している。「七隈映画祭」でも同様に、地域の東アジア理解に微力ながら貢献したと考える。</p> <p>「ネイティブトーク」では本学科の学生が通訳を引き受けた。通訳を担当した学生は通訳の輪郭を知り、聞く側は学科の先輩の通訳の様子を見ることで良い刺激を受けている。</p> <p>スピーチコンテストは予選で選ばれた1年生、2年生が主役だが、その企画は上級生たちが行った。これにより学年を越えた親近感を構築できた。</p> <p>「キャリアアップセミナー」は今年は3回行った。今年は11月に宿泊による合同セミナーの一部として本学科の卒業生2名の講演を聞いた。一人は旅行業に携わる卒業生、一人はボランティアNPOで活躍する卒業生で、学生たちはその卒業生の仕事に刺激を受け、合同セミナーでは深夜まで話を聞いていた。</p> <p>全学年による「合同セミナー」は、学年を超えた交流のよい機会となった。特に留学体験者の上級生たちからの体験は、在学生の留学希望者の心配を解決し、本学科からの留学希望者を増やすものとなっている。</p> <p>このほか、映画会や語学検定の勉強会・学術講演会などの企画を行い、学生に積極的な参加を呼びかけた。それぞれ一定数の学生が呼応している。昨年度に比して企画自体も増え、その内実も充実させ得たものと信じている。</p>		



学科教育各種企画の実施状況と参加者

……の数字は報告書の掲載頁数

前期～

4月6～7日 フレッシュマンセミナー …… 1

大学生としての自覚を（新生64名中62名の参加）

学生：「この学科に来て良かった」「まじめに授業に出ようと思った」

5月17日 第一回 映画鑑賞会 …… 2

映画で地域や時代に興味を（参加30名程度）

（他 5/7 6/28 7/5 7/12 7/19 10/23 10/30 11/6 11/13 11/20 11/27 12/4 12/11 12/18）

6月23日 第一回 キャリアアップセミナー …… 3

東アジアで活躍するには（参加者132名 他に11/7 12/8）

学生：「働く目標ができた」「日本と海外の企業に関心を持った」

7月14日 ネイティブトーク …… 4

先輩の通訳で原語を聞こう（他に10/27に開催 のべ77名の参加）

学生：「現実味があつた」「ヒアリングの力を付けたい」「通訳の先輩が頑張っていた」



後期～

9月29日 第4回福大生による字幕映画制作

成果発表会（天神I動[®]-ホール） …… 5

学生と教員による字幕作成映画を公開（一般参加者164名）

市民：「翻訳された学生は素晴らしい」「わかりやすかった」「レベルが着

実に上がっている」「また来年も来たい」

11月17～8日 LA 合同セミナー …… 6

内定の決まった先輩からの話 卒業生の今・留学生の経験談

学年を越えた情報の共有を（学生62名参加/卒業生2名参加）

学生：「交流を深められて良かった」「貴重な体験が聞けた」

「就活の話や将来の話、自己PRも書けて良かったです」

12月8日 スピーチコンテスト …… 7

1 / 2年生の実力試し（参加者102名・審査委員学外者4名）

3・4年生が実行委員となって1・2年の発表会を企画

12月21日 学術講演会 …… 8

本格的な講義を聴こう（韓国・淑明女子大学校教養教育院金応教教授）

（参加者70名 他学部からも参加）

学生：「文学にも興味が高まりました」「リスニングの力を付けたい」

「先生の歌うてきてました」「もっと深く尹東柱の詩を知りたいと思った」

12月22日 第2回七隈映画祭 …… 9

学生が授業で作った字幕を市民に公開コンテスト・梁木靖弘（福岡国際映画祭ディレクター）講演

（学生72名・一般32名の参加）

小学生：「ゆうきを出したら何でもできることが分かりました」



《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) 課外教育による総合的学士力の養成 (副題) 学内外行事参加と専門知識の充実による社会での応用力の涵養
14	取組主体	人文学部 東アジア地域言語学科
	取組責任者	人文学部 東アジア地域言語学科 教授 甲斐 勝二
1. 取り組みに対する主な質問とその回答		
<p>①総合的学士力とはどのようなものか： 個別のものを統合し、各種企画作業の中で自分の役割を考えて仕事のできる力。</p> <p>②学生への効果は： 交流の機会を増やすことで、友人が増え、その結果退学者が少なくなる効果がある。 入学した学生が大学に期待する情報が上級生から得られる。留学へ出る学生が多いのはその効果。 教員と学生との間の距離が近くなり、学生が相談に来やすい状況が生まれる。</p> <p>③これだけの行事だと教員の負担が大きいのではないか： 大変だが、学生との接点を増やすことで、各種の問題に早めに手を打つことができる。その結果、後の負担を減らすことになる。ただし、研究にかけるべき時間を行事の遂行にまわさざるを得ず、その点厳しいところがある。</p> <p>④単位と関係させる気はないか： 主体性を導くには単位と関係させない方が良い。単位と関係させると、授業の一環となり、学生の積極性を導けても、それは本当の主体性とはつながらないのではないか。</p> <p>⑤行事には学生全員が参加するのか、教員はどうするのか： 企画・実施・運営などで関係する学年の学生に声をかけるが、参加は自主性に任せる。 行事自体は教員が枠組みを作るが、学生がその実行委員会を作り、企画や運営など行うようにしている。これによって、各学年が交流できるよう考えている。学生はそれぞれの力量に合わせた仕事を引き受けることになる。 教員の参加は、行事の内容によって限定的なものもあるが、各種のセミナーなどは教員全員に参加を要請する。</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<p>① フレッシュマンセミナーに対する質問が多く、初年次教育において同様の問題を他学部他学科でも抱えていることが分かった。</p> <p>② 教員の教育行事参加の負担への心配が高かった。</p>		
3. 今後改善すべき点		
<p>① 行事の統廃合を通して、教員の負担を減らすとともに、一層大きな教育的効果が上がるように考えたい。</p> <p>② 課外活動の企画を、授業の延長につながるように考え、大学で身につける学力を学生自身が主体的に向上させる努力を導きたい。</p> <p>③ 昨年度は、政治問題で難しかった海外での企業訪問や研修などを計画に入れてより積極的に実行したい。</p>		

取組⑮: 取組概要

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) 体験学習と活用した初年次教育の実践 (副題) 教育環境の変化に対応した新たな初年次教育プログラムの開発に向けて
15	取組主体	人文学部 歴史学科
	取組責任者	人文学部 歴史学科 准教授 福嶋 寛之
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>昨今の教育環境をめぐる変化は激しく、特に初年次教育段階においてはそれが著しい。昨年と同様の方法で授業に臨むのは不可能ではないかと毎年戸惑うほどである。その根幹にあるのは、学力低下の問題もさることながら、情報の氾濫ゆえに進行している実社会へのリアリティーの希薄さにあるように思われる。そうした意識のもと、本プロジェクトでは現地研修(体験学習)を核とし、それを1年次必修科目(「歴史学入門演習」という日々の授業とリンクさせることで、継続的かつ計画的に実践していく点に特徴を与えた。今年度は現地研修を8月下旬/沖縄と定め、それを挟む形で下記のような取り組みを行った。まず前期授業では、口頭報告や質疑応答の技法など、一通りの基礎的訓練を行った後、現地研修にむけての事前学習へと入り、各々のテーマを設定させた。8月の現地研修では、大卒のテーマ別のコースだけを教員側で設定し、あとは学生のテーマに基づいて調査・研修を実践させることに重点を置いた。後期の授業では、現地研修でこそ得られた情報や資料の整理から始めさせ、それを既存の文献と照らし合わせることで内容を深化させる、その成果を授業にて口頭報告させ、さらなる調査研究へと向かわせ、再び成果を口頭報告させる。以上のようなサイクルを複数回行い、最終的にその成果は400頁に及ぶレポート集として結実した。</p>		



●コンセプト

- ①核としての現地研修…「実物」に触れ、自ら考え、追究する力を養う。
- ②1年次生必修ゼミ（歴史学入門演習）とのリンク…日常的・継続的な教育実践が可能。
- ③沖縄という舞台…日本史・東洋史・西洋史・考古学にまたがる豊富なテーマ。バスで移動できる利便性、セキュリティーの問題から。

●活動内容

- 4～5月 基礎的な学習能力（読む・書く・話す・議論する、など）の確認・トレーニング。
- 5～6月 現地研修にむけての事前学習の開始と調査研究、およびその反復。
- 7月 学生個々に調査研究計画および研修旅行計画を立案させる。
- 8月下旬 沖縄現地研修（歴史遺産コース・米軍基地コース・遺跡発掘コース・東アジアコースの4つに分かれて活動）。



- 9～11月 現地研修で得られた情報・資料の整理。授業にて成果報告（口頭報告と質疑応答、さらなるリサーチと再度の口頭報告。以上のサイクルを、後期授業を通じて反復）。
- 12月～1月 成果の文章化。そして教員による添削指導。
- 2月 各原稿のとりまとめ作業。レポート集の編集。
- 3月 レポート集『福岡大学歴史学入門演習成果報告集』の刊行（400頁余）。

●得られた成果

- ①自身の皮膚感覚を通じてテーマの設定・発見。
- ②そのテーマを1年間掘り下げ続け、成果を自分の言葉で、かつ長い文章でもって表現するというかつてない経験。
- ③協同作業を通じての人間関係の構築という副次的効果。



●見えてきた問題点—今後の展望—

- ①学生のなかに存在する基準は相対評価
周囲からみておかしくない程度の努力にとどめる。批判は単なる否定として理解する傾向。ただし1年間で随分改善されるのも事実。
- ②専門教育との乖離のさらなる進行
初年次教育の長期化。一方で専門教育（卒論など）の水準は維持したいという教員側の理想→早晚、初年次教育の次の段階（2年次教育）の位置づけが問題となると予想。
- ③教員側の負担
学生の能力は潜在的には変わっていない。ただ本気になるのが遅い。∴継続的な仕掛け。しかし教員の側は1年次生から大学院生の研究指導まで行う。教員個人の単発的な努力では打開不能。

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) 体験学習と活用した初年次教育の実践 (副題) 教育環境の変化に対応した新たな初年次教育プログラムの開発に向けて
15	取組主体	人文学部 歴史学科
	取組責任者	人文学部 歴史学科 准教授 福嶋 寛之
1. 取り組みに対する主な質問とその回答		
<ul style="list-style-type: none"> ・「学生の内在的基準は相対評価」とあるが、どういうことか？ → 周囲（この場合、学生）の視線をうかがって努力のレベルを調整しているということ。一端ハードルが上がれば良い作用として働くが、大体は逆に働く。そして、こうした姿勢からは、自分で設定したテーマをどこまでも追究していくという姿は導かれない。ただし、1年で随分改善されるのも事実である。 ・初年次教育と専門教育の乖離とはどういうことか、もう少し具体的に。 → かつての導入教育は文字通り専門への導入教育であった。しかし現在は高校生から大学生へ、いかにシフトさせていくのかに変容し、専門教育の導入・基礎教育は事実上、2年次段階へと移行している。専門教育のゴールである卒論の水準を落としたいくないという教員側の理想からすれば、長期化した初年次教育からどのように専門教育へシフトさせていくのかが大きな問題となっている。 ・基礎的な学習能力の確認、訓練は本当に4、5月で終わることができるのか？ → 発表と質疑応答の反復という形で実際には引き続き行われることになる。今回の企画に関していえば、最終的に文章化までさせた点に効果があったと判断できる。 ・教員の負担はどうであったか？ → やはり導入教育の担当者に集中せざるを得ないのが実情。そしてそれぞれの教員は導入教育だけを担当するわけではない（大学院教育まで担当する）。こうした点でかなり負担が大きいのが実際である。 ・必修科目とリンクさせたことで問題点は出なかったか？ → 現地研修を核とした今回の企画は、学生間の協同性をかなり求めるものである。この点は人間関係の構築という副次的な効果をねらった部分でもあったが、逆に作用する部分もあったことが後から判明した。すなわち、何らかの事情で単位を落とした場合、その学生は次年度の学生とともに活動をともしせねばならず、結果、リカバリーが極めて困難になる。この点は再検討要である。 		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<ul style="list-style-type: none"> ・直面している問題については他のプロジェクトとかなり共通していることが分かった。同時に、万能薬も無いことにも気づかされ、継続的な取り組み、情報交換が必要であると痛感した。 		
3. 今後改善すべき点		
<ul style="list-style-type: none"> ・継続的な仕掛けが必要でありながら、それをこなす教員側の負担はかなり大きい。よって、今回のような大規模な企画とともに、もう少し日常的に行いうる簡易な方法を開発すべきであると考えた。 		

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) 科学的国際交流による表現力の継続的実践教育 (副題)
16	取組主体	理学部 物理科学科、化学科
	取組責任者	理学部 化学科 教授 川田 知
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>日韓交流プログラムでは、蔚山大学校自然科学大学化学科との国際交流を行う。化学科および物理科学科ナノサイエンスインスティテュートコース4年および大学院生を対象とし、英語によるコミュニケーション能力の向上と科学的専門分野のグローバルな理解のため、オーラルならびにポスタープレゼンテーションを英語による学会形式で行うものである。</p> <p>本学の学生・院生54名と教員4名、事務職員1名が8月20～23日に蔚山大学校を訪れ、第8回日韓交流セミナー「Univ. of Ulsan - Fukuoka Univ. Joint Seminar」を開催した。セミナー初日は夕方からミキサーを行い、2日目は終日、口頭・ポスター発表を英語で行った。3日目は企業（現代重工業）を訪問した。</p> <p>日中交流プログラムでは、上海交通大学にて英語による材料科学に関する講義「材料科学国際演習」を受講する。演習最終日にはディスカッションタイムを設け、能動的に生きた英語を使うことができるようにしている。</p> <p>ナノサイエンスインスティテュートの3年次の学生18名が8月20～24日の4泊5日で現地に赴き、受講した。授業の最後では、学生はどこを理解し、どこが理解できなかったかを1人ずつ発表し、教員とのディスカッションを行った。尚、この国際演習には本学の4名の教員が同行した。</p>		



科学的国際交流による表現力の継続的実践教育 理学部化学科・物理科学科

1. はじめに

国際交流のあゆみ

- 福岡大学理学部化学科と蔚山大学校化学科の間で教員による学術交流
 期間：平成6年(1994)～平成16年(2004)までの11年間
 内容：毎年1回(3泊4日)、教員3～4名が交互に大学を訪問
- 学生による国際交流
 ☆ 福岡大学「特色ある教育」プログラムに採択
 期間：平成17年(2005)～平成22年(2010)までの6年間
 ・日韓交流プログラム：日韓交流セミナー(化学科4年生、大学院生)
 ・日中交流プログラム*：材料科学国際演習(Nano Inst. 3年生)**
 * 2010年実施、** Nano-science Institute(化学科と物理科学科で設立)
- ☆ 福岡大学「魅力ある学士課程教育支援」プログラムに採択
 期間：平成23年(2011)～平成25年(2013)の3年間(1年間延長)

達成目標

☆英語による、情報収集、プレゼンテーション、コミュニケーション能力の向上
 交流セミナー
 卒業論文、修士論文研究実験でそれまでに得られた成果を簡潔にまとめ、
 英語にて学会形式で発表(口頭発表、ポスター発表)、ディスカッション
 材料科学国際演習
 英語による講義、演習、ディスカッションを通して、最新の材料科学を学ぶ

達成度の検証方法

交流セミナー
 同学の審査員による点数評価：Presentation Awardの授与
 卒業論文発表会と報告レポート(23年度からの改善点、25年度より単位化)
 材料科学国際演習
 単位認定(事前事後指導(e-Learningの導入、23年度からの改善点)、
 演習中の受講態度、提出物やレポート)
 アンケート調査

2. 平成24年度の成果

日韓交流プログラム：第8回日韓交流セミナー

期日：平成24年8月20日(月)～23日(木)の3泊4日
 会場：蔚山(ウルサン)大学校
 参加者：総計108名

	学部生	院生	教員	Total	
本学	26	28	4	58*	他に事務職員 1名が同行
蔚山	25	18	7	50	
Total	51	46	11	108	

概要

- 7月初旬：ガイダンス
 ～8月中旬：事前指導(ポスター、スライド、発表原稿作成および発表練習)
 初日：博多港より釜山港へ。大学校所有のバスで蔚山へ移動
 2日目：国際学会形式で、英語による口頭発表とポスター発表
 3日目：見学；現代重工業(英語による質疑応答)、世界遺産(石窟庵、仏国寺)
 4日目：大学校のバスで釜山に移動。釜山港より帰国
 8月下旬：報告レポートの提出
 2月中旬：卒業論文、修士論文発表会



慶尚日報(釜山の日報)に掲載される



2012年8月20日(月)～23日(木)の3泊4日、本学理学部化学科と蔚山大学校化学科の間で、第8回日韓交流セミナーが開催された。参加者は本学理学部化学科の学部生26名、院生28名、教員4名、蔚山大学校の学部生25名、院生18名、教員7名、事務職員1名の計108名であった。セミナーは7月初旬に本学でガイダンス、事前指導(ポスター、スライド、発表原稿作成および発表練習)が行われ、8月中旬に蔚山大学校へ移動した。初日は博多港より釜山港へ、大学校所有のバスで蔚山へ移動した。2日目は国際学会形式で、英語による口頭発表とポスター発表が行われた。3日目は、現代重工業(英語による質疑応答)、世界遺産(石窟庵、仏国寺)を見学した。4日目は、大学校のバスで釜山に移動し、釜山港より帰国した。8月下旬には報告レポートの提出が行われ、2月中旬には卒業論文、修士論文発表会が行われた。

日中交流プログラム：材料科学国際演習

期日：平成24年8月20日(月)～24日(木)の4泊5日
 会場：上海交通大学 金属基複合材料国家重点実験室
 参加者：総計22名(学部生18名、教員4名)

概要

- 7月初旬：ガイダンス
 7月初旬～8月中旬：事前指導
 (英語e-Learning、専門用語学習、英語講義資料和訳、自己紹介文作成)
 初日：福岡空港より上海浦東国際空港へ。ホテルへ移動
 2日目：材料に関する英語による講義と演習
 3日目：材料に関する英語による講義と演習
 4日目：ディスカッション、市内見学(上海博物館、上海科学技術館など)
 5日目：万博会場跡地など市内見学、上海浦東国際空港より帰国
 8月下旬：事後指導
 (上海交通大学教員へお礼の手紙、演習内容のまとめ・レポートの作成)



State Key Laboratoryでの自然したディスカッション



教育効果

- 英語によるコミュニケーション能力の向上
- 英語への学習意欲が向上
- 国際感覚の涵養
- グローバル社会で活躍できる人材の育成

大学院進学率の上昇
 国際的企業への就職



3. 今後の課題

- | | | |
|------------------------|---|----------------------------|
| 1. プログラムを継続するための財源の確保 | → | 文科省への申請と、日韓留学プログラムへの展開を模索 |
| 2. グローバル社会で活躍できる英語力の修得 | → | 英語を母国語とする国の大学との交流プログラムを検討 |
| 3. 日中交流プログラムへ実験実習の導入 | → | 事前指導の再検討と、現地スタッフとの綿密な打ち合わせ |

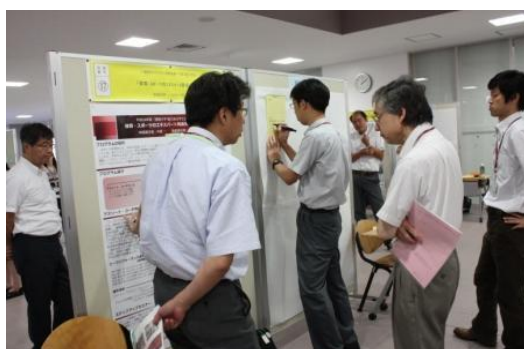
《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) 科学的国際交流による表現力の継続的実践教育 (副題)
16	取組主体	理学部 物理科学科、化学科
	取組責任者	理学部 化学科 教授 川田 知
1. 取り組みに対する主な質問とその回答		
Q1 学生の参加は希望者のみですか？ A1 科目として単位化しており、それを履修登録した学生が主に参加します。		
Q2 大学院生は参加していますか？ A2 このプログラムは学部学生のための支援ですので、大学院生は対象外ですが、日韓交流セミナーにあわせて大学院生も参加できる研究発表会を行っており、大学院生はその発表会に自費で参加しています。大学院生は交流や発表機会を通してかなり刺激を受け、大きく成長していますので、このプログラム自体も大学院生を対象とするものに拡大できれば、大学院まで含めた一貫教育としてさらに充実した取り組みになるのではないかと考えています。そのための支援が得られればと願っています。現状では、大学院生にとっては研究発表することによって奨学金返還免除審査ポイントとしてカウントされることがメリットでしょうか。		
Q3 実施時期が8月なので、卒論研究の成果発表は難しいのでは？ A3 おおくの4年生はこの時期までに卒論研究の結果が得られていないので、研究目的や計画について発表します。		
Q4 予算について。 A4 今年度までは予算がついていますが、十分ではありません。例えば、日韓交流セミナーで訪韓する場合には学生に渡航費の2割を自己負担させています。一方、迎える場合には、交流会の補助がないので捻出に苦労しています。来年度以降の予算の確保が課題です。		
Q5 このプログラムを通して、学生の成長はどうですか。 A5 二十歳前後の多感な時期に海外を訪れて、異国の文化を知り、英語で講義を受け、英語でのコミュニケーションの楽しさと難しさを認識することは、学生にとって人生観が変わったり、自信がついたり、たとえ失敗しても深い反省となってその後の人生に大きな影響を与えたいと思います。経験した学生たちを見ると、ひと皮むけて成長したと感じます。		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
他大学出身の先生からの情報として、大学院生を対象とした同様なプログラムが多いとのことでした。また、福岡の地の利のためか、交流の相手先は韓国や中国が多いようです。今後は、大学院生を中心にしたプログラムへ展開も視野に入れたいと考えています。また、学科ではなく、学部のように大きな単位で行うとマスコミに取り上げられる機会もあって宣伝効果があることがわかりました。		
3. 今後改善すべき点		
改善すべき点の一つは学生からの要望が多かった「交流プログラムの期間が短い」という点です。改善策として交流プログラムを合宿形式で行うことがあげられますが、100名程度の学生を収容できるような学内施設が必要となるなどの課題も多いです。その他、改善すべき点として、日韓や日中だけでなく、英語圏の大学との交流セミナーや演習の拡張などが考えられます。当プログラムの教育的効果はすぐには現れません。見えるものだけでなく、「見えないもの」への継続的な支援をお願いしたいと考えます。		

取組⑰: 取組概要

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) 体育・スポーツのエキスパート育成プログラム (副題)
17	取組主体	スポーツ科学部
	取組責任者	スポーツ科学部 教授 田中 守
取組概要 (取り組みの目的・活動内容)		
<p>スポーツ科学部では、平成22年度入学生から新カリキュラムをスタートさせている。学生が、就職等の進路先も視野に入れた科目履修ができるよう方向付けをするための「コース推奨科目群」を設定したもので、アスリート・コーチコース、トレーナーコース、保健体育教員コース、健康運動指導者コース、生涯スポーツ教育コースの5コースが設定されている。本プログラムは、これらのコースに合わせた5つのプログラムから構成される。</p> <p>アスリート・コーチ育成プログラムでは、前期には国内外で実績を残した日本を代表する選手や指導者を講師に招き、特別講師5名に講義をしていただいた。また後期には、グローバル人材育成も目的に海外研修6名を派遣した。アスリートサポートプログラムでは、栄養サポートとして学生自身が栄養摂取状況をチェックできる「スポーツ栄養ナビ」を導入した。トレーナーサポートとしてトレーナーコース学生対象の実技練習を行った。バイオメカニクスサポートとして動作分析機器の貸し出しを行った。フィジカルサポートとして身体組成や体力測定を実施した。保健体育教員採用試験対策プログラムは、教員採用試験前の5月17日から8回実施された。また後期には、保健体育教員コース3年次生33名を対象に授業として行った。健康運動指導士試験対策プログラムでは、4年次生対象の健康運動指導士の試験対策勉強会を、後期には3年次生対象に授業の中で健康運動実践指導者の試験対策を行った。野外教育実践プログラムでは、「中級スポーツ指導者養成講習会」へ1名、「徳地アドベンチャー教育プログラム講習会」に5名、計6名を派遣した。</p>		



平成24年度「福岡大学 魅力ある学士課程教育」
体育・スポーツのエキスパート育成支援プログラム

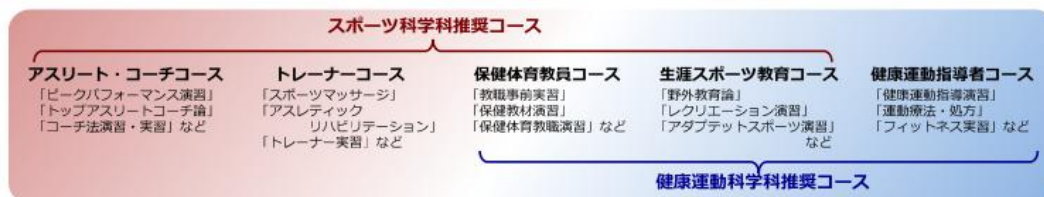
申請責任者：中原 一 取組責任者：田中 守



プログラムの目的

スポーツ科学部では、平成22年度にスタートした新カリキュラムの完成年度（平成25年度）に向けて、様々なプログラムを準備している。本カリキュラムは、学生が就職等の進路先も視野に入れた科目履修ができるよう方向付けをする（コース推奨科目群の設定）とともに、学年が上がるにつれて専門性が高められるよう編成されたものである。本プログラムでは、新カリキュラムの推奨コースと連動し、アスリートやコーチ・トレーナー、保健体育教員、健康運動指導者、そして野外教育・レクリエーション指導者などの体育・スポーツのエキスパート育成を目指している。

プログラム紹介



アスリート・コーチ育成プログラム

「ピークパフォーマンス演習Ⅰ」の講義では、国内外で活躍する指導者や選手を招聘し、継続的な動機づけと明確な目標設定を行わせ、より高度な競技レベルへのチャレンジ精神と自発的に学ぶ姿勢を身につけさせることを目的としている。また、「ピークパフォーマンス演習Ⅱ」では、6名の海外研修支援を行った。

全国大会ベスト4以上の成績は、個人で14名、団体で4種目、さらに個人での国際大会出場も多数輩出した。



ピークパフォーマンス演習
 (招聘講師紹介)

- 渡戸 康広 氏 (元プロサッカー選手 日本代表)
- 村山 祐介 氏 (元プロサッカー選手 日本代表)
- 柴田 亜衣 氏 (アテネ五輪女子800m自由形 金メダリスト)
- 岩本 勉 氏 (元プロ野球 日本ハムファイターズ)
- 吉原 知子 氏 (元全日本女子バレーボール選手)



海外遠征

- スペイン ウラカン・バレンシア (サッカー部4名)
- アメリカ合衆国 カリフォルニア州 パロアルト (水泳部2名)



ステップアップセミナー

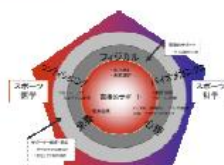
キャリア教育の一環として、学生の志望で上位となる業種の経験者を招聘し、就職に至るまでの経緯、求められる人材、必要とされる要素について指導を仰いだ。

招聘講師紹介

- 木下 真太郎 氏 (大塚製薬株式会社)
- 道下 亨 氏 (アビス/福岡)
- 大塚 唯史 氏 (アビス/福岡)
- 武井 隆治 氏 (青年海外協力協会)
- 山野 明 氏 (福岡県障害者スポーツ協会)
- 重富 朝登 氏 (宮崎県日向市消防局)
- 松原 建史 氏 (健康科学研究所)
- 隈本 圭輔 氏 (株式会社リクルート)

アスリートサポートプログラム

アスリートサポートプログラムは、スポーツ医学、コンディショニング、栄養、バイオメカニクス、心理学、フィジカルの各分野で連携したサポート環境下で学生教育を行う現場、環境を提供し、各専門分野におけるサポーターとしての教育、育成につなげることを目指している。



保健体育教員採用試験対策プログラム

保健体育教員採用試験の合格者増を目的として、3年次生を対象とし、早期段階にて教員採用試験への動機づけを行う。定期的に勉強会を開催し、採用試験前には外部講師も招聘し、集中的に対策セミナーを開催した(全8回実施)。毎回、17名程度が参加し、3名の現役合格者(例年0~1名)を出すことができた。

健康運動指導士試験対策プログラム

本学は健康運動科学科を対象学科として健康運動指導士および実践指導者の養成校として認定されている。これに伴い、3年次に健康運動実践指導者試験対策のための実後試験および筆記試験講座を開催、4年次には健康運動指導士対策勉強会を開催した。

平成24年度健康運動指導士認定試験には12名、健康運動実践指導者認定試験には8名が受験し、全員が合格した(全体の合格率は約57%)。

野外教育実践プログラム

野外教育実践プログラムでは、日本障害者スポーツ協会が主催する「中級スポーツ指導者養成講習会」に1名の学生、山口県国立自然の家の冒険教育施設指導者講習会5名の学生が参加し、研修支援を行った。冒険教育施設に参加した学生は、参加者として体験しながらも「より指導者的な観点での学び」を求める学生に近づいたと考える。



取組⑰:リフレクション

《萌芽的なすぐれた教育改善への取り組み支援》

取組番号	取組名称	(主題) 体育・スポーツのエキスパート育成プログラム (副題)
17	取組主体	スポーツ科学部
	取組責任者	スポーツ科学部 教授 田中 守
1. 取り組みに対する主な質問とその回答		
<p>・前年度からの発展は？ →前年度と同様のプログラムであるが、新カリキュラムスタート3年目であり3年次の授業と各プログラムとが連動している科目が多くなったので、多くのプログラムが単位化されている。ちなみに、2年次の授業と連動しているプログラムは「ピークパフォーマンス演習Ⅰ」のみである。なお、成果については前年度同様のいろいろな形で表れており、事業報告書（冊子）を参照いただきたい。</p> <p>・アスリートサポートプログラムに工学部と協力できるところはないか？ →試合やトレーニング映像を効率よく観るためのデータベース化するアイデアや提案をいただきたい。</p> <p>・プログラム参加学生の成果は？ →アスリート・コーチ育成プログラムでは、多くの受講学生のレポートから、見えない成果（刺激）があったと思われる。全国大会での上位入賞や国際大会出場などは、本プログラムが、「特色ある教育プログラム」以降、「魅力ある学士課程教育支援」へと継続していることもあって、以前に比べると増加していると思われる。教員採用試験合格者は、昨年度現役合格3名を出し、例年の1名程度と比較すると長い間みられなかったことである。本プログラムの成果かどうかはわからないが、徐々に成果との因果関係が見えるようにしたい。健康運動指導士および健康運動実践指導者試験の合格者は、合格率100%と全国トップであり、本プログラムの成果と考えられる。トップアスリートの海外研修、野外教育実践プログラム、2年次からのキャリア教育の一環としてのステップアッププログラム等も、多くの受講学生のレポートから、見えない成果（刺激）があったと思われる。</p> <p>・体育・スポーツのこころへの効果がQ-Linksでの発表で見られたが、こころへの効果はなかったか？ →本プログラムでは、その検証はしていない。</p> <p>・学生募集に就職の方向性、資格との関係、就職率などが重要と思うが？ →本プログラムは、そのことを視野に入れた新カリキュラムと連動させているので、学生にも入学後から将来の方向性を意識するように勧めている。そのようなカリキュラムと本プログラムの成果等を学部のホームページ等で紹介することにより、学生募集に効果がみられることを期待したい。</p>		
2. 質疑応答を通じて得られた知見		
<p>・アスリートサポートプログラムの中で、工学部との連携ができる可能性があった。</p> <p>・教員採用試験プログラムは、エクステンションセンターとの協同が必要。</p> <p>・就職に関する多くのデータを提示することも必要。</p>		
3. 今後改善すべき点		
<p>・質疑応答を通じて得られたことを平成25年度に繋げたい。</p> <p>・本プログラムの成果を、見える部分としてより具体的に冊子に残す。</p>		

クロージングセッション

<まとめ、閉会挨拶>

教育開発支援機構長 今泉博国

機構長の今泉でございます。本日は午後から長い時間にわたってお疲れさまでした。特にポスターセッションは限られた時間内で活発な議論をしていただき、さらにとりまとめまでしていただくという本当に大変な作業をありがとうございました。私も17の取り組みを見せていただきました。昨年からのようなポスター展示を行っておりますが、ポスターも昨年に比べると、具体的なアンケート結果を示していただいたり、あるいは学生諸君が書いた手書きのポスターを提示していただいたり、いろいろな工夫が凝らされていました。

それから、専門分化ということが佐々木先生の話にもありましたが、これをコラボしようとする、専門化、分化したものを繋げようとする取り組みも行われていたことは大変興味を持ちました。

それから多くの取り組みでピアサポーターというのでしょうか、学生諸君や院生諸君の力を借りて、下級生のレベルアップ、学ぶ力を高めていこうとする取り組みが非常に増えたのではないかと思っております。

本日はまとめということで、取り組みに対する主な質問とその回答、質疑応答を通して得られた知見、今後改善すべき点という三点について書いていただき、すでにかかなりの取り組みの方から出していただいております。限られた時間ですので、一つ一つご紹介はできませんが、やはり教育環境として「場」が必要だということ、これは我々大学当局が改善すべきことかもしれませんが、そういったことが改善すべき点として出てきていました。また、学生諸君が有効に活用できるようなポートフォリオの開発をしないとイケないだろうというような議論もされております。

それから、ある学部で展開されている今回の取り組みが、同じ自然科学の領域でも他の学部には十分浸透していないということもあるようです。そういった情宣上の問題も今回のリフレクションでいただいております。まだまだたくさんあると思いますが、教育改善活動フォーラムの報告書とかたちでまとめますので、ぜひみなさま方にはまたご覧いただきたいと思います。今回のことで当該の取り組みの方向性、改善点もわかったと思いますので、ぜひ今日の様々な意見をご参考にされて、教育の現場で改善を進めていただければと思っているところであります。

最後になりますが、本日のテーマといたしましては、生涯学び続け、主体的に考える力の育成ということで、佐々木先生にご講演をいただきました。私が通っていた小学校の校歌の中に「元気で学ぼう、自分から」という言葉が一番の歌詞にありました。そして三番に「辛抱強く学ぼうよ」という歌詞もありました。これは継続的に学ぶことの重要性や主体的に学ぶことの重要性を小学校の時に教わっていたのだからと改めて思いました。もちろん今は時代が違いますし、今日の話聞けば人間的条件が変わってきているということで我々が大学生に対して主体的な学びの重要性、継続的に学ぶことの重要性を訴え続けていかなければいけないだろうと考えております。

実は、教育開発支援機構の先生が建学の精神の解釈をしてくれました。みなさんご存知のとおり、建学の精神の四つの言葉のなかで「積極進取」は四番目に位置する言葉なのですが、これは最後に

位置するのではなくて、きちんと順序があるのではないかというようなことを言われております。学びの順番としては最後のもので、基礎を欠いた空虚な積極性ややみくもの主体性ではいけないのではないかということです。まずはしっかりした考え方や知識を身につける、これは「思想堅実」です。次に柔軟なバランス感覚を身につける、これは「穏健中正」です。そのうえで自分なりの軸とタフネスを涵養する、これが「質実剛健」です。そしてそれらをふまえて最終的には質のともなった主体性、「積極進取」を身につけていく。このような解釈をされております。ですので、その意味で、今日は佐々木先生から目に見えない世界の奥行き作りという非常に意味深いお話がありましたが、想定外の様々なことに対応できるような学びを学生諸君も我々も身につけていくことは、建学の精神に適うことだと改めて思った次第です。

少し長めになりましたが、また来年に向けて、あるいは後期に向けて、先生方には学生諸君のために一層の努力を続けていっていただければと思います。今日は半日大変お疲れさまでした。ありがとうございました。

参加者数およびアンケート結果

◆参加者数

教育職員	事務職員	学生	他大学	合計
95	46	7	15	163

◆所属別内訳

所属	参加者数	所属	参加者数
人文学部	12	スポーツ科学部	7
法学部	1	エクステンションセンター	1
経済学部	3	研究所	3
商学部	6	病院	1
理学部	18	教育開発支援機構	5
工学部	19	その他	3
医学部	1	事務職員	46
薬学部	15	学生	7
合計 (本学)			148

◆アンケート 集計結果 (※学内限定)

第7回 教育改善活動フォーラム記録

2013年7月20日(土)開催

教育開発支援機構

2013年12月

福岡大学